

西部九州の刻目突帯文土器

藤 尾 慎一郎

I はじめに	V 西部九州の刻目突帯文土器に関する諸問題
II 刻目突帯文土器研究の問題点	
III 器種分類	VI おわりに
IV 型式分類と編年	

I はじめに

刻目突帯文土器とは、伊勢湾沿岸地方以西の西日本に分布する弥生時代早・前期の土器で、口縁部や胴部に1条もしくは2条の突帯を貼り付け、そこに刻み目を施した甕形土器を特徴とする⁽¹⁾。この土器が、縄文時代最終末の土器として編年の対象になってきたことは言うまでもない。

1950年代に、この土器と最古の弥生土器である遠賀川式土器は共伴することが明らかになるが、その意味について深く検討されることはなかった。ただ最古の弥生土器を決定する際の示準土器として位置づけられていたにすぎなかったのである。

ところが、1978年に福岡市博多区板付遺跡において刻目突帯文土器単純段階の水田が発見されるや、刻目突帯文土器は、縄文時代最終末の土器から弥生時代最古の土器へ、すなわち日本最古の農民の土器として認識されるようになったのである。刻目突帯文土器はいまや編年の対象にとどまらず、弥生時代の開始に関する諸問題を考える場合に、この土器の理解がポイントとなる。刻目突帯文土器の歴史的意味をなんらかの形で評価している研究が、編年研究をはじめとしていくつか試みられている。

北部九州を除く西日本地域で水稻農耕が存在したことを証明する指標として「二条甕」(例えば図23-6)を位置づける見解[泉, 1986]や、水稻農耕の開始に伴って変化したと考えられる煮沸行為について、刻目突帯文土器を通して探求する研究[岡本, 1966][山崎, 1980][藤尾, 1987 a]がある。また、刻目突帯文土器は森貞次郎が弥生文化を構成する重要な要素の一つにあげた「定型化した弥生土器」として位置づけ

られるとし、弥生時代の開始を北部九州における刻目突帯文土器の出現に求めた研究〔藤尾, 1988〕⁽²⁾もある。このように刻目突帯文土器は、様式論・機能論・時代区分論などといった多くの問題と広い分野で深くかかわっているにもかかわらず、こうした議論の基礎となる編年は、九州に関するかぎり研究者間の同意がえられたものがあるとは言えない。とくに、板付、佐賀県唐津市菜畑、福岡県糸島郡曲り田遺跡の調査以降、この地域の刻目突帯文土器編年を包括的に論じた研究はなかったといってもよい。本稿では山崎純男・島津義昭の地域設定〔山崎・島津, 1981〕に準拠して九州内をいくつかのブロックに分けて検討した後、編年案を提示する。筆者は、山ノ寺式と夜臼式の関係が、九州における刻目突帯文土器の本質をあらわしていると考え、両者の比較検討に重点をおいている。それでは、九州における刻目突帯文土器研究の問題点からみていくことにする。

Ⅱ 刻目突帯文土器研究の問題点

1 山ノ寺式土器と夜臼式土器の設定に関する問題点

九州の刻目突帯文土器研究は、つねに弥生土器との関係を追究してきた点に最大の特徴がある。この土器が研究者の目を引いたのは、遠賀川式土器と混在して出土する場合が多かったことにある。1950年代は、弥生文化の起源を探るために最古の弥生土器を特定することに最大の関心が払われていた時期である。「突帯文土器」が縄文時代最終末の土器で、遠賀川式土器と時間的に近接するとの見解は山内清男によって示されていたので、刻目突帯文土器と混在して出土する遠賀川式土器が最古の弥生土器である可能性は十分に高かったのである。現在から考えるとこのような研究環境は刻目突帯文土器と遠賀川式土器（板付Ⅰ式）が、ゆいいつ共伴する玄界灘沿岸地域に限定されて存在したものだったといえよう。瀬戸内や近畿地方では適用できない方法である。このような九州の特殊事情がこの地域の刻目突帯文土器研究に与えた影響ははかりしれない。

1951年におこなわれた福岡県粕屋郡夜臼貝塚の調査で、刻目突帯文土器と遠賀川式土器は共存することが発掘調査によって初めて確認され〔森, 1955〕、さらに板付遺跡で両者が共伴する事実が確認された。この結果、縄文土器と弥生土器の接点がおさえられることになり、縄文時代最終末の土器と弥生時代最古の土器が設定された。夜臼式と板付Ⅰ式である〔森・岡崎, 1961〕。

板付遺跡の調査で明らかになった弥生文化の実態は、水稻農耕の開始期であるにもかかわらず農耕文化としては完成された姿であったために、板付以後の研究対象はより初現的な農耕文化を求めて、弥生時代研究者主導のもとに縄文時代を遡っていくことになる。それにつれて土器の対象も、夜臼式より古く板付Ⅰ式と共伴しない刻目突帯文土器に移っていった。長崎県島原半島に所在する山ノ寺遺跡はこのような研究動向のなかで調査されたのである。調査によって明らかになったのは、板付遺跡の農耕文化とはあまりにもかけ離れた姿であった。水稻農耕には適さない立地、大陸系磨製石器に乏しい石器組成は生業形態が異なることを予想させ、玄界灘沿岸の農耕文化とは別の文化の存在が推察されたのである。すなわち九州内における地域差の考えがここに始まったのである。土器についても例外ではなく、山ノ寺遺跡出土土器を標識とする山ノ寺式と夜臼式は、系譜的にはまっすぐつながらないのではないかとする考えのあったことがうかがえる。その後おこなわれた唐津市宇木汲田遺跡の調査は、そのあたりを強く意識したものであったからだ〔九州大学、1966〕。この調査の意義を土器に関して言えば、玄界灘沿岸に位置する宇木汲田遺跡で板付Ⅰ式と共伴しない夜臼式が検出されれば、夜臼式を主体とする弥生文化の成立を玄界灘沿岸で説明できることである。⁽³⁾ 調査の結果、板付Ⅰ式と共伴しない夜臼式、すなわち夜臼式単純層を確認し、さらにコメが伴うことをつきとめて、板付Ⅰ式以前に水稻農耕の開始がさかのぼる可能性を明らかにする。しかし夜臼式単純層の土器の特徴は、板付Ⅰ式と共伴する夜臼式とそれほどの差がなく、山ノ寺式に相当するような粗剛な土器がごくわずかしかなかったこともあって、明確なかたちで夜臼式の細分はおこなわれなかった。その結果、板付Ⅰ式と共伴する刻目突帯文土器が夜臼式で、共伴しないのが山ノ寺式という編年観が20年近くも固定することになる。夜臼式と山ノ寺式を地域差とする考えを現在にいたるまで阻害している最大の原因であろう。

九州の刻目突帯文土器研究が、まず夜臼式という下限をおさえることで最古の遠賀川式土器を設定するのに役だったことは好運だったと言えるが、板付Ⅰ式と共伴する刻目突帯文土器を最初に設定してしまったことによって、夜臼式が本来の存続幅の途中で分断され九州における地域性研究に影響を与え続けることになったのは不運だったと言えよう。近畿や瀬戸内地方の刻目突帯文土器研究が、縄文晩期土器編年研究のなかで型式学的操作をへて現在にいたったのに比べると、九州の場合は層位による検証をうけ、実態に近いとはいっても論理性にかける面があったことは否定できない。

2 刻目突帯文土器の細分に関する問題点

九州の刻目突帯文土器に対する本格的な編年研究は、1978年以降つぎつぎに調査された板付、菜畑、曲り田遺跡を契機に始まる。それぞれの調査をもとに山崎純男、中島直幸、橋口達也によって提示された編年案は、各遺跡のもつ地域の特徴を強く反映したものとなっている。

山崎は、まず深鉢・甕、壺、鉢形土器を法量や形態から細かく分けて、系統を重視した器種分類をおこなう。特に煮沸用土器を4つに分けた点は、歴史的親縁性を考慮した分類として刻目突帯文土器研究の画期といえよう。そして器形、器面調整、文様にわたって検討し、「突帯文土器」を二様式に大別した。さらに新しい方の様式は板付Ⅰ式と共伴しない、共伴するの違いから二つに細別し、夜臼Ⅰ、Ⅱa・Ⅱbを設定した。学史にしたがうなら山ノ寺Ⅰ・Ⅱ・夜臼といった具合になるのであろうが、山崎は山ノ寺式と夜臼式が地域をことにする刻目突帯文土器であるとの考えから、玄界灘沿岸の刻目突帯文土器を夜臼式と命名したのである〔山崎、1980〕。

この編年案がでた当初は、板付Ⅰ式と共伴する夜臼式を細分したとして批判をうけたこともあったが、山崎は様式名にあえて「夜臼」を用いることで山ノ寺式と夜臼式を地域差とする見解を示した。したがって板付Ⅰ式と共伴する夜臼式を細分したのではなく、刻目突帯文土器の細分をおこなったのである。ここに九州の刻目突帯文土器研究は、最古の弥生土器を決定するための示準土器として刻目突帯文土器をあつかう従来の変則的な編年論から解放され、型式学的に刻目突帯文土器全体を細分する方向へ進み始める。一方、山崎編年にも弱い部分がある。資料数が少ないことと水田から出土した資料が中心となっている点である。福岡・早良周辺の資料をあわせて検討しているが、甕や鉢のバリエーションが菜畑や曲り田遺跡に比べて乏しく、一見して新しい様相をみせている。あとで述べるが、福岡と早良のあいだに存在する地域性が平均化してしまった可能性もある。表面的な比較では、板付下層を菜畑9-12層や曲り田(古)式より新しく位置づけることはできない。

山崎編年に対する反応はすぐあらわれる。森貞次郎は、森自身が1968年に示した山ノ寺式から夜臼式へという見解を修正した〔森、1968〕。森は学史上の山ノ寺式を広義の夜臼式に含めて「夜臼Ⅰ式」とし、「山ノ寺式」という型式名を刻目突帯文土器以前の黒色磨研土器にあて、「山ノ寺式」を刻目突帯文土器からはずしたのである〔森、1982〕。この修整は「山ノ寺式」と「夜臼Ⅰ式」を地域差とする山崎や島津の考え〔山崎・島津、1981〕に賛同し、混乱のもとになる型式名である山ノ寺式を外すこ

とをねらったものである。山ノ寺式と夜臼Ⅰ式の混乱はようやく解消したかにみえた。

菜畑遺跡を整理した中島直幸は、豊富な資料を背景とした細かい器種分類のあと、層位を重視した編年をおこない刻目突帯文土器を三様式に細分した〔中島、1982 a・1982 b・1982 c〕。中島は、最古型式の菜畑9—12層の土器を、山ノ寺遺跡B地点の資料と同型式と認め、「山ノ寺式」に相当させた。8層出土の土器は板付Ⅰ式と共伴する夜臼式に相当するとしながらも、下層では板付Ⅰ式と共伴せず、上層でのみ共伴することから、それぞれを「夜臼式単純」「夜臼式」として設定した。山崎編年との対応については、夜臼Ⅰ式の甕が刻み目などに新しい特徴をもつ点や、浅鉢の器種が乏しいことをあげ「山ノ寺式」が夜臼Ⅰ式に先行するとの見解を示した。菜畑編年の意味は玄界灘に面する唐津に「山ノ寺式」が存在する以上、玄界灘に面する福岡とのあいだで地域性を考慮する必要はなく、「山ノ寺式」と夜臼Ⅰ式を時期差として考えても不都合でないとした点にある。こうなると菜畑9—12層と夜臼Ⅰ式との関係を論じていたものが、学史上の「山ノ寺式」と夜臼Ⅰ式との関係を論ずる方向へすり替えられることになる。型式名としての「山ノ寺式」の再登場が、議論をふたたび振り出しに戻すこととなったのである。

菜畑9—12層から出土した土器のなかに、板付出土の土器に比べて山ノ寺遺跡B地点の土器と同じタイプが多く含まれているのは確かだが、それは個々の資料の類似性にすぎず、それを根拠に器種構成さえも不明な型式との対応を計るには手続きが不足している。また9—12層と夜臼Ⅰ式との関係について論じることはできても、それがそのまま山ノ寺式と夜臼Ⅰ式との関係を論じたことにはならない。中島編年と山崎編年をめぐる論争は、このあたりを混同しておこなわれている傾向がある。

論争の焦点に、菜畑9—12層と夜臼Ⅰ式の器種構成比率がある。浅鉢や粗製深鉢の比率が非常に高く壺が少ない組成を示す菜畑に対し、板付は壺の高い構成率とごく少ない浅鉢と粗製深鉢を特徴としている。浅鉢や粗製深鉢の比率が高いのは型式学的に古いことを示す指標と捉える中島に対し、山崎は生業形態の差を反映して古い器種である浅鉢や粗製深鉢が残存したものと解釈して、古くする指標としては使えないと主張している〔山崎、1981〕。この論争は解釈の違いで接点がないので型式学的操作をへて判断するしかない。甕や鉢のバリエーションは菜畑が豊富である。この背景をどう解釈するかでも結論は異なってくる。しかし両遺跡を比較する場合のもっとも大きな問題は、両遺跡で中心となる甕の器種が違うことで、この傾向は新しくなるほど強くなりとくに板付Ⅰ式と共伴する段階にはほとんどずれてしまう。両遺跡の関係を正しく捉えるにはこの事実を正しく認識しなければならない。菜畑編年の登場は、玄界灘沿岸に

も山ノ寺遺跡出土土器と同タイプの土器が量的に分布することを明らかにして、山ノ寺式と夜臼Ⅰ式との地域性論争にあたらしい視点をもたらしたことに意義があろう。

橋口達也は、曲り田遺跡から出土した刻目突帯文土器を三様式に細別した。この編年は器種こそ細別していないが、板付、菜畑に比べて型式学的な色彩が強い。まず刻目突帯文土器のなかで、板付Ⅰ式と共伴する「夜臼式」を分離し、残りを新旧の要素から二分し、それぞれ曲り田（古）式、曲り田（新）式とする。橋口編年の最大の特徴は屈曲する胴部をもつ甕は口縁部だけに突帯を一条もつ甕（図25—19）から口縁部と胴部に一条ずつ計二条の突帯をもつ甕（図25—7）へと変化することを示し、近畿・瀬戸内同様の一条甕から二条甕への器種変遷が九州にも存在したことを指摘したことにある〔橋口、1985〕。九州の刻目突帯文土器を西日本突帯文土器編年のなかに位置づけ、近畿・瀬戸内をにらんだ編年と言えよう。このような器種変遷が存在したかどうかは、九州における刻目突帯文土器の成立に関する問題を左右する。一条甕は菜畑9—12層、山ノ寺B、熊本市上南部遺跡などで出土しているが、板付下層では検出されていない。本稿では型式学的に最も古い一条甕と二条甕を比較検討してこの問題について考える。橋口は山崎・中島編年との関係について、菜畑9—12層を古と新の二つに分けた場合の古い方と曲り田（古）式を併行させることで夜臼Ⅰ式に先行させ、夜臼Ⅰ式は菜畑9—12層の新しいほうと併行するとした。

板付、菜畑、曲り田編年は、型式名の違いを無視すれば、板付Ⅰ式と共伴する刻目突帯文土器と共伴しない刻目突帯文土器に二大別する点では共通している。違うのは共伴しない刻目突帯文土器単純段階をどう細分するかという点である。橋口のように器種的に古い甕の存在を根拠にすえるにしても、中島のように層位を重視するにしても全体を同じ基準で処理しなければならない。とくに一条甕と二条甕の型式学的な違いを明確にすることは重要である。

北部九州における早期の刻目突帯文土器は、最初から山ノ寺式と夜臼式に細分されていたが、両土器に代表される文化はとくに生業に関する要素に連続性が認められないことから、両者をどう関連づけるかという点に研究の主眼がおかれてきた。菜畑の調査は、板付Ⅰ式と共伴する夜臼式の農耕文化の祖型となる文化を山ノ寺式と位置づけたことによって、両文化の連続性を初めて確かめたかにみえる。しかし学史的な山ノ寺式を、農耕文化的に夜臼式の直接的な祖型として位置づけることはできず時間的に古いという側面でしか捉えられない。したがって、山ノ寺式という名称を用いるにあたっては、時間的な面だけ重視してあくまでも学史に準ずるのか、文化的な面まで含めた山ノ寺式としてもちいるのか態度を明らかにせねばならない。

3 弥生時代前期の刻目突帯文土器

前期の刻目突帯文土器は、早期の刻目突帯文土器と形態的に類似していたこともあって早くから注意されていた。森貞次郎は板付遺跡から出土した甕のなかに、単純にすばまる胴部をもち、単純に立ち上がる口縁部の外側と胴部の上位に刻みを施した突帯をもつ甕をみつけ「板付Ⅱ式甕形土器E」と名づけた。森は夜臼式の甕との関連を示唆している〔森・岡崎, 1961〕。前期の刻目突帯文土器という概念を定着させたのは小田富士雄である。小田は、大分県佐伯市白潟遺跡から出土した土器のなかに遠賀川式土器と混じって、口縁部から下がった位置に刻みを施した突帯をもつ甕が存在することに注意して、弥生時代前期における豊後の在地的な甕である下城式土器を設定した〔小田, 1956〕。

その後、福岡県八女市亀ノ甲遺跡を調査した小田は、森が設定した板付Ⅱ式甕形土器Eがこの遺跡では板付系の甕より多く出土することを重視して、「亀ノ甲遺跡 甕形土器C類」を設定した。これが、「亀ノ甲タイプ」として九州の研究者に認知された甕である（図23—9）〔小田, 1964〕。

亀ノ甲タイプが認知されたことで、いままで断片的であった各地の類似資料が整理し始められる。小田は、板付、長崎県原山遺跡C地点〔森貞次郎, 1960〕、熊本県斎藤山遺跡〔乙益, 1961〕、鹿児島県高橋貝塚〔河口, 1963〕等から出土した土器に、「甕形土器に強く残された縄文系土器の伝統」を認め〔小田, 1964〕、「亀ノ甲式」と「下城式」を九州の弥生時代前期後半における西と東の縄文系土器として対峙させる図式を完成させたのである〔小田, 1972〕。

この縄文系土器が前期の土器様式のなかで、板付系とどのような関係にあるのか、最初に明らかにしたのは河口貞徳である。河口は鹿児島県高橋貝塚の調査成果をもとに、前期後半に相当する高橋Ⅱ式の甕組成に板付系が欠落し、縄文系甕単純の組成を示すことを明らかにした〔河口, 1965〕。そして南部九州の弥生時代前期土器様式について総括的に論じ、南部九州において縄文系土器がどのように出現してくるか独自の見解を示した〔河口・出口, 1971〕。弥生時代前期の九州には、縄文系の甕だけを使用する遺跡が地域的に存在するという事実だけが認識されたのである。

前期の刻目突帯文土器は、福岡平野の前期後半に属するタイプがまず発見され、研究者の注意にのぼった。九州の弥生土器研究の中心であった福岡平野では、刻目突帯文土器が夜臼式のあと連続せずに断絶するため、板付Ⅱa式併行の刻目突帯文土器は存在しない。この福岡平野の地域性が早期の刻目突帯文土器との関連をさぐる研究の

障害となったのである。福岡平野がこのような状況であれば、河口が指摘した鹿児島
のあり方は、弥生文化の中心地から遠く離れた地域的な現象として片付けられるのは
無理もないことである。さらに、亀ノ甲タイプを前期末に位置づける一部の見解も影
響して〔鏡山・乙益, 1969〕, 時間的な位置づけが誤っていたことも要因としてあげ
られるであろう。前期の土器様式は斉一的な遠賀川式によって構成されるという学
史的な意見が、縄文系土器の存在を周辺地域における残存現象として過小評価してし
まったのである。

しかし有明海沿岸地域に調査がおよんでくると、玄界灘沿岸地域とはまた違った前
期文化の内容が知られるようになり、かなり異なった土器組成も明らかになってき
た。板付系の土器がほとんどみられないのである。甕の組成は刻目突帯文土器単純に
近く、壺もその限りではなかった。縄文系という系譜の指摘にとどまっていた前期刻
目突帯文土器の編年研究は急速に進む。

西健一郎は熊本平野を中心に刻目突帯文土器の成立と展開について検証し〔西,
1982・1983・1985〕, 筆者も佐賀・筑後平野において亀ノ甲タイプの成立過程を復原
した。そして佐賀・熊本・筑後の前期土器様式は、刻目突帯文系統, 板付系統, 折衷
系統の三系統から構成されると主張した〔藤尾, 1984〕。下城式も、高橋徹が成立過
程を復原しつつあるが、祖型となる土器の特定をめぐる議論の余地がありそうで
ある〔高橋, 1982・1988〕。鹿児島の前期刻目突帯文土器は前期後半の高橋Ⅱ式に限
られているが、高橋Ⅰ式相当期も刻目突帯文土器中心の組成を示すと考えられる。

西日本の前期土器様式を三系統の構成比率からみると、おおきく三つのパターンが
存在する。A 板付甕単純の器種構成をしめす(九州北岸, 山陰, 近畿)。B 刻目
突帯文土器単純の器種構成をしめす(西部九州, 南部九州)。C 前期前半は板付甕
単純のAパターンを示すが、後半以降Bパターンを示す(東部九州, 瀬戸内, 紀伊)。
西日本はこの三つのパターンのいずれかにかならず属す〔藤尾, 1987b〕。遠賀川式
という等質性のなかの非等質性, 刻目突帯文甕のこのようなあり方は、水稻農耕の伝
播にともなう人の動きと密接な関係がある。渡来人もしくはその直系の子孫が水稻農
耕を伝えたAパターンの地域。縄文人が農耕を受け入れたBパターンの地域。渡来人
と縄文人の微妙な平衡関係のもとで水稻農耕をおこなったCパターンの地域である。
これらの地域は水稻の経営主体がちがうため、農具のセットは異なる可能性がある。
大陸系磨製石器や木製農具が完備しているA, ほとんど縄文からの道具で代用するB
とC地域。どのような甕組成をとるのかみることは、水稻農耕の伝播を考えるうえで
重要である。水稻農耕の受容にあたって個別的な対応をみせた地域の姿がここに示さ

れているのである。

Ⅲ 器種分類

刻目突帯文土器の器種には、深鉢形、甕形、壺形、鉢形、高坏形土器がある。各器種は、法量や器形などの機能差を反映した特徴や系譜からさらに細分できる。分類の対象となるのは、弥生時代早期から前期末にいたる西部九州の土器である。

1 甕形土器⁽⁴⁾ (図1)

形態と文様からⅠからⅣにわけると。Ⅰ類は、縄文時代に一般的な無文の粗製深鉢、Ⅱ、Ⅲ類、Ⅳ類は刻目突帯文土器で刻目文や刻目突帯文をもつ甕である。⁽⁵⁾

Ⅰ類 器面には条痕、削り痕、板ナデ痕のような一次調整痕を残す。器形から次の二

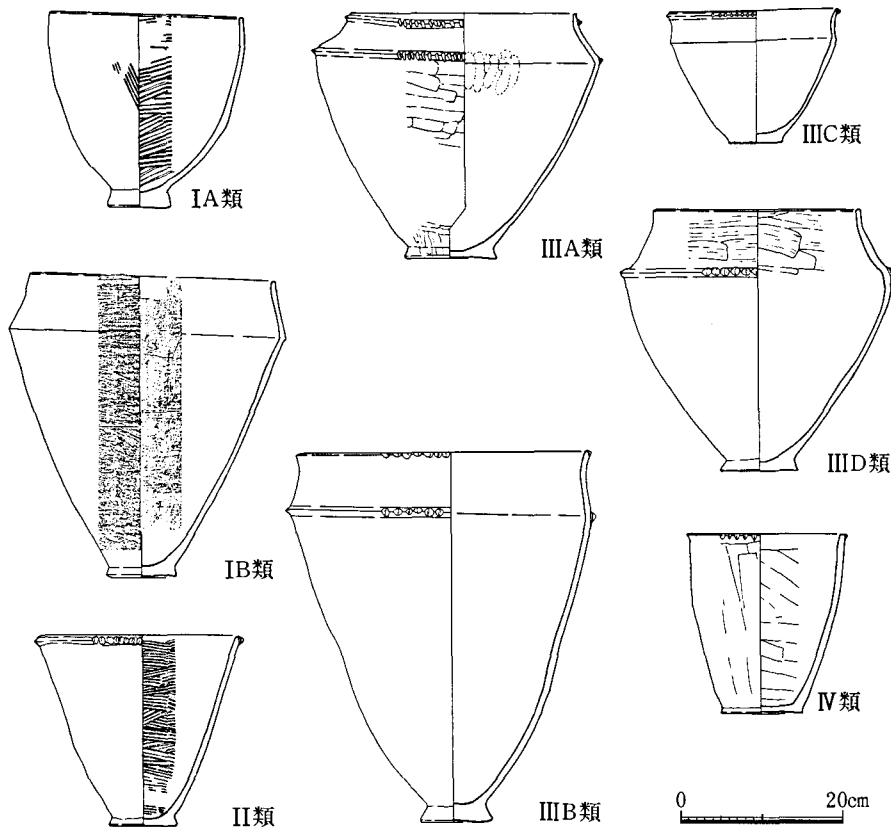


図1 甕形土器器種分類図

つに分ける。

A 胴部に屈曲がないもの。

B 胴部に屈曲があるもの。

Ⅱ類 胴部に屈曲がない深鉢形で、口縁部だけに刻目突帯をもつもの。器面調整はⅠ類に同じだが、ナデや刷毛目を基本とするものがある。

Ⅲ類 胴部に屈曲があり刻目文や無刻みの突帯、刻目突帯をもつもの。胴部の屈曲がなくなり形態的にはⅡ類と変わらなくなるものもある。器面調整はⅡ類に同じ。刻目文、突帯、あるいは刻目突帯などの文様と施文位置のくみあわせをもとに次の四つに分ける。

A 口縁部、胴部ともに刻目または刻みのない突帯をもつ。胴部に屈曲がないⅡ類と同じ胴部で口縁部と胴部上位に刻目突帯をもつものもある。⁽⁶⁾

B 口縁部に刻目文、屈曲部に刻目突帯をもつ。ⅢA類と同じく胴部の屈曲がないものもある。

C 口縁部に刻目突帯をもち、屈曲部は無文のもの。

D 口縁部は無文、屈曲部に刻目突帯をもつ。口径が器高を上まわる鉢形のものもある。

Ⅳ類 胴部に屈曲がない深鉢形で口唇部に刻目文をもつもの。板付Ⅰ式甕の祖型（板付祖型甕）となる器種である。器面調整は板ナデ、指ナデ、刷毛目が基本で、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類に比べて仕上げが丁寧である。⁽⁷⁾

2 壺形土器

（1）法量分析

壺は、容量によって貯蔵する対象が異なるのでまず法量から検討する。早期から前期末に属する資料、268個体について、口径と器高を基準に散布図を描いたのが図2である。X軸に口径、Y軸に器高をとっている。図をみると、口径5cm～70cm、器高5cm～90cmのなかに無秩序に分布するため、出土状況を参考に次の三つにまとめてみよう。まず墳墓で壺棺として使用された壺、そして集落で日常の容器として使用された壺、最後に墳墓で副葬小壺として使用された壺である。

壺棺は器高が40cmを超えるもので、さらに時期と地域によって三つに分かれる。

口径12cm～30cm、器高50cm～70cmの壺（図中の▲）は、早期の唐津・佐賀・島原半島・熊本に集中して分布する壺棺である。日常用の広口壺とは形態的に大きくかけはなれた、長い胴部に狭く短い頸がつく器形を呈し、外面に赤色顔料を塗布する場合

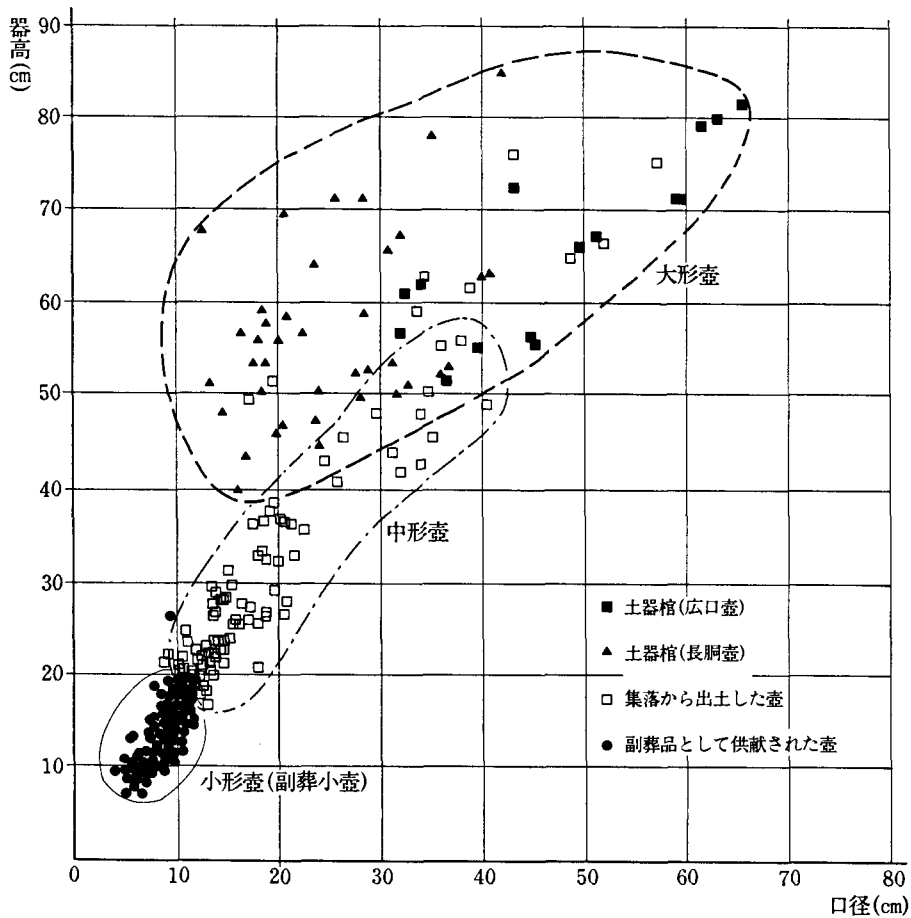


図2 壺形土器法量散布図

が多い。「長胴壺」と呼んでいる埋葬専用の土器である〔藤尾，1989〕。この段階には壺棺が単独で墓地を構成することはほとんどなく，支石墓の内部主体として使われていることが多い。

口径30cm以上，器高50cm以上の壺（図中の■）は，前期の北部九州ほぼ全域に分布する。ただし前期の前半と後半では器形と分布に違いが認められる。前半の壺の器形はすでに広口壺に変化して日常用の壺との器形的な差は少なくなっている。また早期に支石墓が分布した地域と重複するように分布する。後半になると，口径と器高が大幅にのびかなり大形化して頸がしまらずに肩が張らない器形となり，まだ壺の形をのこしているとはいえ埋葬専用の棺の域に到達している。早良や福岡・春日地域の金海式甕棺，佐賀や鳥栖・小郡の金海くずれとよばれているものがこれに相当する〔藤尾，

1989〕。また支石墓の内部主体としての埋葬形式から脱却して、木棺や石棺とともに単独で墓地を営むようになる。

以上、墳墓で棺として使用された壺を大形壺とする。⁽⁸⁾

つぎに、器高が20cm～50cmの壺はおもに集落遺跡から出土し、量的にも一番多いと考えられるが、完形品は他の二者に比べてかなり少ない。文様を施すことは稀で、へら描沈線文がみられる程度の飾らない壺である。集落で運搬可能な種籾等の貯蔵用として日常的に使用されていたものであろう。法量的に他の二者の中間に位置するため中形壺とする。

最後に、器高25cm以下の壺は、支石墓や土壌墓などに「副葬品」としておさめられる場合がほとんどである。これらは彩文や篋描沈線文で飾られている場合が多く、中形壺とは対照的で区別が容易である。早期には支石墓に副葬される場合が多いので支石墓の分布と重複しているが、前期になると土壌墓や木棺墓に副葬されるようになり分布も拡大する。このように、副葬品として使用された壺を副葬小壺とする。

(2) 器形分類

つぎに、甕と同様に器種分類をおこなう。壺の場合は、刻目突帯文系と板付系の識別が主目的となる。⁽⁹⁾

今回は、従来の分類であつかいが難しかった器形を用いて、刻目突帯文系と板付系の識別を試みる。一個体の壺につき胴部最大径(d)、器高(h)、口頸部長(y)、胴部最大径

高(z)を計測し、これらの計測値を組み合わせる指数を算出する。壺の器形を指数で示し、器形の差を数値ではかることで両系統の差を明らかにしたい。計測値と指数の算出は以下のとおりである。

計測値(図3)

胴部最大径…(d)

器 高…(h)

口 頸 部 長…(y) 口縁部から頸部と胴部の境界部までの長さ

胴部最大径…(z) 底部から胴部最大径までの高さ

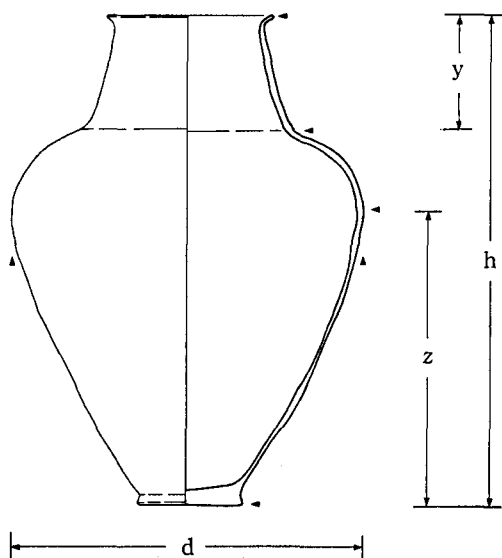


図3 壺形土器計測点

胴 部 高…(h-y) 底部から頸部と胴部の境界部までの高さ
 指数はすべて%で表す。

口 頸 部 率 [口頸部長÷器高 (y/h)] 器高に占める口頸部の割合で、値が高ければ高いほど口頸部が発達していることを意味する。この時期の壺にみられる器形のうでで最大の変化は口頸部の発達にあり、時間的な推移をみるのに有効な指数である。「口頸部率」とする。

最大形の位置 [胴部最大径高÷胴部高 ($z/h-y$)] 胴部最大径が胴部のどのあたりにあるかを示す指数である。値が高ければ最大径が胴部の上位にあって、肩が張る器形であることを示すので、肩が張る器形か、ナデ肩の器形なのかを考える場合に有効な指数である。「最大径の位置」と呼ぶ。

扁平率 [$1/2$ 胴部最大径÷胴部最大径高($1/2d/z$)] 胴部形態を示す指数である。値が100%になるのは $1/2$ 胴部最大径と胴部最大径高が等しい場合で、このとき胴部形態は球形にちかくなる。⁽¹⁰⁾ 値が100%以上なら胴部が横に強く張った扁平な胴部になり、逆に100%以下であれば縦に長い胴部であることを意味する。この指数を扁平率と呼ぶ。

以上、三つの指数から、器形分類をおこなう。

大 形 壺

図4は、X軸に口頸部率(口頸部長÷器高)、Y軸に扁平率($1/2$ 胴部最大径÷胴部最大径高)をとり、大形壺の胴部形態が口頸部の発達とともにどのように変化していくのか示したものである。分析には福岡平野周辺(三雲加賀石、板付、三国の鼻遺⁽¹¹⁾跡)、唐津平野周辺(新町、五反田遺跡)、佐賀平野(丸山、礫石、四本黒木、大門西遺跡など)の資料を用いた。図の左上にいくにしたがって口頸部の発達と胴部の扁平率の増加がみられ、長胴から扁平胴へと変化して器形的に安定感がでてくる様子をうかがうことができる。

参考までに、板付Ⅰ式とされている壺の指数をみると扁平率は113%できわめて高い。1は佐賀平野の板付Ⅱb式併行の壺で扁平率は116%でかなり高い。この2点を除けば、ほとんどの壺が扁平率100%以下となり縦長の胴部をもっていることがわかる。また28を除けばすべて土器棺として用いられた埋葬専用の長胴壺である。以上のことからこの3点をのぞいた当該期の大形壺は相当縦長の器形をもつと特徴づけてよい。

図5は、X軸に口頸部率(口頸部長÷器高)、Y軸に最大径の位置(胴部最大径高÷胴部高)をとって、口頸部が発達するにつれて最大形の位置がどのように変化するか

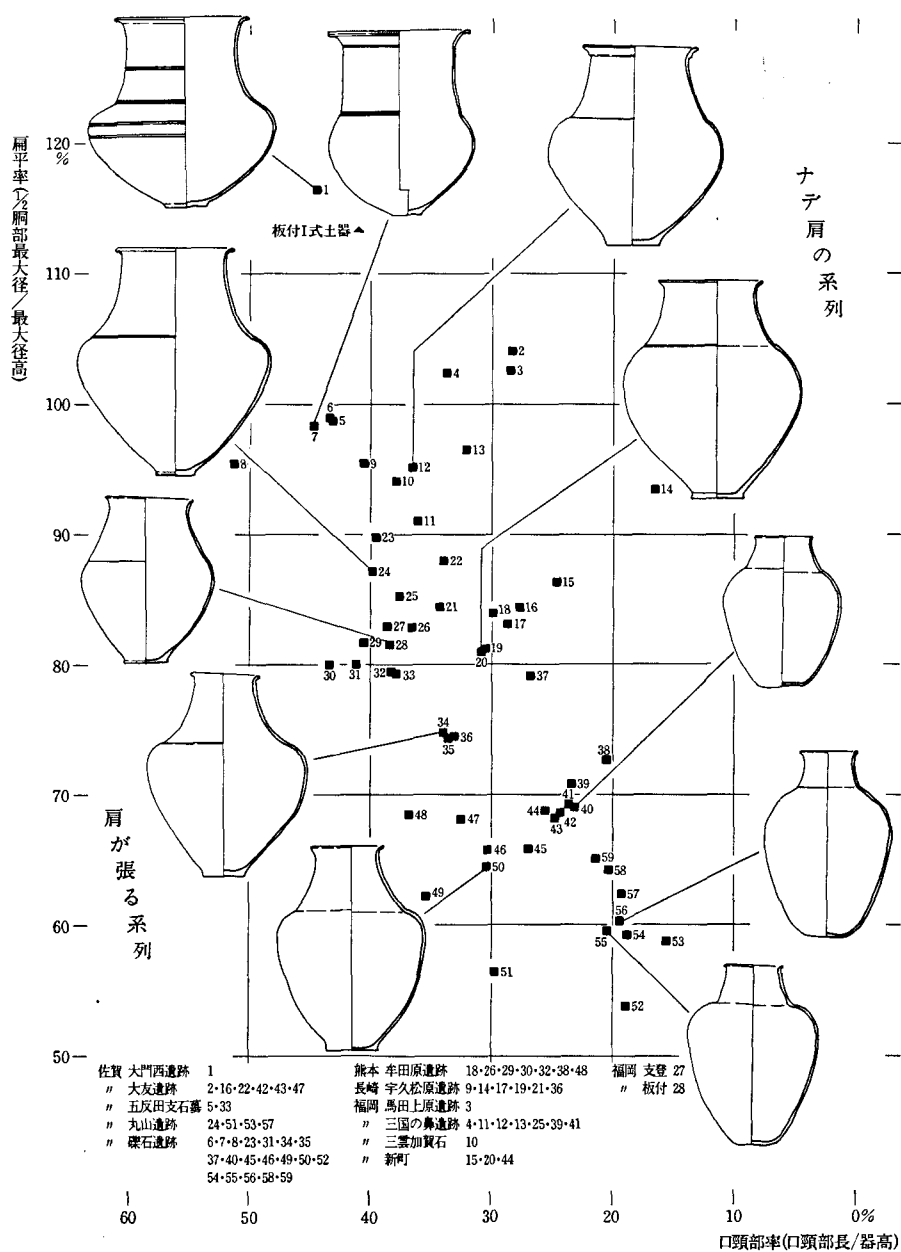


図4 大形壺における口頸部の発達と胴部形態の変化

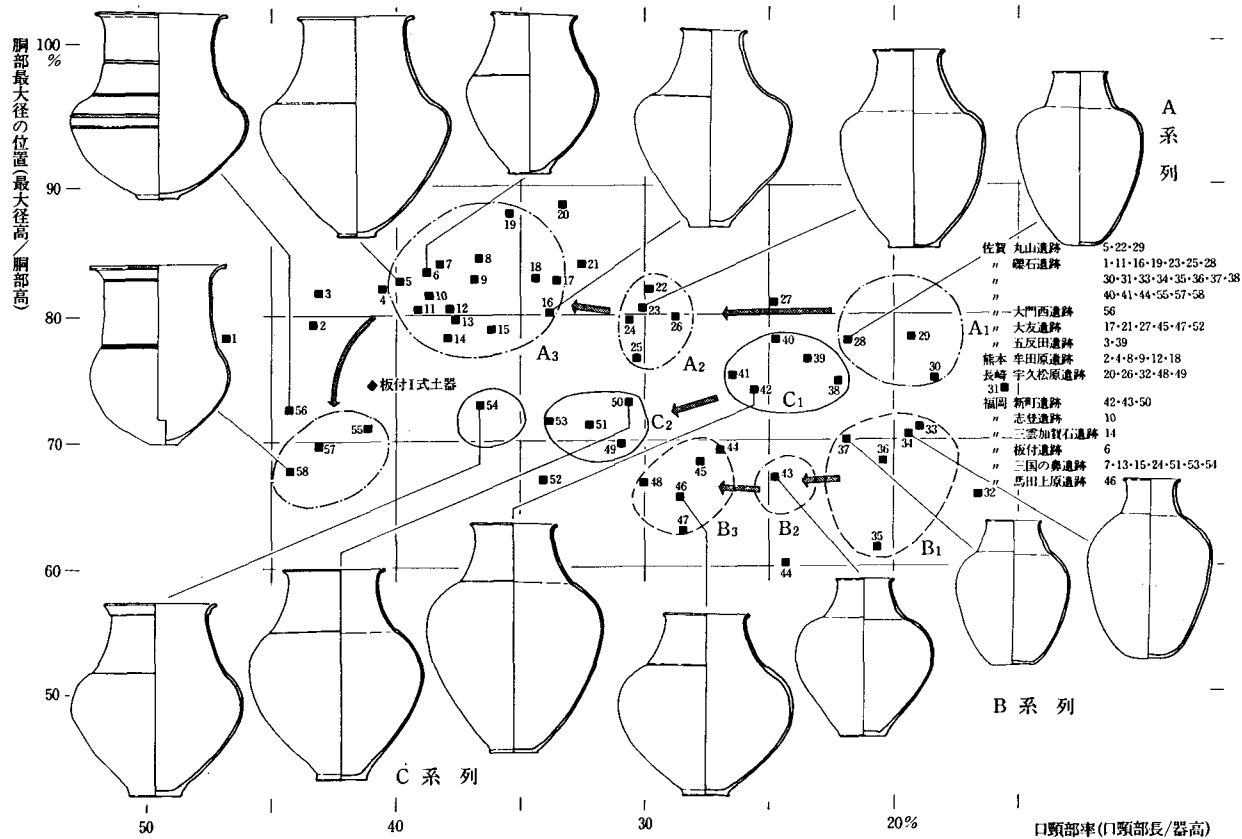
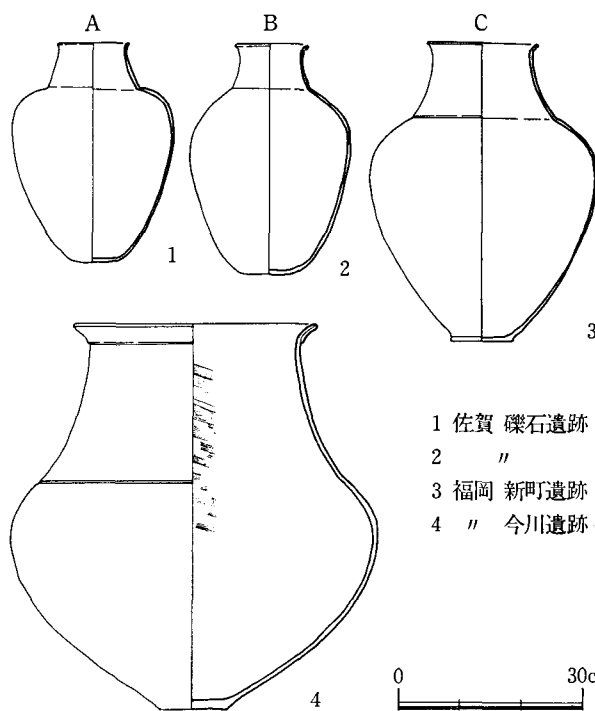


図5 大形壺における口頸部の発達と胴部最大径の位置の変化

をみた。図5に示されているとおり、長胴壺には三つの形態差のあることがわかる。口頸部がまだ十分な発達を遂げていない段階（口頸部率20%以下）には、肩が張る大形壺Aと肩が張らない撫で肩の大形壺Bが併存している。すなわち、長胴壺の出現期には器形を異にするAとBの二器種が存在した。さらに口頸部率が25%の段階でAとBの中間的な胴部形態をもつ大形壺Cが出現する。Bは口頸部率が30%に達した時点で衰退する。AとCは、口頸部率が40%～45%に達した時点で口頸部の発達に限界がみられるが、その後、それぞれは独自の変化をはじめめる。Aは胴部最大径を徐々に上昇させることによって、肩が張る器形の度を強め、一部は頸部を筒状に広げて広口壺の形態に近づいていく。Cはもはや最大径が上昇することではなく、むしろ口縁部とか底部などの細部形態において製作技法にあたらしい方法を取り入れる。Aは有明海沿岸地域に、Cは玄界灘沿岸地域に見ることができ、分布を異にしている。

以上の結果から、当該期の大形壺を器形から三つに細分する（図6）。

大形壺A（図6—1） 胴部最大径が胴部高の80%前後にあって肩を強く張る壺である。胴部における最大径の位置はほとんど変化せず、口頸部の器高に対する割合が20%から40%に増大する。有明海沿岸地域や鹿児島などの西部九州に分布する。



大形壺B（図6—2） 胴部最大径が胴部高の65%から70%前後にある、なで肩の壺である。Aに比べると数が少なく、口頸部の器高に対する割合が30%前後に増大した時点で器種として消滅する。

大形壺C（図6—3） 胴部最大径が胴部高の70%から75%前後にあり、器形的にはAとBの中間に位置する壺である。Bの消滅後、Aとともに刻目突帯文系大形壺の二大器種としてAとともに変化をつづけて、やがて前期の壺棺へと発達し

図6 大形壺器種分類図（原図を一部改変）

ていく。

それでは、板付Ⅰ式の器形はどのような指数で示せるのであろうか。福岡平野からは大形壺の完形品が出土していないので、中形壺の指数で代用する（図5）。この壺は、口頸部率40%，最大径の位置73%，扁平率113%で、極度に扁平な胴部をもち、口頸部がかなり発達した壺であることがわかる。板付Ⅰ式と共伴する夜臼Ⅱb式（図5—6）の指数（口頸部率39.5%，最大径の位置89.9%，扁平率81.4%）に比べると、口頸部率はほぼ同じだが、板付Ⅰ式のほうが胴部最大径をやや下にもち、下ぶくらの強い扁平な胴部をもつことがわかる。板付Ⅰ式は夜臼Ⅱb式に比べて重心が低く安定している器形をもつと言えよう。私達は縦長で不安定な夜臼式、扁平で安定感をもつ板付Ⅰ式と漠然と認識してきたが、指数であらわせればこのように明確なかたちで示すことができる。

佐賀平野の大形壺の扁平率は、すべて100%以下で板付Ⅰ式の扁平率と比べてかなり縦長である。筑前・筑後・肥前が接する三国地域に所在する小郡市三国の鼻遺跡の壺棺は、縦長で佐賀平野の壺に近いもの（図5—7, 13, 24のA系列）と、重心が低くやや扁平な板付Ⅰ式に近いもの（図5—51, 53のC系列）の二者を含むので、佐賀平野と福岡平野双方の影響を受けていることがわかる。大形壺の場合は福岡平野の大形壺が少ないこともあり、器形からの系統差を明らかにできないので中・小形壺でさらに検討してみよう。

中・小形壺

図7～9は、X軸に胴部最大径の位置（最大径高/胴部高）、Y軸に扁平率（ $1/2$ 胴部最大径÷最大径高）をとり、佐賀平野、唐津地域、福岡地域における中・小形壺の胴部形態のバリエーションを示したものである。各図をみると右下にいくほど長胴、左上にいくほど扁平な胴部であることがわかる。佐賀平野（図7）で対象とした資料はすべて副葬小壺である。その影響であろうが器形のバリエーションが三地域のなかでもっとも多い。特徴的な胴部形態毎にまとめてみると、大形壺にみられたような長胴や扁平胴の中・小形壺を識別できる。このような胴部形態のバリエーションは、唐津地域（図8）や福岡地域（図9）の中・小形壺にもみられるので、この時期における中・小形壺の一般的な胴部形態バリエーションと考え、次の5つに細分した。

中・小形壺A（図10—1） 胴部が縦長の壺で、扁平率100%以下、胴部最大径は70%から85%付近にある。最大径の位置は中・小形壺Cとほぼ同じだが、Aの場合は胴部が長いのでCに比べて肩が張らない。器形は口頸部の発達と胴部の短縮に特徴づけられる。丸山分類の小型壺Bに相当〔東中川, 1986〕。菜畑・十郎川・板付・今川遺跡で

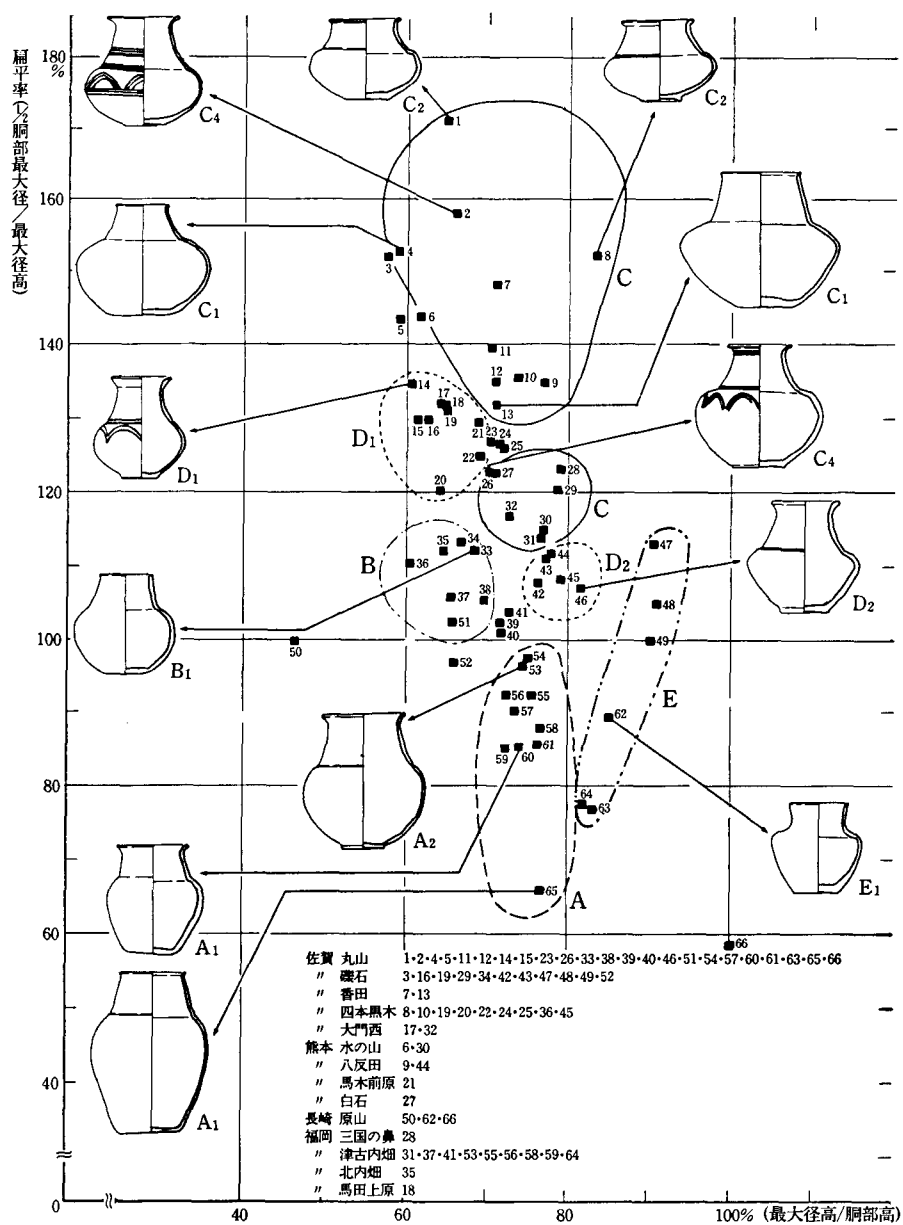


図7 佐賀平野における中・小形壺器種類図

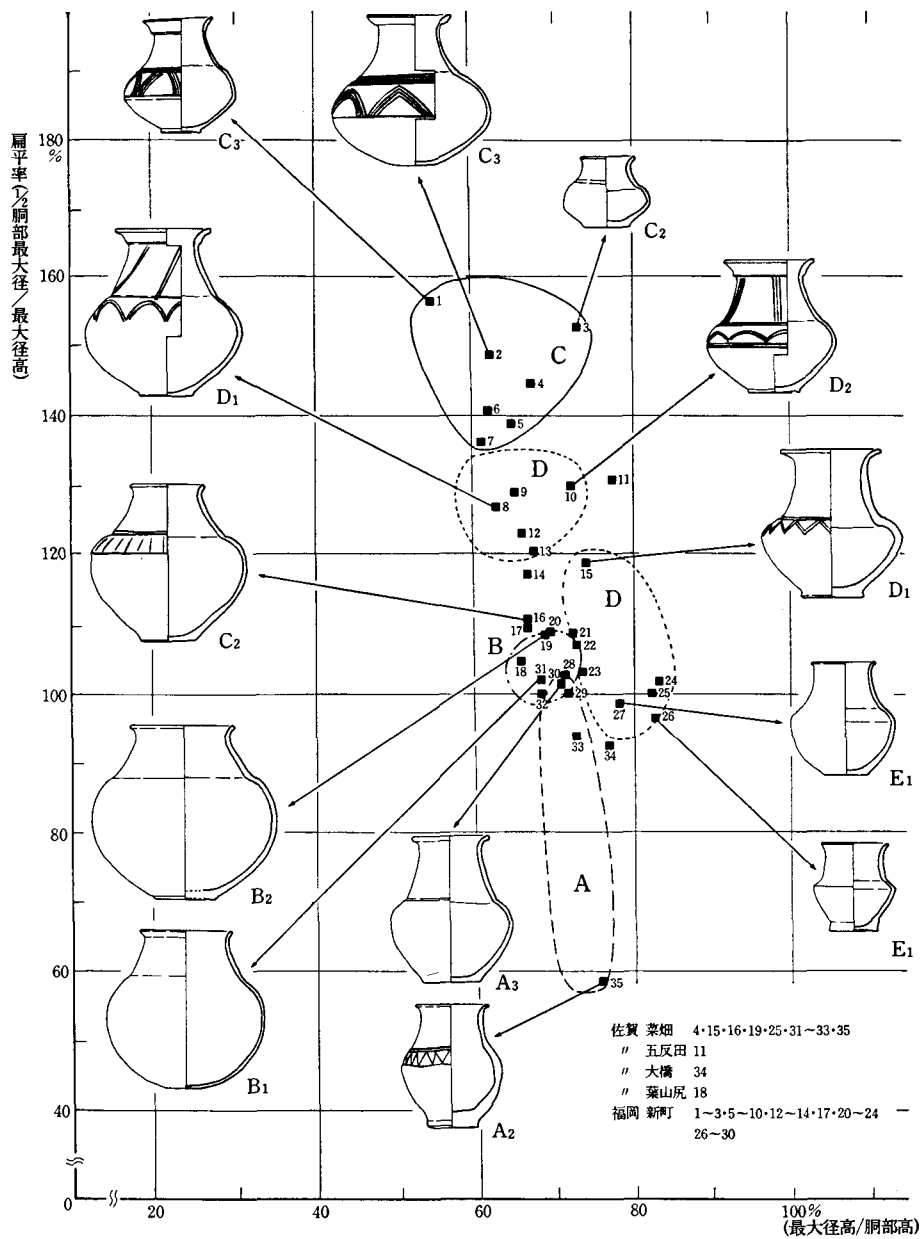


図8 唐津地域における中・小形壺器種分類図

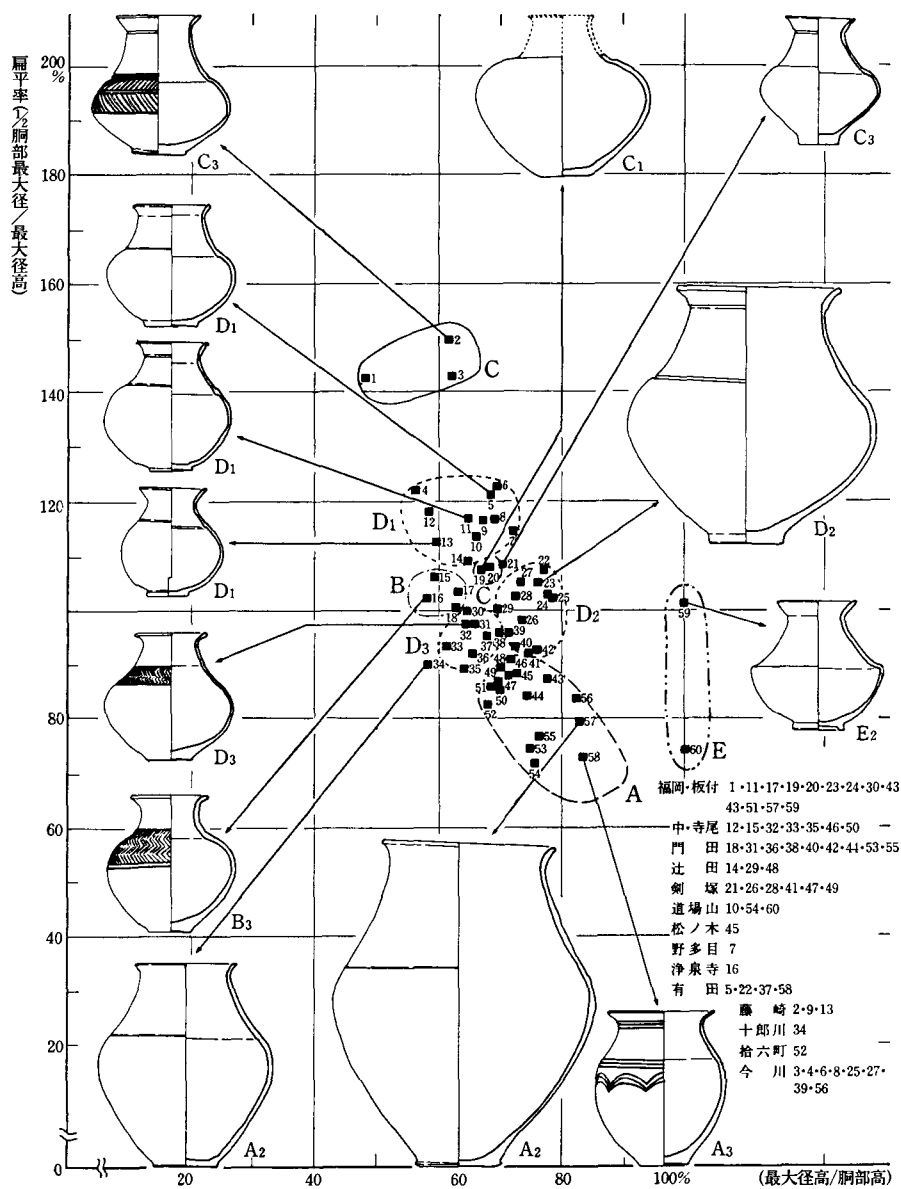


図9 福岡地域における中・小形壺器種分類図

出土し広い範囲に分布し、時期的には板付Ⅱa式を下限とする。

中・小形壺B (図10—2) 胴部が球形に近い壺で、扁平率は100%から120%、胴部最大径は60%から70%付近にある。丸山分類の小型壺Aに相当。菜畑遺跡9—12層、新町遺跡、板付遺跡E—5・6下層、大分県下黒野遺跡で出土している。佐賀や熊本では板付Ⅰ式併行段階を下限とするが、福岡では前期末まで存続して城ノ越式の基本的な胴部形態にとりこまれる。

中・小形壺C (図10—3) 胴部が扁平な壺で、扁平率は110%から180%、胴部最大径が60%から85%にある。佐賀平野にはさらに小単位のバリエントが4つありもっとも豊富である。板付Ⅱb式段階を下限とする。

中・小形壺D (図10—10) 胴部が扁平な壺で扁平率は100%から150%、胴部最大径が60%から80%にある。胴部形態はCにもっとも近く器形的なバリエントも多い。AからEのなかではもっとも遅く出現する器種で、板付Ⅰ式段階に出現する。

中・小形壺E (図10—4) 胴部が扁平な壺で扁平率は80%から120%、胴部最大径が85%から100%にあって、5つの壺のなかでは胴部のもっとも高いところに最大径をもつ。なかには頸部と胴部の境界部に最大径がくるために、胴部が屈曲する壺もある。原山・礫石・曲り田・新町・板付遺跡で出土している。橋口は板付Ⅰ式壺が成立する過程を復原する際にこの壺をとりあげている[橋口, 1979]。瀬戸内・近畿における刻目突帯文系の壺の成立を考える際に注目すべき系列である。

つぎに、これら5つのバリエントの系統的な識別をおこなう。

福岡地域の壺(図9)は、佐賀平野の壺に比べると胴部最大径の位置、扁平率ともに分散せず、図でもわかるとおり特定の指数領域に集中する傾向がある。また前期になって初めて出現する壺Dのバリエントが佐賀や唐津に比べて多い。胴部形態Dは前期に出現するという意味からすれば板付系の胴部形態とみることもできよう。

福岡の壺Dを詳しく検討すると、口縁部の外側や肩部に粘土帯の接合にともなり段をもったり、円盤貼り付け状の底部をもつものが多い(図9—11)。佐賀平野の壺Dにも段や円盤貼り付け状の底部をもつものがある(図7—14)。しかし両地域のそれは同じものではない。成形技法をまったく異にしているからである。佐賀平野では在来の伝統的な技法である削り出し技法によって、段や円盤貼り付け状の底部を造りだしているのである。板付Ⅰ式最大の形態的特徴である口縁部や肩部の段、および円盤貼り付け状の底部⁽¹²⁾を、佐賀平野の人々は外観のみ模倣することで板付Ⅰ式に似せようとしたのである。こうした現象は、玄界灘沿岸地域を除いた西部九州(有明海沿岸地域や鹿児島)でもみることができる。

表1 中・小形壺系統識別表

細部 形態		口縁部外面・肩部の段、円盤貼り付け状の底部	
		無	有
			刻目突帯文土器の技術 板付I式土器の技術
刻目 突帯文系	A	刻目 突帯文系	折衷系 A 折衷系 B
	B		
	C		
	E		
板付 I式系	D	折衷系 A	板付系

一方、板付I式と同じ成形技法をもちいてつくった段や円盤貼り付け状の底部は、胴部形態には関係なく唐津平野や福岡平野の中・小形壺B・C・Eにみることができる。玄界灘沿岸地域ではどの壺にも板付I式と同じ成形技法が用いられていることが多い。このように板付I式の胴部形態Dは西部九州の各地に分布するが、有明海沿岸の壺Dには刻目突帯文土器に伝統的な技法で板付I式の細部形態が模倣され、板付I式の技法で作られた細部形態は、玄界

灘沿岸の刻目突帯文系の胴部をもつ壺B・C・Eにもみることができる。同じ板付I式の特徴でも地域に限定されない胴部形態Dと、限定的な分布をみせる成形技法の二面性が存在しているのである。したがって中・小形壺の系統分類は、胴部形態と成形技法の組み合わせから中・小形壺の系統を識別することにした。

表1は縦軸に胴部形態(A・B・C・EとD)をとる。A・B・C・Eは早期から存在する刻目突帯文系の胴部形態、Dは前期になって出現する板付系の胴部形態である。横軸には段や円盤貼り付け状の底部の有無と、有すものについては成形技法の種類をとっている。たとえば胴部形態と成形技法がいずれも刻目突帯文系の壺は刻目突帯文系、刻目突帯文系と板付系が組み合わさっている壺は折衷系、いずれも板付系の壺は板付系と考える。その結果、刻目突帯文系が1、板付系が1、折衷系が2のあわせて4つの組み合わせが存在する。折衷系はさらに、分布や成形技法から二つに分けられる。刻目突帯文土器に伝統的な成形技法で板付I式の細部形態を模倣する折衷系Aは、佐賀・熊本・鹿児島に分布している。また刻目突帯文土器に伝統的な胴部形態をもち、板付I式の成形技法で細部形態をつくる折衷系Bは、唐津から福岡に至る玄界灘沿岸地域に分布する。このなかには今まで板付I式と定義されていた壺が含まれている。筆者も板付I式は胴部形態のバリエーションが多く、それらが分布を異にして存在すると考えていたが、これらを折衷系の壺と捉えれば、板付I式壺の成立過程を考える上で理解しやすくなる。以上の成果から中・小形壺を次のように系統識別する。

刻目突帯文系(図10—1～4) 刻目突帯文系壺に固有な胴部A・B・C・Eをもつ。

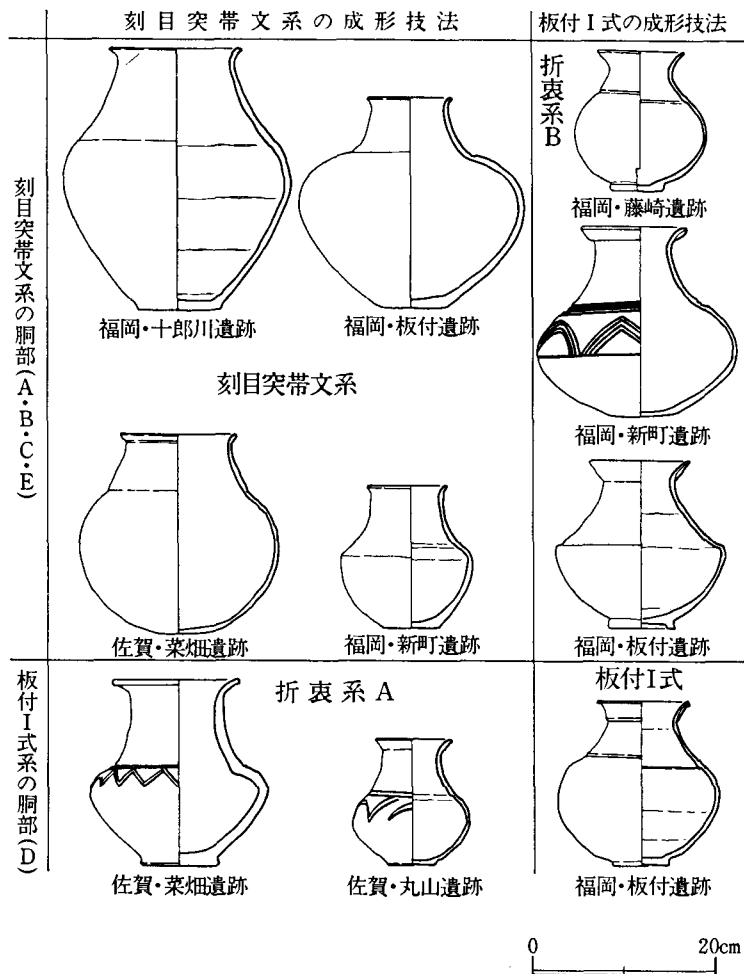


図10 中・小形壺器種分類図 (原図を一部改変)

口縁部や肩部の段および円盤貼り付け状の底部を一切もたない。文様はほとんど施文しない。板付Ⅰ式が成立するまでは九州全体に分布するが、板付Ⅱa式以降、玄界灘沿岸地域からは姿を消し佐賀・熊本・鹿児島等の有明海沿岸地域に多く存在している。

折衷系A (図10—5～6) 板付Ⅰ式の胴部Dをもつ。口縁部や肩部の段や円盤底をもたない壺ともつ壺がある。しかしそのような形態をもつ場合でも成形技法をみると刻目突帯文土器に固有な技法でつくられていて、板付Ⅰ式の外見のみを単に模倣したにすぎない。当該期の壺のなかでは文様のにもっとも豊富でへう描き沈線を用いて山形文、重弧文や多条の沈線を施す。板付Ⅱa式以降の有明海沿岸地域に分布し、刻目突帯文系壺とならんでこの地域の代表的な系統である。

折衷系B（図10—7～9） 刻目突帯文系壺に固有な胴部A・B・C・Eをもつ。板付I式の成形技法を用いて口縁部・肩部の段や円盤貼り付け状の底部を成形する。文様はほとんど施さない。唐津から福岡にかけての玄界灘沿岸地域に分布する。従来は板付I式と考えられてきた一群である。

板付系（図10—10） 板付I式成立期に出現する胴部Dをもち、板付I式の技法で口縁部や肩部の段、円盤底を成形する。彩文を施す壺もある。唐津から福岡にかけての玄界灘沿岸地域⁽¹³⁾に分布する。

3 鉢形土器（図11）

口径が器高を凌駕する器形の土器を鉢形土器とし、さらに形態から以下の九つに分けた。精製・粗製という観点から言えば、I～Vが精製土器、VI～VIIIが粗製土器となる。

I類 胴部が屈曲する鉢のうち屈曲部より上の立ち上がり部分が比較的高いもの。表面は研磨仕上げである。

II類 胴部が屈曲する鉢のうち、屈曲部より上の立ち上がり部分が低いもの。いわゆる浅鉢形土器である。器面調整はI類に同じ。

III類 方形浅鉢形土器である。平面形が方形で口縁が波状を呈する浅鉢形土器。器面は研磨仕上げを原則とするが、屈曲部より下に削り痕を残すものがある。通常は平底。

IV類 器壁が屈曲せず、丸みを帯びて立ち上がるもの。碗形土器である。器壁は薄く、表面は研磨仕上げで、丹塗りを施すものもある。

V類 口径が器高を凌駕する無頸壺のような器形をなす。中島分類の壺Nにあたる。器壁は薄く、表面は研磨仕上げで外面に丹塗りを施す。

VI類 胴部が屈曲しない深鉢形土器を縮小したような器形をしているが、深鉢に比べて口径の器高に対する比率が大きく、口径が器高をわずかに上回る。また、器面は研磨仕上げではないが、条痕等の粗い一次調整痕を残さず、調整が比較的丁寧である点でも甕IAと区別できる。

VII類 立ち上がりのない平底で、側壁が直線的に大きくひろがる粗製鉢。内面は丁寧なナデ仕上げ、外面に粗い擦痕を残す。

VIII類 平底風の丸底で、器壁が厚く底部を中心に組織痕を有する粗製鉢である。

Ⅱ 器種分類

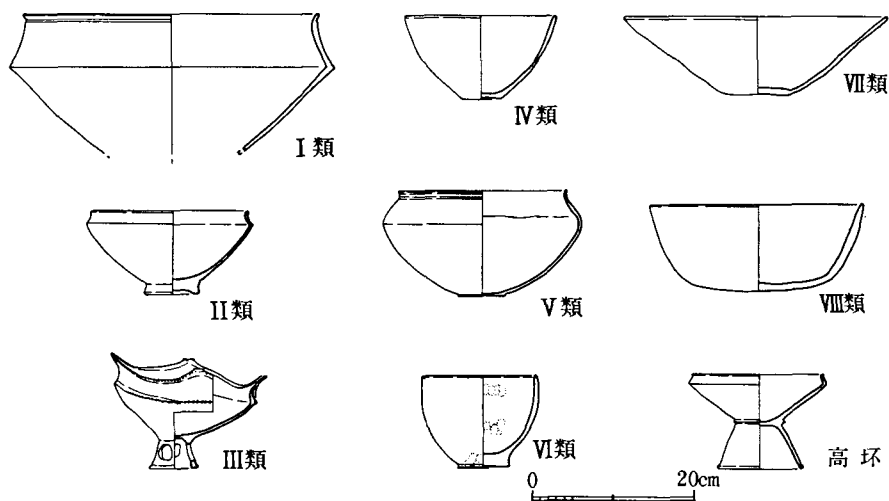


図11 鉢・高杯形土器器種分類図

表 2 刻目突帯文土器器種分類対象表

	本 稿	富田 79	山崎 80・88	西 82	橋口 85	東中川 86	田平 89	家根 82	網本 85	南 88	浅井 88	平井 89
深鉢	I	V	III	A	A				D		I	A
	A	I		B	B						B	8・9・19
	B			M	M							5・S
II		V	II				Ba	B		Ib	II1A	21・W
	A	III・IV	B				Aa・Ab・C	A	D	2a,b	II2	P・H・U・W
III	C	II	A	L				深鉢				
	D		B						深鉢C	Ia	II1B	P
IV			A	R			Ba・Bb					5・6
			B									7・25
大形	A		I			大型 A・B・C	大型					
中・小形	B	I・II・III・IV	II・III	壺	O	壺	小型	壺	壺	壺	壺	壺
	A						B					
	B						A					
	C						C					
	D						F					
	E						D					
I			II	E	浅鉢	浅鉢					I	
II 浅鉢		I	I	H	浅鉢	浅鉢					II	浅鉢
III 方形浅鉢				I	方形浅鉢						IV	
IV 碗		IV		G	碗							
V			II	N	碗							
VI				D	碗							
VII				K								
VIII		III										
高杯	高杯	高杯	高杯形	高杯	P	高杯	高杯				高杯	

(斜線は対応する分類がないもの、もしくは設定されていないことを示す。)

4 高杯形土器

鉢Ⅱ類の杯部に脚をつけたものである。調整は研磨仕上げである。

表 2 は、刻目突帯文土器器種分類対照表である。⁽¹⁴⁾

Ⅳ 型式分類と編年

1 地域設定

九州の刻目突帯文土器は、北と南、東と西で様相が大きく異なるため、地域毎の分析を要する。地理的には北部九州、西部九州、南部九州といった4つの大きなブロックにも分けられるが、歴史的な地域性を考慮すれば玄界灘沿岸地域、有明海沿岸、西北九州地域などを抽出できよう。本稿では地域性を重視した編年をおこなうために調査がすすんでいる4つの地域を抽出する（図12）。

- (1) 有明海沿岸地域 佐賀平野、福岡県筑後地方南部、熊本平野、長崎県島原半島を含む。また、鹿児島県薩摩半島の西海岸は有明海沿岸といえないが、一つの地域として設定するには資料数が少ないので本地域に含める。
- (2) 西北九州地域 佐賀県松浦半島（唐津を除く）から長崎県五島列島にかけての

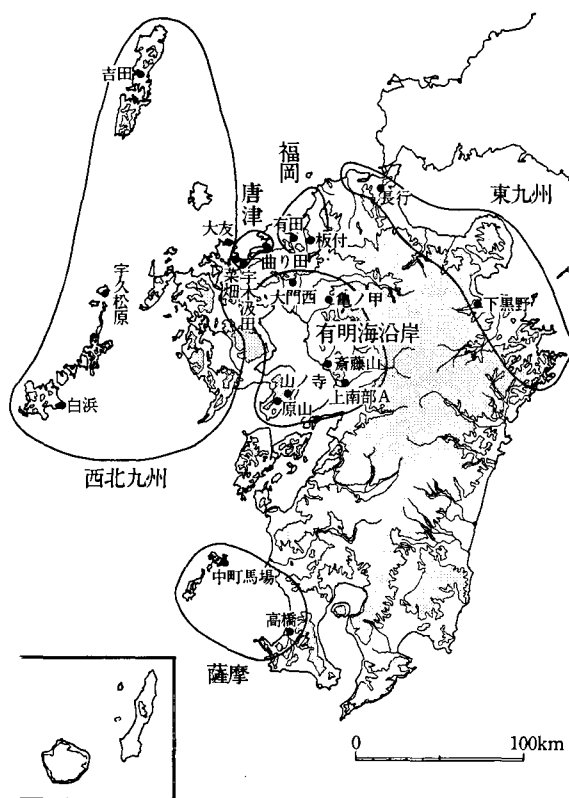


図12 九州地域分類図と代表的な遺跡

玄界灘、東シナ海沿岸と
杵岐・対馬の島嶼部を含
む。

- (3) 唐津地域 佐賀県唐津平野から福岡県糸島郡志摩・二丈町にいたる玄界灘沿岸地域を含む。
- (4) 福岡地域 福岡県糸島郡前原町から福岡市にいたる玄界灘沿岸地域を含む。

2 甕形土器

① 属性の提示

この時期の甕がもつ多くの特徴のなかで時期的な変化をとらえやすい属性を選びだし、型式分類の基準とする。

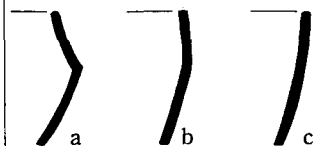






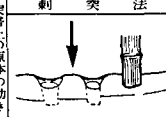
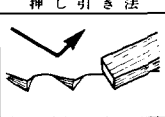


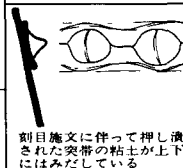
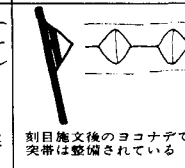


器形						突帯間の関係 			
	a b c d e 					器面調整 <div> <div>一次調整</div> <div>二次調整</div> <div>三次調整</div> </div> <div>     </div> <div> 条痕 刷毛目 板ナデ 研磨 </div>			
刻目の施文法	刺突法 		押し引き法 		刻目施文後における突帯調整の有無				
	平面形断面形 				無 		有 		
					刻目施文に伴って押し潰された突帯の粘土が上下にはみだしている				

図13 甕形土器属性分類図

属性は刻目突帯文土器のなかで、時間的・空間的にもっとも定型化した器種の二条甕（ⅢA類）から抽出する。二条甕には大きな属性が六つある（図13）。

- (1) 器形 胴部形態は3つに分けることができる。
 - a 屈曲するもの。屈曲の程度は区別しない。
 - b わずかに屈曲し、屈曲の痕跡を残す。a と c の中間的な器形。
 - c 屈曲せずに底部にむかって単純にすばまる。
- (2) 口縁部外面のどこに突帯を貼り付けてあるかという位置の問題と、その突帯の大きさを基準に5つに分けることができる（以下、「口縁部突帯の位置」と略す）。
 - a 口縁端部から突帯一つ分ほど下がった位置に貼り付ける。森分類A相当〔森・岡崎，1961〕。
 - b 口縁端部からわずかに下がった位置（1～2mm下）に貼り付ける。口唇部を強くヨコナデすれば次のcになる場合がある。a と c の過渡的な形態である。
 - c 口縁端部に接して貼り付ける。森分類B相当。突帯の断面形態によって三角口縁と蒲鉾口縁にわかれる。
 - d 口唇部にかぶさるように貼り付け、断面蒲鉾状になる。森分類C相当。
 - e c の位置に貼り付けるが、突帯の大きさはきわめて大きく、もはや突帯というよりもそれ自体が口縁部といえる。中期の鋤先口縁の祖型になる。
- (3) 刻目の施文法 すでに家根祥多の詳細な分類がある。本稿では家根分類をふま

ながら刻み方から三つにわけると。

刺突法 突帯に対して真上から垂直に突き刺すように刻む方法で、原体の先端全面が突帯にあたる。しかし刻むときに一回一回原体が突帯から離れるため刻む速度は遅く、施文法としては非能率的である。指、棒、竹管、貝の殻頂などが使われている。

押し引き法 板の木口、ヘラなどを斜めにねかせて、突帯上を横方向へ滑るように突帯に押し付けては引く方法で、原体の先端が部分的に斜めにあたる。右ききのひとなら左から右へ、左ききの人なら右から左に突帯上を刻んでいったあとを観察できる場合がある。

弱い刺突や押し引き刻みで軽く触れるようにして刻む方法 前の二つとは異なり軽く浅く刻む点に特徴がある。弱い刻みの意味で「弱」と表記する。また刻み目を施さないものは「無」と表記する。

- (4) 口縁部突帯と胴部突帯の大きさがどういう関係にあるのかみたもの。ⅢA類だけの属性である（以下、「突帯間の関係」と呼ぶ）。

大きさが同じもの（以下、「同」と表記する）。

口縁部突帯が少し大きくなり胴部突帯よりもやや大きいもの（以下、「大」と表記する）。

口縁部突帯が肥大化して、逆に胴部突帯が小さくなった結果、両者の大きさが著しく拡大したもの（以下、「隔絶」と表記する）。

- (5) 器面調整 器面調整を土器製作工程のうえから整理すると、整形段階と仕上げ段階が存在し、各段階に応じた原体をもちいて有効な技法が採用されている。どのように仕上げるかは器種や用途によって決められているので、どの段階で仕上げが完了しているかみれば、最終調整の変化を推定することができる。

一次調整 粘土をかすり取ることで器壁を薄くしたり、形を整えたりする調整で、条痕、擦過痕、ケズリ、刷毛目調整などがある。これらを一次調整と呼ぶ。

二次調整 一次調整の後、器壁を滑らかにする目的で、板、ヘラ、指、布、皮などを用いる。一般にナデ調整と呼ばれているものである。これらを二次調整と呼ぶ。

三次調整 二次調整の後、表面が滑らかなものを使って磨き、表面付近の砂粒を沈ませることで、緻密な薄層をつくり光沢をだすことを目的とする。一般に、研磨、ヘラ磨きと呼ばれている調整が該当する。三次調整と呼ぶ。

- (6) 突帯調整の有無 突帯に刻目を施したあとに、突帯にヨコナデを加えるかどうか

表3 有明海沿岸地域甕ⅢA類における三属性間の関係

器 形	口縁部突帯の位置	刻目の施文法	口縁部突帯の位置	刻目の施文法	器 形	刻目の施文法	口縁部突帯の位置	器 形
a 29	a 10(34.5)	刺突 6(20.7)	a 17	刺突 3(17.6)	a 10(58.8)	刺突 9	a 3(33.3)	a 6(66.6)
	b 13(44.8)	押引 23(79.3)		押引 14(82.4)	b 5(29.4)		b 4(44.4)	b 1(11.1)
	c 5(17.2)			弱 0(0)	c 2(11.8)		c 1(11.15)	c 2(22.3)
	d 1(3.5)	弱 0(0)		刺突 4(22.2)	a 13(72.3)		d 1(11.15)	a 23(40.4)
	e 0(0)			押引 14(77.8)	b 4(22.2)		e 0(0)	b 10(17.5)
b 14	a 5(35.7)	刺突 1(7.1)	b 18	弱 0(0)	c 1(5.5)	押引 57	a 14(24.6)	a 24(42.1)
	b 4(28.6)	押引 13(92.9)		刺突 1(5.5)	a 5(20.85)		b 14(24.6)	b 3(20.0)
	c 5(35.7)	弱 0(0)		押引 19(77.8)	b 5(20.85)		c 19(33.3)	c 12(80.0)
	d 0(0)	弱 0(0)		弱 4(16.7)	c 14(58.35)		d 0(0)	
	e 0(0)			刺突 1(100.0)	a 1(100.0)		e 10(17.5)	
c 38	a 2(5.3)	刺突 2(5.25)	d 1	押引 0(0)	b 0(0)	弱 15	a 0(0)	a 0(0)
	b 1(2.6)	押引 24(63.2)		弱 0(0)	c 0(0)		b 0(0)	b 3(20.0)
	c 14(36.8)	弱 10(26.3)		刺突 0(0)	a 0(0)		c 4(26.7)	c 12(80.0)
	d 0(0)	無 2(5.25)		押引 10(47.6)	b 0(0)		d 0(0)	
	e 21(55.3)			弱 9(42.9)	c 21(100.0)		e 11(73.3)	
			e 21	無 2(9.5)				

(1) 器形を基準に他の二者との相関をはかったもの

(2) 口縁部突帯の位置を基準にしたもの

(3) 刻目の施文法を基準にしたもの

に注目する。

ヨコナデしないもの（以下、「無」と表記する）。刻んだ結果、はみ出した粘土をそのままにするため、刻目の周囲は突帯の幅が広がったままで、突帯が波うっているようにみえる。刻み目の平面形もまちまちである。

ヨコナデするもの（以下、「有」と表記する）。刻んだあとにヨコナデするので整美な突帯となる。刻み目の平面形もそろっている。

② ⅢA類の型式分類

(1) 有明海沿岸地域

ⅢA類81点を対象に、器形、口縁部突帯の位置、刻目の施文法について、そのくみあわせをみたのが表3である。この三つの属性は、もっとも時期的な変化が速いので主要属性と呼ぶ。たとえば(1)は器形を基準に他の二属性との関係を百分率で示したものである。屈曲する胴部をもつ二条甕(a)には、口縁端部から下がった位置に突帯を貼り付けるものが34.5%、また刺突刻みが20.7%存在することを意味している。以下、(2)は口縁部突帯の位置、(3)は刻み目の施文法を基準に他の二属性との組合せを示したものである。

ⅢA類は、屈曲をもつ甕からもたない甕へ、口縁部の突帯は上昇し大形化へ、刻み目は刺突刻みから弱い刻みへ変化することが知られている。したがって三つの属性のうち、どの属性が他の二属性より早く変化するかわかればⅢA類の全体的な変化を明らかにすることができる。表から判断すると刺突刻みから弱い刻みへと変化するにつれ、胴部の屈曲がとれ、口縁部突帯の位置が上昇する傾向がよみとれる（表3一

表4 甕ⅢA類主要属性相関表 (3)。

属性 類	刻目の施文法			口縁部突帯の位置	器形
	刺突	押し	引き		
ⅢC	◎			◎	◎
ⅢA	◎			◎	◎
	○			○	○
	◎		◎	◎	◎
	○		○	○	○
	◎		◎	◎	◎
	◎		◎	◎	◎
	○		○	○	○
	◎		◎	◎	◎

刻目の施文法の変化を基準に他の属性を並べたもの。器形に一部みだれがあるものの、ほぼ有意的な変化を示す。◎は10個体以上、○は5個体以上あることを示す。

表3—(3)をみると各属性のなかで、もっとも古い特徴どうしの組み合わせが少ないことに気づく。例えば、刺突刻みで、口縁部突帯の位置がAの組み合わせは33.3%しか存在しない。しかしⅢC類にはこの組み合わせは29個体中、17個体であり、約倍の64%も存在している。属性のもっとも古い組み合わせがⅢC類に集中している事実は、この器種がⅢA類より古い器種に位置づけられることを意味する。

そこでⅢA類とⅢC類を対象に、主要三属性の組み合わせがどのように変化していくか検討してみた。個体差を排除するために、個体数が

10、または5以上ある組み合わせについて、刻み目の施文法の変化を基準にほかの二属性を並べたものが表4である。刻み目が刺突法から押し引き法へと変化していくにつれて、口縁部突帯の貼り付け位置が上昇するとともに大形化して、胴部の屈曲がとれていくようすがよくあらわれている。さらにこのような連続的な変化のなかにも転換点がいくつか存在することがわかる。たとえば押し引き刻みが出現する段階。屈曲のとれた胴部が出現する段階。口縁部の突帯が肥大する段階などはその代表といえよう。本稿では、新しい属性が出現する段階を、型式組列上の画期ととらえ、新しい型式の出現と同義に考えることで型式設定をおこなってみたい。なお型式設定にあたっては主要属性以外もくわえる。

表5は、有明海沿岸地域に分布するⅢA類を属性で表現したものである。107個体のⅢA類には、19のバリエーションが存在する。そのなかには15個体存在するものから、1個体しかないものまで個体数はまちまちである。個体数が多い組み合わせほど型式として設定できる可能性が強く、逆に1個体しかないものは突然変異的な要素が強い。そこで、先ほど表4で指摘した型式組列上の転換点をもとに、19のバリエーションを大別して、それが型式と認定できるかどうか検証してみたい。

まず、刺突刻みから押し引き刻みへの転換を重視して、刺突刻みのものを1つにくくる。次に押し引き刻みの甕を、屈曲する胴部のものと屈曲しない胴部の甕にわけてそれぞれを1つにくくる。最後に屈曲しない胴部の甕のなかで、口縁部突帯が肥大化するものとししないものに分け、さらに後者は口縁部突帯と胴部突帯の大きさが隔絶し

ていないものと、隔絶

表5 有明海沿岸地域甕ⅢA類バリエント

したものとのわける。

この結果19のバリエ

ントを5つに大別した。

ⅢA類第1群(略して

ⅢA₁、以下同様) 5

つのバリエントがあ

る。刺突法による刻み

目をもち、一次調整段

階を最終調整とする甕

である。有明海沿岸地

域には、ⅢA類のなか

では最も古いバリエ

ントと考えられる口縁部

突帯の位置a、屈曲す

る胴部に刺突法で刻む

属性 群	刻日の施文法 刺突引弱	口縁部突帯の位置 ↑↑↑↑↑	器形 ㄱㄴㄷ	突帯間の関係 同大隔	調整			突帯調整 無有	個体数
					一	二	三		
A ₁	○	○	○	○	○	○	○		1
	○	○	○	○	○	○	○		2
	○	○	○	○	○	○	○		3
	○	○	○	○	○	○	○		1
	○	○	○	○	○	○	○		1
A ₂	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		12
	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	6 5	11
	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	2 3	5
	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	5 7	12
	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		3
	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	2 3	5
A ₃	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		15
	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		1
	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		3
A ₄	◎	◎	◎	◎	7 3	◎	◎		10
	◎	◎	◎	◎	3 4	◎	◎		7
A ₅	4 7	◎	◎	◎	◎	◎	◎		11

(◎は10個体以上、○は5個体以上あることを示す。)

甕が量的に少なく、口縁部突帯が口縁端部ぎりぎりまで上昇したバリエントが3個体

で一番多い。また、口縁部突帯の位置はバリエントが多くみられるのが特徴である。

胴部は明瞭に屈曲するものが大半を占める。突帯は刻んだあと調整を加えないため、

粘土のはみだしがみられる。ⅢC類に比べて口縁部突帯の位置や器形にバリエントが

多いのは、二条甕として完成する過程にあるからであろうか。

ⅢA類第2群(ⅢA₂) 7つのバリエントがある。押し引き刻みをもち二次調整を最

終調整とする甕である。器形は明瞭に屈曲するものと痕跡を残すものが存在し、突帯

は刻んだあとヨコナデを加えるものがあたらしく登場する。底部は逆台形のものが主

流を占める。バリエントが7つで5つの群のなかでは最も豊富なおうえにそれぞれの個

体数も多い。表に示した上位2つは本群の代表的なバリエントである。

ⅢA類第3群(ⅢA₃) 4つのバリエントがある。屈曲がとれた胴部で、押し引き刻

みをほどこしたあと突帯上をヨコナデ調整する甕である。バリエントは4つあるが、

ほぼ1つに集中している。

ⅢA類第4群(ⅢA₄) 2つのバリエントがある。口縁部突帯の位置や刻み目などの

属性はほぼ変化を終了して、口縁部突帯の大形化に変化の中心がうつる。口縁部突帯

は口縁部に接して肥大化するが、胴部突帯との大きさはまだ絶対的な格差をもつにい

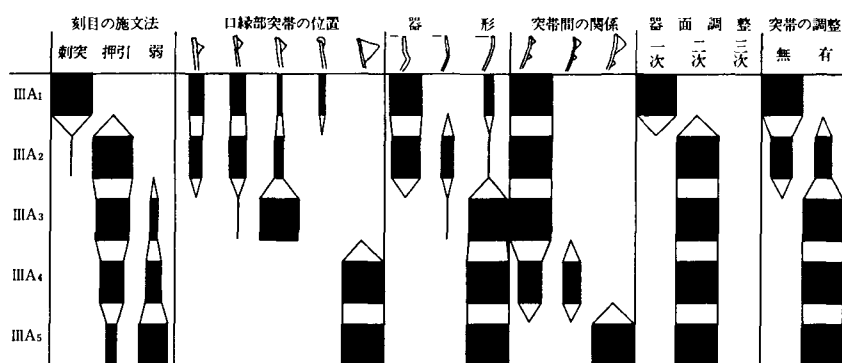


図14 有明海沿岸地域ⅢA類群別属性の比率

たっていない。胴部は単純にすばまり、押し引き刻みを基本とするが、刻み目の形骸化もすでに始まっている。突帯の断面形態は長方形や二等辺三角形のものも現れ、もはや早期の刻目突帯文土器からは完全に脱却している。

ⅢA類第5群(ⅢA₅) 口縁部突帯は肥大化し、胴部突帯との隔差は絶対的になる。もはや貼り付け突帯というよりも、中期以降の三角口縁に相当する。胴部突帯は小形化して刻み目を施さない突帯や、突帯のかわりにヘラ描き沈線などを施す甕も出現する。底部は支脚状を呈す逆台形に変化する。

以上設定した5群の型式学的特徴について、属性毎にどのような割合を示すか算出したのが図14である。ⅢA₁は、刻み目こそ刺突法によるものばかりであるが、器形や口縁部突帯の位置などをとれば複数のバリエーションが存在する。型式として設定できるまとまりも、特定の属性をのぞけば複数のバリエーションから構成されているものと考えられる。この5群が型式として設定できるかどうかの検証は、のちにおこなう。

(2) 西北九州地域

本地域のⅢA類は33点が確認されている。資料数が少ないので有明海沿岸地域で設定した群を参考にして、口縁部突帯の位置を基準に並び換えたのが表6である。有明海沿岸と同じバリエーションは同じ群と考え、新しく出てきたバリエーションはもっとも類似したバリエーションを含む群に含めた。

ⅢA類第1群(ⅢA₁) 2つのバリエーションがある。2次調整で仕上げる甕は、主要3属性が最も古い特徴をもつので本群に含めた(刺突刻み、口縁部突帯の位置a、屈曲する器形)。もう一つの甕は、有明海沿岸と同じバリエーションである。本群は2点しかなく詳細は不明である。

ⅢA類第2群(ⅢA₂) 7つのバリエーションがある。上から3番目と5番目の甕は有明

海沿岸には存在しない。押し引き刻みをもつことや胴部の屈曲が弱くなっている点を考慮して本群に含めた。他の5つは有明海沿岸の第2群に存在したバリエーションである。バリエーションの数は多いけれども、それぞれの個体数は少ない。

ⅢA類第3群（ⅢA₃） 4つのバリエーションがある。上から2番目の甕は、刺突刻みをもつが、胴部は屈曲せず口縁部突帯の位置も下がっているため本群とした。他はすべて有明海沿岸の第3群に存在したバリエーションである。

ⅢA類第4群（ⅢA₄） この地域には本群に属するバリエーションは存在しない。もともと存在しなかったと考えられる。

ⅢA類第5群（ⅢA₅） 有明海沿岸と同じバリエーションが1個体ある。1点しかないのは、分析に用いた遺跡の存続幅が早期に主体をおくため、長崎県里田原遺跡のような前期以降に中心をもつ遺跡からは、この群が多く出土している。ただ、先ほどもふれたように、今回の属性はこの段階を最後に変化を停止するので、個体数は増加してもバリエーションの数が増えることはほとんどない。図15は西北九州におけるⅢA類の特徴を属性毎に算出して並べたものである。

表6 西北九州地域甕ⅢA類バリエーション

属性 群	刻目の施文法			口縁部突帯の位置					器 形			突帯間の関係			調 整			突帯調整		個体数
	刺突	押し	弱	1	2	3	4	5	1	2	3	同	大	隔	一	二	三	無	有	
A ₁	○			○					○			○			○			○		1
		○							○			○			○			3	4	7
		○		○					○			○			○			○		2
		○		○					○			○			○			○		2
		○		○					○			○			○			1	1	2
		○		○					○			○			○			1	2	3
		○		○					○			○			○			○		3
		○		○					○			○			○			○		2
		○		○					○			○			○			○		1
		○		○					○			○			○			○		2
		○		○					○			○			○			2	3	5
A ₅		○				○			○			○						○		1

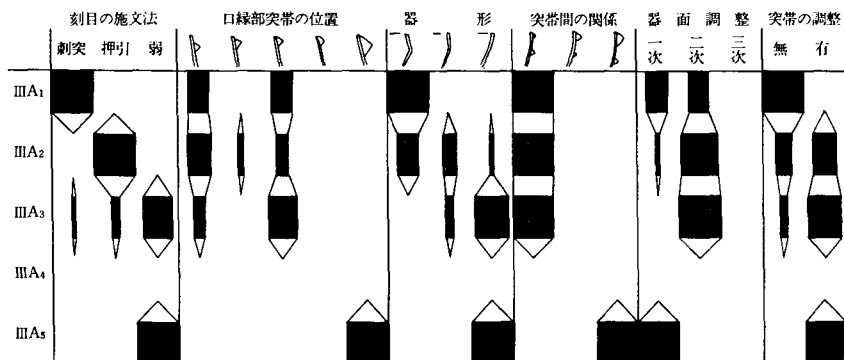


図15 西北九州地域甕ⅢA類群別属性の比率

表7 唐津地域甕ⅢA類バリエント

属性 群	刻目の施文法			口縁部突帯の位置	器形	突帯間の関係	調整			突帯の有無	個体数
	刺突	押し	引き				一次	二次	三次		
A ₁	◎			◎	◎	◎	4	5			9
	○				○	○	1	1			2
	○			○	○	○		○			1
	○				○	○		○			1
	○			○	○	○		○			2
A ₂	◎	◎		◎	◎	◎	5	6			11
	◎	◎		◎	◎	◎	3	4	1		8
	○	○		○	○	○		○			5
	○	○		○	○	○	4	1			5
	○	○		○	○	○	1	2			3
	○	○		○	○	○	1	3			4
	○	○		○	○	○	1	6			7
	○	○		○	○	○	1	2			3
	○	○		○	○	○					3
A ₃	○	○		○	○	○	○				1
	○	○		○	○	○	○				1
	○	○		○	○	○	○				3

(◎は10個体以上, ○は5個体以上あることを示す。
突帯の調整は観察不足にて不明)

(3) 唐津地域

本地域のⅢA類は66点が確認できる。

ⅢA類第1群(ⅢA₁) 5つのバリエントがある。上から2番目の甕は口縁部突帯の位置と、刻み目が古い特徴をもつので本群に含めた。他は有明海沿岸の第1群に存在したバリエントである。この地域には、ⅢA類のなかでは最も古く位置づけられるバリエント(屈曲する胴部に刺突刻みの突帯を口縁部から下がった位置に貼り付ける)がとくに多く出土している。ⅢC類からⅢA類への器種転換に際して中心的役割をを果たした地域を意味しているのだろうか。

ⅢA類第2群(ⅢA₂) 8つのバリエントがある。そのうち6つは有明海沿岸や西北

九州の第2群に存在したものである。上から3番目の甕は、器形と刻み目から、一番下の甕は、刺突刻みであるにもかかわらず、器形と口縁部突帯の位置が新しい要素をもつことから本群に含めた。この段階に、最も多くのバリエントをもつのが唐津の本群で、それぞれは量的にも安定している。押し引き刻みを施した突帯を口縁部から下がった位置に貼り付ける甕が大半をしめる。胴部は屈曲するものと屈曲の痕跡を残すものがある。

ⅢA類第3群(ⅢA₃) 3つのバリエントがある。屈曲する胴部の甕は、口縁部突帯

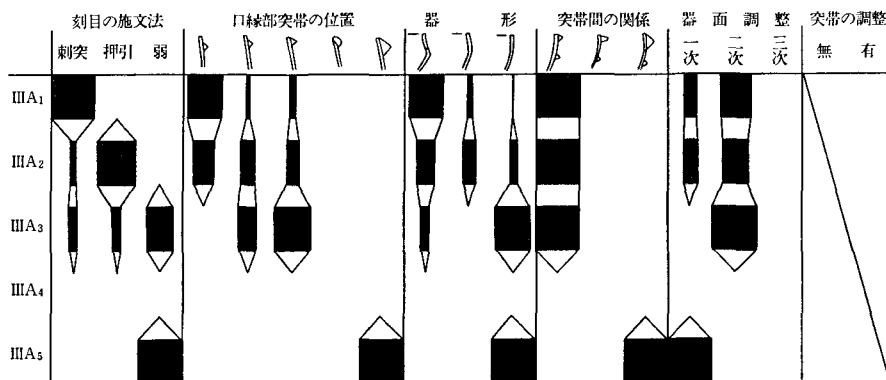


図16 唐津地域甕ⅢA類群別属性の比率

の位置と刻みの施文法に新しい要素がみられることから本群に含めた。他は有明海沿岸や西北九州と同じバリエーションである。3つとも個体数が少ないのは、西北九州の第5群のように遺跡の存続幅に起因するのではなく、唐津の甕組成にみられる地域性が反映した結果である。これについては後述する。

ⅢA類第4群(ⅢA₄) 西北九州と同じくもと存在しない。

ⅢA類第5群(ⅢA₅) 西北九州の第5群と同じ理由から設定しなかったが、柏崎貝塚から本群相当のバリエーションが多量に出土している。

図16は唐津におけるⅢA類の特徴を属性毎に算出して並べたものである。

(4) 福岡地域

ⅢA類50点を対象に分析をおこなった(表8)。

ⅢA類第1群(ⅢA₁) 4つのバリエーションはすべて、いままでみてきた地域の第1群に存在する。バリエーションの数は少なく、それぞれの量も少ない。もっとも古いくみあわせをもつバリエーションは1個しか存在せず、中心となるのは口縁端部からわずかに下がった位置に突帯を貼り付ける甕である。器形的には屈曲するものが90%弱を占め古い傾向をもつが、口縁部突帯の位置が上昇しているバリエーションが全体の50%を占め、新しい傾向をもつ。第2群の西部九州のなかではもっとも口縁端部に近い位置に突帯を貼り付ける地域である。

ⅢA類第2群(ⅢA₂) 6つのバリエーションがある。上から2番目の甕は、刺突刻みではあるが、口縁部突帯の位置と器形に新しい特徴がみられるため本群に含めた。この甕は現在のところ福岡だけに存在する。もっとも個体数が多い甕は押し引き刻みの突帯を口縁端部に接して貼り付けた、屈曲するバリエーションである。この段階は依然として口縁部突帯の位置にバリエーションが多くみられる。しかし口縁部突帯の位置cが60%弱を占めることから口縁端部に近い位置に貼り付ける傾向を指摘できよう。

ⅢA類第3群(ⅢA₃) 5つのバリエーションがある。一番下の甕は、刻み目の特徴から本群に含めた。福岡だけで確認されてい

表8 福岡地域ⅢA類バリエーション

属性 群	刻みの 施文法 刺突引	口縁部突帯の位置 ↑ ↓ ↑ ↑ ↑ ↑	器形 〰 〰 〰 〰 〰 〰	突帯間の 関係 同大 隔	調整			突帯調整 無有	個体数
					一	二	三		
A ₁	○	○	○	○	○	○	○	○	1
	○	○	○	○	○	○	○	○	1
	○	○	○	○	○	○	○	○	4
	○	○	○	○	1	1	○	○	2
A ₂	○	○	○	○	1	6	5	2	7
	○	○	○	○	1	3	1	3	4
	○	○	○	○	2	3	○	○	4
	○	○	○	○	○	○	○	○	1
	◎	◎	◎	◎	2	7	1	◎	10
	○	○	○	○	1	2	2	1	3
A ₃	○	○	○	○	○	○	○	○	1
	○	○	○	○	○	○	○	○	2
	○	○	○	○	○	○	○	○	2
	○	○	○	○	○	○	○	○	3
	○	○	○	○	○	○	○	○	1
A ₄	○	○	○	○	○	○	○	○	1
	○	○	○	○	○	○	○	○	2
	○	○	○	○	○	○	○	○	1

(◎は10個体以上、○は5個体以上あることを示す。)

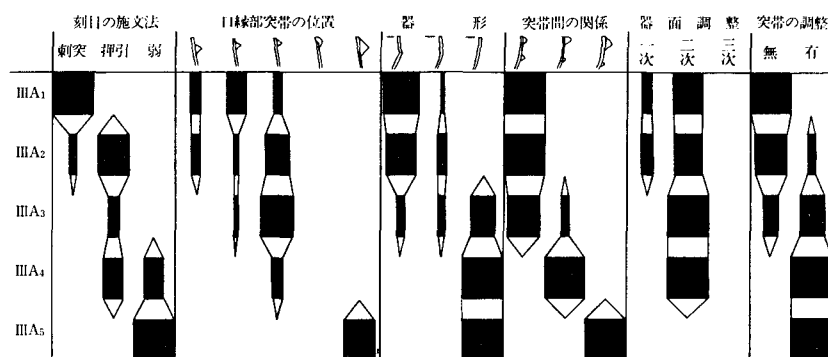


図17 福岡地域ⅢA類群別属性の比率

る。この段階の刻み目のなかではもっとも小ぶりなもので、福岡では刻み目の形骸化が他の地域よりも早く進んでいることをうかがえる。

ⅢA類第4群(ⅢA₄) 一番上の甕は、福岡だけで確認されているバリエーションである。この段階の基本的な甕は、単純にすぼまる器形で、口縁部突帯の肥大化がはじまるが胴部突帯もまだしっかりしていて、両突帯の大きさはまだそれほど開いていない。整美な押し引き刻みを施すが、すでに形骸化した刻み目をもつ甕も出てきている。有明海沿岸地域に比べるとバリエーション、個体数とも少ない。

ⅢA類第5群(ⅢA₅) 今までと同じ理由から設定しなかった。ただし、この地域の甕は大半が刻み目をもっていないことが指摘できよう。城ノ越式の中心となる甕に相当する。

福岡のⅢA類には、本地域にしかないバリエーションが三つあるものの、いずれも個体数が1ないし2点とわずかにすぎない。また全時期を通して個体数が10以上のバリエーションは1つしかない(第2群)。バリエーションが多い反面、個体数は少ないという特徴を指摘できよう。属性面では、口縁部突帯を貼り付ける位置が他の地域に比べて早く上昇する傾向をもっている。

図17は福岡におけるⅢA類の特徴を属性毎に算出して並べたものである。

③ ⅢB類

口唇部に直接刻みを施し、胴部に刻み目突帯を貼り付ける甕は、前稿でも指摘したように唐津地域に分布の中心をもつ甕で[横山・藤尾, 1986], 今回あつかった84点のうち72点はこの地域から出土している。ⅢB類の主要属性には器形と刻み目の施文法がある。ⅢA類の分析で有効だった刻み目の施文法を適用したうえで、唐津地域におけるⅢA類の変化を考慮しながら並び換えたのが表9である。全体を三群に大別し

た。

ⅢB類第1群(ⅢB₁) 2つのバリエーションがある。口唇部や胴部の突帯に刺突による刻みをほどこし、器面を一次調整段階で仕上げる甕である。屈曲する器形の甕がほとんどである。熊本県上南部遺跡、菜畑遺跡、宇木汲田遺跡、曲り田遺跡等で出土している。資料数はまだ5点で少ない。これは甕Ⅲ類に占める比率を反映したもので、この段階がⅢB類の出現期に相当し、器種としては定型化以前の状況をあらわしているものであろう。

ⅢB類第2群(ⅢB₂) 4つのバリエーションがある。押し引きによる刻みをほどこし、二次調整段階で仕上げる甕である。屈曲する器形の甕が過半数を占める。なかでも3つのバリエーションは個体数も多く、器種として定型化しⅢ類のなかに占める割合もかなりあがったことを予想させる。熊本県下江津湖遺跡、斎藤山遺跡、佐賀県礫石遺跡、長崎県白浜遺跡でも出

土しているが、唐津平野に所在する遺跡(菜畑遺跡8上層、宇木汲田遺跡)に集中する傾向がでてくる段階で、この地域ではⅢB類が甕のなかに占める比率は65%から80%にも達する。

ⅢB類第3群(ⅢB₃) 4つのバリエーションがある。屈曲のない器形に押し引き刻み目をもつ甕と、弱く刻んだ刻み目をもつ甕の段階である。分布は唐津、長崎県五島列島の沿岸部に限定され、とくに唐津平野への集中傾向は以前よりも強まっている。一次調整段階で仕上げる甕がわずかに増えるのは、刷毛目技法を採用したことによる。先述したように唐津でⅢA₃が少なくなったのは、Ⅲ類のなかにおけるⅢB₃との組成率が逆転したことを反映していたからである。

図18はⅢB類の特徴を属性毎に算出して並べたものである。

④ ⅢC類

屈曲する胴部をもつ甕のなかで、口縁部だけに刻目突帯を貼り付ける29点を対象とする。ⅢC類にはⅢA類と同じく主要属性(刻み目の施文法、口縁部突帯の位置、器形)が適用できる。ⅢA類と同じ方法でその組み合わせをみると7つのバリエーションが存

表9 甕ⅢB類バリエーション

属性 群	刻み目の施文法			器 形			調 整			個 体 数
	刺 突	押 引	弱	〰	〰	〰	一 次	二 次	三 次	
B ₁	○			○			○			4
	○			○			○			1
B ₂	◎			◎			◎			9
	◎			◎				◎		20
	◎			◎				◎		15
	○			○				○		1
B ₃		○		○				○		5
		○		○				○		1
	◎			◎			6	16		22
		○		○			2	4		6

(◎は10個体以上、○は5個体以上存在するもの)

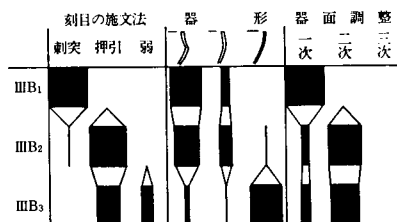


図18 甕ⅢB類群別属性の比率

表10 甕ⅢC類バリエント

属性群	刻目の施文法	口縁部突帯の位置	器形	調整	突帯調整	個体数
	刺突 押引 弱	弱 中 強	弱 中 強	一 二 三 次 次 次	無 有	
C ₁	◎	◎	◎	10 7	12 5	17
	○	○	○	1 0	○	1
	○	○	○	1 1	○	2
C ₂	○	○	○	1 3	1 3	4
	○	○	○	○ ○	○	1
	○	○	○	○	○	2
	○	○	○	○	○	2

(◎は10個体以上, ○は5個体以上存在するもの。)

突帯文土器全体のなかではもっとも古い時期に位置づけられよう。ⅢA類と同じく刻み目の施文法に注目して二群に分けた。

ⅢC類第1群(ⅢC₁) 3つのバリエントがある。刺突刻みの甕が本群に相当する。中心となるのは屈曲する胴部をもち口縁端部から下がった位置に突帯を貼り付ける甕である。3つともⅢA₁に同じ組み合わせが存在する。一次調整と二次調整の比率はほぼ半々で、刻んだあとの突帯はナデないものが多い。福岡でも板付遺跡E-5・6区9層、有田七田前遺跡、十郎川遺跡で出土しているが、量的にみれば島原半島、熊本平野、唐津地域に分布の中心がある。

ⅢC類第2群(ⅢC₂) 4つのバリエントがある。押し引き刻みの甕が相当する。刺突刻みの甕は口縁部突帯の位置に新しい傾向がみられるため本群に含めた。中心となるのは屈曲する胴部をもち口縁端部から下がった位置に突帯を貼り付け押し引き法で刻み目を施す甕である。個体数は4点しかないが、ⅢC類においても刺突刻みから押し引き刻みへの変化を確認できたことは、九州における甕の器種変遷を考えるうえで重要な意味をもつ。島原半島、五島列島、福岡平野で出土し分布の変化は認められない。図19はⅢC類の特徴を属性毎に算出して並べたものである。

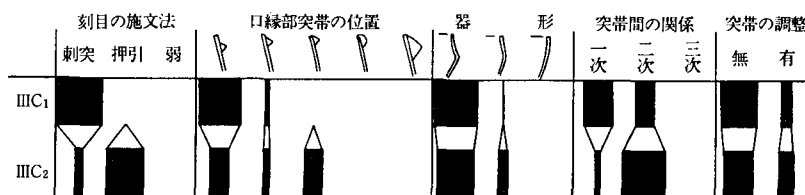


図19 甕ⅢC類群別属性の比率

⑤ ⅢD類

胴部だけに刻目突帯をもつ甕, 38個体を対象とする。本類の主要属性は刻み目の施

表11 ⅢD類バリエント

属性 群	刻目の 施文法	器 形	調 整	突帯 調整	個 体 数
	刺 突 引 弱	〃 〃 〃	一 次 二 次 三 次	無 有	
D ₁	○ ○ ○	○ ○	5 4 ○ ○	1 ○	9 3 5
D ₂	◎ ○ ○	◎ ○ ○	4 8 ○ 2 2	1 4 1 1	12 5 4

(◎は10個体以上, ○は5個体以上存在するもの。突帯の調整は観察不足にて不明)

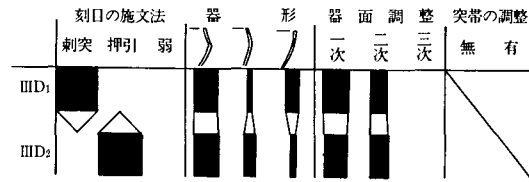


図20 ⅢD類群別属性の比率

文法・器形しかないため、二つの組み合わせから6つのバリエントを確認できる。個体数が10個前後のバリエントが2つあり、それぞれはいわゆる刺突甕と押し引き甕に相当する。刻目の施文法を基準に二群に大別する(表11)。

ⅢD類第1群(ⅢD₁) 3つのバリエントがある。刺突刻みをもつ甕である。屈曲する胴部をもつ甕がほぼ半数を占める。曲り田遺跡の甕は一次調整, その他は二次調整で仕上げる。島原半島, 唐津地域で出土する。

ⅢD類第2群(ⅢD₂) 3つのバリエントがある。押し引き刻みをもつ甕である。屈曲する胴部をもつ甕が半数をしめる。大半が二次調整で仕上げ, また刻み目の施文後の突帯にヨコナデをくわえるなど, 丁寧に仕上げる甕が増加している。分布域を拡大し, 鹿児島, 熊本平野, 西北九州, 早良平野でも出土する。ⅢD類はⅢC類とは違って, 存続幅に偏りがなく, 早期段階における一般的な器種といえよう。

図20はⅢD類の特徴を属性毎に算出して並べたものである。

⑥ Ⅱ 類

胴部が屈曲せず単純にすばまる器形で, 口縁部だけに刻目突帯を貼り付ける甕317個体を対象とする。器形をのぞく, 刻み目の施文法, 口縁部突帯の位置の組み合わせは全部で11通り存在する(表13)。これらを細分するにあたり刻み目の施文法に着目して刺突法と押し引き法で分けると古い段階のⅡ類については細分も可能である。しかし新しい段階になると変化を見つけやすい属性は刻み目の施文法から口縁部突帯の形態に転換してしま

表12 ⅢA類とⅢD類との対応

刻目の施文法	口縁部突帯の位置		ⅢA類との対応
刺突刻み (46)	a 卜	31 (67.3)	ⅢA ₁
	b 卜	8 (17.4)	ⅢA ₁ (7), ⅢA ₂ (3), ⅢA ₃ (3)
	c 𠂔	5 (10.9)	ⅢA ₁ (5), ⅢA ₂ (8)
	d 𠂔	2 (4.4)	ⅢA ₁
	e 𠂔	0 (0)	
押し引き刻み (267)	a 卜	116 (43.4)	ⅢA ₂ (59)
	b 𠂔	68 (25.5)	ⅢA ₂ (30), ⅢA ₃ (3)
	c 𠂔	72 (26.9)	ⅢA ₂ (44), ⅢA ₃ (26)
	d 𠂔	11 (4.1)	無し
	e 𠂔	3 (0.1)	ⅢA ₄ (12), ⅢA ₅ (10)
弱い刻み (4)	a 𠂔	0 (0)	
	b 𠂔	0 (0)	
	c 𠂔	0 (0)	
	d 𠂔	0 (0)	
	e 𠂔	4 (100)	ⅢA ₅

表13 甕Ⅱ類バリエント

属性 群	刻目の 施文法	口縁部突帯の 位置	器形	調整	突帯 調整	個 体 数
	刺押弱 突引	〇 〇 〇 〇 〇	〇 〇 〇 〇 〇	一 二 三 次 次 次	無 有	
Ⅱ ₁	◎ ○ ○	◎ ○	◎ ○ ○	3 29 2 6 1 1	17 14 4 4 ○ 2	31 8 2
Ⅱ ₂	◎ ◎ ○ ◎ ○	◎ ◎ ○ ◎ ○	◎ ◎ ○ ◎ ○	20 95 14 54 ○ ○ 14 53 ○ ○	51 10 ◎ 68 2 3 3 64 1 7	115 68 5 67 8
Ⅱ ₃	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	3 3
Ⅱ ₄	○	○	○	○ ○	○ ○	4

(◎は10個体以上, ○は5個体以上あることを示す。)

う。ⅢA類の場合は、口縁部突帯と胴部突帯との大きさの関係でいわば相対的に把握できたわけだが、これをⅡ類に適用することはできない。したがって古い段階については刻み目の施文法を指標にするが、新しい段階についてはⅢA類にみられる口縁部突帯との形態比較から群設定をおこなう(表12)。

刺突刻みは、eをのぞくすべての口縁部突帯に施されている。このうちaとdの位置に刺突刻みを施した甕は、ⅢA類の最も古い群(ⅢA₁)だけに存在しているので、Ⅱ類のなかでも最も

古い群に相当しよう。一方、bの位置に貼り付けるバリエントはⅢA₁・ⅢA₂・ⅢA₃に、同じくcの位置に貼り付けるバリエントはⅢA₁とⅢA₂などⅢA類の複数の群にわたって存在している。前者の場合、それぞれ7・3・3個体ずつあり、この順番で胴部の屈曲がとれていく。したがって、突帯をbに貼り付け刺突刻みをほどこすバリエントは、ⅢA₁相当期に出現し、胴部の屈曲がなくなるとともに減少していったと考えられる。この結果、このバリエントはⅢA₁に対応するものとし、口縁部突帯の位置aのバリエントともにⅡ類のなかでももっとも古い群を構成するものとする。逆に、口縁部突帯の位置cの場合、ⅢA₁に5、ⅢA₂に8個体ずつあって、胴部の屈曲がとれていくにつれて漸増している。したがって、刺突刻みの突帯をcに貼り付けるバリエントはⅢA₁と同じ時期に出現し、ⅢA₂併行期に中心をもつ甕と位置づけ、ⅢA₂に対応するものとする。

つぎに押し引き刻みをもつⅡ類の口縁部突帯は、すべての位置に貼り付けられていることがわかる。ⅢA類との対応をみれば、aの位置に突帯を貼り付ける押し引き刻みを施した甕はⅢA₂だけに存在するので、ⅢA₂に対応するものと考えられる。一方、bとcの位置に突帯を貼り付けて押し引き刻みを施した甕はⅢA₂とⅢA₃に、eに貼り付けたものはⅢA₄とⅢA₅など複数の群にわたって存在している。またdに貼り付けた甕はⅢA類には見あたらない。

まず、口縁部突帯をbの位置に貼り付けるⅢA類押し引き甕の個体数はⅢA₂に30個体、ⅢA₃に3個体でⅢA₂に集中している。基本的にⅢA₂に対応するとしてよい

だろう。つぎに口縁部突帯を c の位置に貼り付けるⅢA類押し引き甕の個体数は、ⅢA₂に44個体、ⅢA₃に26個体で前者にやや偏っているが、c の位置に突帯を貼り付けるⅢA類押し引き甕はⅢA₃のなかで中心となるバリエントという事実がある。したがって、この甕は、ⅢA₂段階に出現して、ⅢA₃併行時に盛行するバリエントと言えよう。d に貼り付けるⅡ類押し引き甕は、ⅢA類の中に対応するものがみられない。しかし二次調整を最終調整とする点、刻みを施したあと突帯上をヨコナデ仕上げする点、出土した遺跡（斎藤山、白浜、有田七田前遺跡）から考えて、ⅢA₂とⅢA₃に対応するバリエントと考えられる。口縁部突帯を e の位置に貼り付けるⅢA類押し引き甕の個体数は、ⅢA₄に12個体、ⅢA₅に10個体で、偏りはみられないが、Ⅱ類押し引き甕の3点は、口縁部突帯が大形化して口縁部上面に平坦面が形成されてはいるものの、まだⅢA₄の口縁部突帯に相当し完全に肥大化はしていない。さらに底部もまだ脚台化するにはいたっていないことなどから、ⅢA₄に対応しよう。Ⅱ類も、口縁部突帯が肥大化しはじめると型式変化の舞台が、刻み目から口縁部突帯の大形化と底部の脚台化に移り、総合的な判断が要求される。しかし胴部まで残っていないとⅡ類なのかⅢ類なのかの判断がつかないほど近似するため、ⅢA類の変化と同じ変化が進んだと考えてもそう間違いはないだろう。

以上の結果、11のバリエントを次の四群に大別する（表13）。

Ⅱ類第1群（Ⅱ₁） 3つのバリエントがある。刺突刻みをもち、口縁部突帯の位置 a・b・d に突帯を貼り付ける甕が本群に相当する。なかでも a の位置に貼り付ける甕が圧倒的に多い。福岡に集中するが有明海沿岸や唐津にもわずかにみられる。地域的な偏りを強くもつ甕である。ⅢA₁に対応する。

Ⅱ類第2群（Ⅱ₂） 5つのバリエントがある。押し引き刻みで口縁部突帯が大形化していない甕が本群に相当する。口縁部の突帯は a・b・c・d の位置に貼り付ける。福岡に集中して分布する傾向は変わらないが、他の地域でもやや量的に分布するようになる。ⅢA₂からⅢA₃に対応する。

Ⅱ類第3群（Ⅱ₃） 押し引き刻みをもち口縁部の突帯がⅢA₄の突帯ほどに大形化した甕が本群に相当する。底部はまだ脚台化にいたっていない。口縁部突帯の位置は e である。分布は有明海沿岸に移り、福岡で姿をけす。ⅢA₄に対応する。

Ⅱ類第4群（Ⅱ₄） 口縁部の突帯がⅢA₅の突帯ほどに肥大化した甕である。底部は脚台化している。刻みをもたない甕や、わずかではあるがごく弱い刻み目を施した甕がある。今回は4点しかあげてないが、福岡、有明海沿岸、鹿児島などの西部九州に分布する。ⅢA₅に対応する。

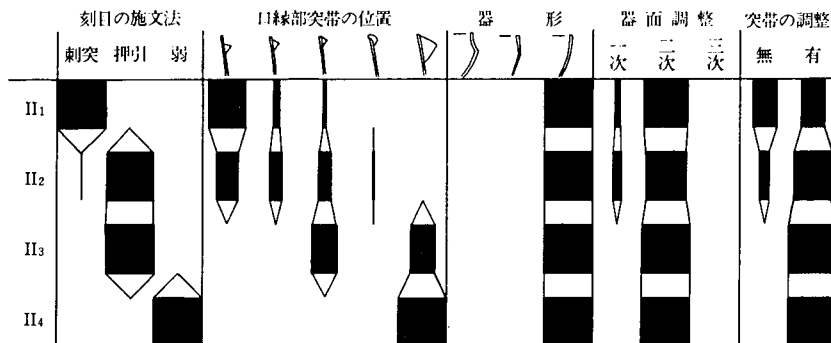


図21 Ⅱ類群別属性の比率

図21はⅡ類の特徴を属性毎に算出して並べたものである。

Ⅱ類は以前にも指摘したとおり、福岡に偏って分布する器種で、板付Ⅰ式甕の成立を契機に機能的役割をおえて、激減する甕である〔藤尾，1987a：24〕。その意味でⅡ類とは機能差をもつと考えられるⅢA類との比較から時間的位置づけをおこなうのは方法的に妥当ではないかもしれない。Ⅱ類の場合、ⅢA類に比べて型式学的に有効な属性である「器形」の変化を捉えにくいこと、今回の編年がⅢA類の変化を軸にしていることからこのような方法を採用した次第である。

⑦ IV 類

本類は前稿〔藤尾，1987a〕で器種分類と型式分類をすでに提示しているので、ここでは型式分類をあわせて再録した。口縁部形態からAとB・Cに二大別し、口唇部刻み目の位置と口唇端部形態から細別する。

IVA 直口縁の甕。口唇部刻み目の位置で二分する。

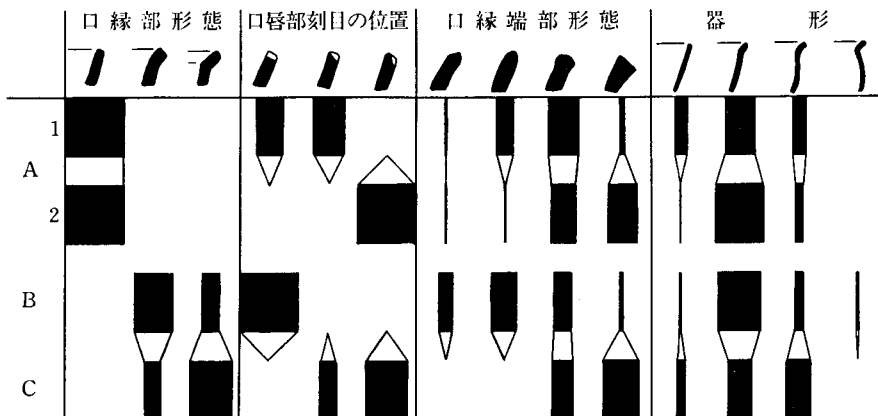


図22 Ⅳ類型別属性の比率

- ⅣA₁ 口唇部の全面もしくはほぼ全面に刻み目を施す。口縁端部形態は丸みをもつものが50%以上を占め、面取りしたものはほとんど存在しない(10%以下)。
- ⅣA₂ 口縁外端部に刻み目を施す。口縁端部形態は丸みをもつもの、面取りしたものが1:1の割合で存在する。
- ⅣB 外反口縁の甕で、口唇部全面に刻み目を施す。口縁端部形態は、尖るものと丸くおさめるものが60%以上を占め、面取りしたものは10%にも満たない。
- ⅣC 外反口縁の甕で、口唇部のほぼ全面・外端部に刻み目を施す。口縁端部形態は、面取りしたものが60%弱を占める。

図22はⅣ類の特徴を属性毎に算出して並べたものである。

2 壺形土器

水稻農耕開始期の壺には、彩文・ヘラ描き沈線による文様をもつ壺が一部に存在する点を除けば基本的に文様がない。したがって器形の変化に注目して群を設定する。

① 大形壺

大形壺A 肩が張る壺の系列(図5)

- A₁ 口頸部率が20%前後の壺で、外反が未熟な口縁部、直線的に内傾して立ち上がり、口縁部と接するあたりがもっともしめる頸部をもつ。丸底である。
- A₂ 口頸部率が30%前後に高まって口頸部に発達がみられる。頸部は内彎しながら立ち上がる。逆台形に開く平底の底部をもつ。
- A₃ 口頸部率は35%~40%前後に達し、頸部は内彎化を強めて頸部最小径がやや胴部のほうに下降する。口が広くなり広口壺に属す壺が完成する。胴部最大径は80%~85%とかなり上にあるが、扁平率は80%~90%と低いので長胴形を呈し不安定感が強い。口縁部は緩く外反して外面に段はもたない。底部は厚手の平底だが円盤状にはならない。

以後、口頸部率は45%まで高まるとともに扁平率も110%を超え極度の扁平胴に達したあと(図5-1)、今度は肩の張りを弱めながら器高が非常に高くなり、前期末の埋葬専用棺へと変化していく。田平編年のⅤ・Ⅵに相当し、「金海くずれ」と呼ばれているものは大半がこの系列に含まれる。弥生時代に盛行する成人用甕棺は、佐賀平野の刻目突帯文系壺からもでてくるのである。

大形壺B 肩が張らない撫で肩壺の系列(図5)

- B₁ 口頸部率が20%前後で、頸部は内彎しながら立ち上がる。丸底風の平底である。

B₂ 口頸部率が25%前後で、胴部最大径が65%~70%にある。平底である。

B₃ 口頸部率が30%前後で最大に達する。胴部最大径を65%前後にもち、器高も大形壺Aに比べて低いので、球形に近く安定した感じをみせる。口縁部が外側に開くことによって広口壺として完成する。外側に薄く粘土を貼り付けて段をもつ壺もある。平底である。

B系列は B₃ を最後に見られなくなる。この系列がもつ器形的特徴、法量的な問題が埋葬専用棺として発達する可能性をおしとどめたのではないだろうか。

大形壺 C AとBの中間的な器形をもつ系列(図5)。最大径の位置は70%~75%あたりに固定され、口頸部を発達させる一方、器高を減じていく点に特徴がある。

C₁ 口頸部率が25%前後で、AやBに遅れて出現する。

C₂ 口頸部率が30%前後に高まり口頸部がやや発達するが、器高は逆に低くなる。平底である。

C₃ 口頸部率が35%をこえ口頸部は発達を継続するが、さらに器高が低くなる。しかしその結果、不安定感がなくなり広口壺としても完成する。口縁部外面に段をもつものも存在する。

C系列はAやBに比べると板付式に近い。しかし図4をみるとわかるように板付式とは扁平率がかかなりかけ離れていて、まだまだ長胴傾向が強い壺である。このような大形壺が玄界灘沿岸と有明海沿岸の中間に位置する福岡県筑紫野市や小郡市に分布することは興味深い。

② 中・小形壺(図7~図9)

中・小形壺 A 長胴の壺である。

A₁ 口頸部率が30%前後で、立ち上がりのない丸底風の平底をもつ。文様は施さない。刻目突帯文系に属す。佐賀平野で確認されている。

A₂ 口頸部率が40%前後まで発達する。立ち上がりのある平底の壺も出現する。ヘラ描きの山形文や直線文を施文する壺もあるがごくわずかで、基本的に無文である。刻目突帯文系と折衷系A・Bがある。佐賀・唐津・福岡地域に普遍的に存在し、この時期の刻目突帯文系中・小形壺全体に占める割合が一番高い。

A₃ 口頸部率がふたたび30%前後に減少し、胴部の占める割合がふたたび高くなる。文様を多用する壺もわずかだが存在する。中・小形壺のなかに占める割合は低い。福岡平野、筑紫野地域に分布する。A₂との間にもう1群存在する可能性もあるが今回は分離できなかった。

中・小形壺 B 球形の胴部をもつ壺である。

B₁ 口頸部率は30%前後で、直線的に内傾する頸部をもつ丸底の壺である。文様はほとんどない。刻目突帯文系に属す。九州各地に分布する。

B₂ 口頸部率は30%前後で、内彎する頸部に立ち上がりのある平底をもつ壺である。文様はほとんどない。刻目突帯文系と折衷系A・Bがある。福岡平野には少ない壺である。

B₃ 口頸部率が20%前後で、朝顔形に開く円筒形の頸部をもつ壺である。城ノ越式の器形である。肩部に無軸羽状文を施す。福岡平野、筑紫野地域に分布する。

B₂ との間に1群存在する可能性があるが設定できなかった。

中・小形壺C 扁平な胴部をもつ壺である。

C₁ 口頸部率が40%前後の丸底の壺である。この段階における壺のなかでは口頸部がとくに発達している。文様はない。刻目突帯文系に属す。唐津平野ではまだ出土していない。佐賀平野の副葬小壺にバリエーションが多く存在する。

C₂ 口頸部率が40%前後の壺で、胴部最大径の位置が60%より上にあり、扁平率も140%以上を示して極端に扁平化している。口縁部は強く外反するがまだ短い。立ち上がりのない平底を基本とし、肩部のへら描き沈線以外に文様はない。刻目突帯文系に属す。佐賀平野、曲り田遺跡で確認されている。

C₃ 口頸部率が40%～50%の壺で、口頸部はもっとも発達している。扁平率も150%前後に達してさらに扁平化している。底部には丸底や平底があって一定していない。非常に文様を多用する壺である。刻目突帯文系と折衷系A・Bがある。新町・藤崎・今川遺跡といった福岡平野の周縁地域に強い分布をみせる。

C₄ 口頸部率が40%～50%、扁平率が120%前後の壺である。わずかに立ち上がりのある平底を呈す。肩部にへら描きを用いた上弦の重弧文・山形文、多帯化した直線文を施している。C₃とC₄は文様を多用するという点でこの時期の遠賀川下流地域をのぞけば、九州ではきわめて特異である。刻目突帯文系に属す。佐賀平野・熊本平野などの有明海沿岸地域に分布する。

中・小形壺D 扁平な胴部をもつ壺である。

D₁ 胴部最大径が80%前後、扁平率が100%～110%前後の壺である。折衷系Aと板付I式がある。折衷系Aは佐賀平野、板付I式は玄界灘沿岸に分布する。

D₂ 胴部最大径が60%～70%前後、扁平率120%～130%前後の壺である。折衷系Aと板付I式がある。折衷系Aは佐賀平野や玄界灘沿岸に、板付I式は玄界灘沿岸に分布している。

D₃ 胴部最大径が60%～70%前後、扁平率が90%～100%前後の壺である。口頸部

は30%前後にさがり胴部がふたたび発達する。無軸羽状文を肩部に施文する壺がある。早良平野や筑紫野地域など福岡平野の周辺に分布する。D₂とのあいだに1群存在する可能性もあるが設定できなかった。

中・小形壺E 長胴で胴部に稜をもつ壺である。

E₁ 口頸部率は30%~40%で立ち上がりのない平底の壺である。文様はない。刻目突帯文系に属す。島原半島、佐賀平野や唐津周辺に分布するが福岡平野ではまだ確認されていない。

E₂ 口頸部率は50%前後にまで発達する壺である。口縁部外面に貼り付けによる段や、円盤貼り付け状の底部をもつ壺もある。基本的には無文である。折衷系Bに属す。唐津平野ではまだ確認されておらず、福岡平野や佐賀平野に分布している。

以上、中・小形壺AからEまでを細分した。本文中でみてきたように時期や地域毎にまとまりをみせていることから、型式として認定できよう。墳墓にみられる共伴関係から甕との併行関係をとると以下ようになる。

甕ⅢA₁ 併行期にA₁・B₁・C₁・C₂・E₁が出現する。現在、有明海沿岸では全型式が揃っているが、唐津ではA₁とC₁が、福岡ではA₁・C₂・E₁が欠落している。

甕ⅢA₃ 併行期に板付I式(D₁・D₂)が唐津と福岡で成立すると壺の組成に変化が生じる。折衷系の壺が各地で新しく成立して、前の段階から継続する刻目突帯文系とあわせて三つの系統から構成される。有明海沿岸はA₂・B₂・C₃・D₁・D₂・E₂がセットとなるが、系統的には刻目突帯文系と折衷系Aしかない。唐津はE₂のみが欠落するが、系列的にはすべて存在している。福岡は型式・系統ともすべて存在する。

甕ⅢA₄ 併行期になると中期壺組成の基本的セットがそろそろ。刻目突帯文系はすでに単独では存在せず、板付系と融合した系統(融合系)に発展することで、板付系と融合系の二つの基本系統が完成する。この2系統が基本となって中期様式へと転換し

表14 中・小形壺と甕ⅢA類との併行関係一覧表

壺型式 甕ⅢA類	有明海沿岸					唐津					福岡				
	A	B	C	E	D	A	B	C	E	D	A	B	C	E	D
ⅢA ₁	A ₁	B ₁	C ₁	E ₁			B ₁	C ₂	E ₁			B ₁	C ₁		
ⅢA ₂			C ₂												
ⅢA ₃	A ₂	B ₂	C ₃	E ₂	D ₁ ・D ₂	A ₂	B ₂	C ₃		D ₁ ・D ₂	A ₂	B ₂	C ₃	E ₂	D ₁ ・D ₂
ⅢA ₄			C ₄			A ₃	B ₃			D ₃	A ₃	B ₃			D ₃
ⅢA ₅															

表15 甕出土遺跡別型式一覧表

遺跡名	型式	Ⅱ類				ⅢA類					ⅢB類			ⅢC類		ⅢD類		Ⅳ類			
		1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	1	2	1	2	A1	A2	B	C
有明海沿岸地域		2	22	6	2	0	42	15	12	10	2	2	0	5	1	0	12	0	2	0	1
上南部A遺跡											1			5							
下江津湖遺跡		2	13			15						1		1		11					
斎藤山遺跡			2			8	4					1				1					
大門西遺跡						1	5			7											
亀ノ甲遺跡		5		1			4	5	3												
礫石遺跡		2	1			17	1	3			1							2		1	
久地井C遺跡				5	1	1	1	4													
薩摩地域		0	3	0	2	2	6	5	5	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0
阿多貝塚			1		1	2	1			1											
高橋貝塚			2				4	4	1												
下原遺跡					1	1	1												1		
東昌寺遺跡									4												
上二月田遺跡																1					
西北九州地域		0	15	0	0	2	20	10	0	1	0	1	1	0	1	0	5	0	9	0	0
白浜貝塚			15			1	14	8		1		1	1			3		9			
津吉遺跡							2	2								1					
黒丸遺跡						1															
針尾遺跡							1														
里田原遺跡							2									1					
中屋敷遺跡							1														
唐津地域		8	32	0	0	15	46	5	0	0	4	35	34	6	0	14	2	37	47	8	10
菜畑 9～12層		2	2			7	2	1			1			1		1		5	1		2
〃 8下層			21			2	15					1				2		4	4		
〃 8上層			7				12	3				15	18			7		19	5	5	
宇木汲田遺跡		2				3	8	1			2	14	15	1		2		1	10		1
曲り田遺跡		4	2			3	9				1	5	1	4		4		8	27	3	7
早良平野		23	86	0	0	3	16	5	0	0	0	3	0	4	1	0	1	1	2	0	3
有田七田前遺跡		22	57			3	8	3			3			2				1	2		3
十郎川遺跡			1	28			5	2						2	1	1					
千里シビナ遺跡			1				1				1										
有田環溝							2														
福岡平野		7	107	0	0	4	14	5	5	0	1	2		1	4	0	0	0	10	20	10
諸岡 F		1	1																		
板付 G-7a・b 下層		4	4			2	1													2	
〃 E-5b 下層			3			1	3							1	3						
〃 E-5・6 中層			3			1															
〃 E-5・6 上層			8											1							
〃 G-6a		1																		1	
〃 環溝			7			1	5	2	4									1	9	6	
〃 G-7a・b 中層			2																		
〃 G-5a			2																		
〃 G-7a・b 上層			1				2														
〃 E-5b							2	2	1												
野多目SD02下層		1	60			1	(3)				1	2		1				8		1	
〃 SD02上層		1	16				(6)											1	11		

〔凡例 ()中の数字は器種の判別しかできないもの〕

て、有明海沿岸にはC₄、玄界灘沿岸にはA₃・B₃・D₃が分布する。

以上の関係をまとめたのが表14である。

3 時間軸の設定

さきほど設定した甕の群がどのような出方をしているのか地域毎・遺跡毎に示したのが表15⁽¹⁵⁾である。とくに土器が層位的に確認されている菜畑遺跡と板付遺跡は、群が有意的なものかどうか判断する場合の目安となる。ⅢA₂は菜畑のすべての層から出土し、他にもⅢA₂のような例がかなり認められる。菜畑の各層はそれぞれが一様式を構成するとされているので、一型式が3つの様式にまたがって存在することは合理性を欠く。設定した群がタイプとして認定できないのか層位に問題があるのかのどちらかであろう。しかしこれらのタイプの個体数の推移を層毎にみると紡錘形をなして、これは一種のセリエーションと考えられ整合性をもっている。また地域的にも全般的な分布をとるものと、地域性をもつものが存在している。時間的・空間的に一定のまとまりをもつこれらの群は刻目突帯文甕の型式として設定できよう。

最後に全器種の併行関係をみなければならぬ。甕のなかでもっとも時間幅をもって普遍的に存続し、型式変化を捉えやすいⅢA類を基準とする。ⅢA類の5型式と他の器種との併行関係をみて、九州における刻目突帯文土器の時間軸を設定する。

Ⅳ類以外の甕は、ⅢA類との比較検討をへて群を設定しているので、そのまま対応がとれる。その結果、併行関係は表16のようになる。ⅢA類と同じ主要属性（刻み目の施文法、口縁部突帯の位置、器形）をもつⅢC類は、同じバリエーションをもつものが併行すると考える。それからⅢA類の主要属性の一部と一致するⅢB、ⅢD、Ⅱ類は、刻み目の施文法の類似度をはかりながら対応を考えた。Ⅳ類は、ⅢA類と共通する主要属性が刻み目の施文法ひとつだけなので、型式学的に併行を考えるのは難しい。またⅣ類の型式分類の基準には刻み目の施文位置があるだけで、刻み目の種類を考慮した分類にはなっていない。刺突法は、口唇部という非常にせまい部分に施文することを考えれば、物理的にも難しかったようで、押し引き法や、弱い刻み目が主流

表16 甕型式併行関係一覧表

期	ⅢA類	Ⅱ類	ⅢB類	ⅢC類	ⅢD類	Ⅳ類
I	ⅢA ₁	Ⅱ ₁	ⅢB ₁	ⅢC ₁	ⅢD ₁	ⅣA ₁
II	ⅢA ₂	Ⅱ ₂	ⅢB ₂	ⅢC ₂	ⅢD ₂	ⅣA ₂ ・B・C
III	ⅢA ₃		ⅢB ₃			
IV	ⅢA ₄	Ⅱ ₃	×	×	×	
V	ⅢA ₅	Ⅱ ₄	×	×	×	

を占めている。そこで層位と板付Ⅰ式甕

成立のプロセスを考慮して、前稿で示した編年観を踏襲する。

この併行関係をもとに期を設定し時間軸として、ⅢA₁からⅢA₅に対応するⅠ期からⅤ期を設定する。

V 西部九州の刻目突帯文土器に関する諸問題

1 二条甕の成立について

二条甕（ⅢA類）の最大の特徴は、胴部に刻みを施した突帯をもつことにある。したがって二条甕がどのようにして成立したのか考えるためには、まず胴部に文様を施す行為がどのようにして始まったのか検討しなければならない。中部瀬戸内では、最古の突帯文土器である前池式〔潮見・近藤，1956〕の出現以前から頸部や胴部に文様をもつ土器が存在するが、西部瀬戸内は無文化傾向が強く、西部九州では深鉢の胴部に文様をまったくみることはできない。ところがこの時期の西部九州には、文様を豊富にもつ深鉢以外の器種がある。今回の器種分類のなかで甕Ⅲ類とした土器のなかに、胴部に屈曲をもつ器形で口径が器高をわずかに上回るものがある。厳密に言えば鉢形に属するこれらの粗製土器は、刻目をもつ突帯や刻目文などの文様バリエーションが甕に比べてきわめて豊富で、口縁部と屈曲部における文様の組合せは7つにも達する〔横山・藤尾，1986〕（表17）。本稿で器種設定したⅢA・ⅢB・ⅢC・ⅢD類以外の文様バリエーションが、この鉢形の土器にすべて含まれていることは、二条甕の成立と定型化を考える際に重要な意味をもつ。

この時期の文様がまず口縁部に施されることは、口唇部直接刻みの土器が刻目突帯文土器出現以前に存在する点や、組織痕文をもつ鉢Ⅷ類の口縁部に刻目突帯が施されていることから確認できる。⁽¹⁶⁾問題は屈曲部に対する文様の施文が口縁部への施文と同時ににおこなわれたのか、それとも同時ではないのかどうかという点と、これらの鉢形土器とⅢC・ⅢA類との時間的關係である。西部九州の深鉢の屈曲部に対する施文の契機については、すでに次のような見解がある。口縁部「突帯に刻目を水平方向から施す意識の延長として突出した肩部にも施すようになり、これが突帯へと変化して2条の刻目突帯文が生まれる

表17 甕Ⅲ類文様バリエーションと分布

のである。」「〔家根，1981：

246〕。

西部九州には、屈曲部に文様を施文するⅢ類が5種類ある（表17）。この中から定型化した刻目突帯文土器

口縁部の文様	屈曲部の文様	本稿分類	分 布	器 形
刻凸	刻凸	ⅢA	各地に存在	甕・鉢形
刻凸	直刻	ⅢC	類例あり	甕・鉢形
刻凸	無	ⅢB	鹿児島欠落	甕・鉢形
直刻	刻凸		各地に存在	甕・鉢形
直刻	直刻		島原・平戸・早良	鉢形
直刻	無		島原	鉢形
無	刻凸	ⅢD	各地に存在	甕・鉢形
無	直刻		類例なし	
無	無	I B	各地に存在	甕・鉢形

であるⅢA、ⅢB、ⅢD類をのぞいたのこりの2つは、いずれも屈曲部に直接刻みをもつ鉢形の土器である。山ノ寺遺跡A地点では、この種の鉢形土器が刻目突帯文土器なかでもっとも古く位置づけられるⅢC₁と混在して検出されている。さらにこの鉢の刻みが刺突刻みであることを考えあわせれば、口縁部と屈曲部への施文は様式的にはほぼ同時とみることができ、屈曲部に文様を施すという意識は最初から存在していたことがわかる。それでは、屈曲部への刻目突帯の導入はどのようにしておこったのであろうか。これらの鉢の屈曲部に注目すればきわめて特徴的な形態をとることに気づく。胴部は明瞭に屈曲して稜をなすのではなく、つまみ出したような稜状となっている。このような部分に刻み目をつけようとすると、よほど深くしかも大きく刻まなにかぎりみばえのする刻み目文様を施すことはできない。そこででてくるのが屈曲部の貼り付け突帯である。刻み目を合理的に施し、装飾効果を実現する手段として突帯の貼り付けを想定するのである。最初は削り出したり、つまみ出したりして試行錯誤を重ねた結果、貼り付け突帯が採用されたのではないか。しかし、鉢を対象にした屈曲部突帯形成への動きも長続きしない。当時の社会状況は、生業形態の変化を背景とする壺の出現・増加と、浅鉢・鉢の減少という器種組成の転換が進んでいたもので、相対的な減少傾向にあった鉢において、新しい器種である二条突帯の土器が成立することはなかった。そこで注目されたのが同じ器形をもつ甕である。新しく入ってきた食料であるコメを調理する器種としての甕に対する当時の人々の意識には、特別のものがあつたにちがいない。このような甕に新しい文様パターン創造の舞台を移すことによって二条甕(ⅢA類)は成立したのである。ⅢC類の屈曲部への刻目突帯の施文は二条甕を成立させただけにとどまらず、ⅢB類やⅢD類をも成立させた。このようにⅢC類からⅢA類の成立にいたる過程を、橋口が説くように二段階に分けることもできよう。その場合、ⅢC類刺突甕とⅢA類刺突甕(屈曲する胴部をもつ甕の口縁部よりさがった位置に突帯を貼り付け、刺突法で刻み目を施した甕)とのあいだにある違いは、屈曲部に刻目突帯をもつかもたないかの違いである。良好な一括資料はないけれども、出土状況をみるかぎり時期差を主張するだけの証拠にとぼしい。したがってⅢC類・ⅢA類、ⅢB類・ⅢD類は様式的にはほぼ同時に出現したと考えるのが妥当である。分けるとしても橋口のように古と新段階を設定するにとどめたい。それでは二条甕を創造した地域はどこであろうか。水稻農耕の開始を背景として成立したと考える以上、早くから水稻農耕を開始した玄界灘沿岸において他にはない。なかでも、最古式に位置づけられるⅢC類刺突甕とⅢA類刺突甕が多く分布する唐津地域がその最有力候補である。

2 山ノ寺式土器と夜臼式土器の関係

西部九州における刻目突帯文土器の成立については、瀬戸内地方からの影響のもとにこれらの地方にやや遅れて成立すると考える泉や家根と、九州における内部発展の結果、瀬戸内とはほぼ同時に成立したと考える橋口に大きくわかれる。長行遺跡が所在する周防灘沿岸は、西部瀬戸内の土器型式圏に属するので、西部瀬戸内の刻目突帯文土器編年がそのまま適用できる。この地域の刻目突帯文土器編年は、愛媛県大淵遺跡の調査が最近おこなわれ整備されつつある〔栗田，1989〕〔古代学協会四国支部，1989〕。それによれば長行式は前池式併行とされている。ここまではどの研究者も大筋で同意しているが、長行式と西部九州の型式との併行関係になると意見がわかれる。瀬戸内や近畿の研究者は浅鉢の型式学的特徴を根拠に長行式を山ノ寺式に先行させて考える。西部九州の研究者はこの意見に対して積極的な反証はしていない。その最大のネックは西部九州の刻目突帯文土器編年がいまだ混沌としていることにある。その代表が山ノ寺式・夜臼式論争である。学史のところで論じたように、現在では菜畑9—12層出土土器と板付G—7 a・b下層出土土器（夜臼I式）との関係をさす⁽¹⁷⁾。

山ノ寺式と夜臼I式を地域差とみて併行すると考えるのか、それとも山ノ寺式と夜臼I式を時期差と考えるのか、いずれにしても双方の標式となっている土器を今回の型式分類と対照させてみよう。

表18・19をもとに、菜畑遺跡、曲り田遺跡、板付遺跡出土のⅢA類・Ⅱ類をバリエーション単位で比較する。

ⅢA類（表18） 注目するバリエーションは胴部に屈曲をもつ甕の口縁部から下がった位置に突帯を貼り付け、刺突法で大ぶりの刻み目を施文する甕（以下刺突甕と呼ぶ）と、同じ器形で同じ位置に突帯を貼り付け、押し引き法によって刻み目を施文する甕⁽¹⁸⁾（以下押し引き甕）である。刺突甕は量の差こそあれ菜畑9—12層，8下層，曲り田，板付G—7 a・b下層に存在している。また山ノ寺遺跡B地点でも出土している。

一方、押し引き甕は、菜畑8下層，同8上層，曲り田，板付G—7 a・b下層，同E—5・6下・中層で出土し，とくに菜畑には集中的に分布する。つぎに出土したⅢA類のバリエーションを層単位にみると，菜畑9—12層のⅢA類は刺突甕（3個体）と刺突刻みをもち口縁部突帯の位置を刺突甕と異にする甕（4個体）が中心で，押し引き甕は1点あるにすぎない。これに対し板付G—7 a・b下層では，刺突甕（1個体）や，刺突刻みの甕（1個体）以外に押し引き甕（1個体）が出土している。このようにⅢA類に関しては菜畑9—12層に，板付下層と比べて古い特徴をもつⅢA類が数多く存

〔凡例〕 III A類刺突囊, III A類押し引き囊 ()内の数字は型式しか判明しないもの

表19 甕型式別出土遺跡一覽表(ⅢA類以外)

[illegible]

〔凡例 II類刺突嚢, II類押し引き嚢〕

在していることがわかる。ⅢA類の刺突甕が多く存在することを根拠に菜畑9—12層を古く位置づけることは可能なのであろうか。

Ⅱ類(表19) ⅢA類と同様にⅡ類の刺突甕と押し引き甕の出方を遺跡別にみると、菜畑9—12層からは刺突甕(2個体)と押し引き甕(2個体)出土している。これに対し板付G—7 a・b下層からは刺突甕(4個体)がより多く出土すると同時に、押し引き刻みをもつ甕のバリエーションが3種4個体もある。このようにⅡ類の場合は、両遺跡とも古い甕と新しい甕が同じくらい含まれていることがわかる。つまりⅡ類のあり方を根拠にすると両遺跡に前後関係をつけることはできない。

型式学的に古く位置づけられるⅢA類刺突甕は、現在のところ島原半島と唐津に分布して集中度も高い。ⅢA類押し引き甕は刺突甕が少なかった福岡や西北九州でも量的に増加して分布する。一方、Ⅱ類はⅢA類とは逆に、刺突甕が福岡と唐津の玄界灘沿岸に集中し、押し引き甕になって熊本平野、五島列島にまで分布域を拡大する。すなわちⅡ類の最古式である刺突甕は福岡に強い分布をみせるが、ⅢA類の最古式である刺突甕は唐津・有明海沿岸に強い分布をみせるのである。つまり両地域には最古式の刻目突帯文土器が器種を異にして分布していたのである。山ノ寺式の刺突甕はⅢA類、夜臼Ⅰの刺突甕はⅡ類で、この器種の違いが両型式間の距離を遠くしていた理由なのである。したがって、山ノ寺式と夜臼Ⅰ式を地域差として認定する。⁽¹⁹⁾

3 従来の編年との対応

本稿の五期区分と従来の編年との対応関係について検討する。

① I 期

西部九州で刻目突帯文土器が出現する時期である。甕はⅡ₁・ⅢA₁・ⅢB₁・ⅢC₁・ⅢD₁・ⅣA₁タイプが、壺は大形壺A₁・B₁、中・小形壺A₁・B₁・C₁・E₁、高坏が出現して農耕の土器であるすべての器種がそろそろ。器種や同一型式内におけるバリエーションには地域的な偏りが強くみられ、刻目突帯文土器の出現時から地域差が存在していたことをうかがうことができる。口縁部に刻目突帯をもつ甕Ⅱ₁・ⅢA₁・ⅢC₁は、ほとんどが口縁部端から下がった位置aに突帯を貼り付け、刺突法で大ぶりの刻み目を施文している。ⅢC₁とⅢA₁とのあいだに属性レベルで型式差があることは事実で、橋口はこれを根拠の一つとして曲り田式を(古)・(新)に細別している。またさらに菜畑9—12層の古い要素を抽出して曲り田(古)と対応させてもよいとしている〔橋口, 1985〕。橋口の見解に対しては以下のように考えたい。

(1) Ⅲ類とならんでもう一つの代表的な器種であるⅡ類には、ⅢC₁からⅢA₁の変

化に対応する型式変化を想定することができない点。

- (2) 唐津においてⅢC₁がⅡ₁やⅢA₁の刺突甕と伴う点。
- (3) 遺跡のうえでⅢC₁が単純で出土し、ⅢA₁がともなわな

表20 西部九州刻目突帯文土器編年対照表

本稿	橋口85	中島82a	山崎80		森・岡崎61	
I	a	曲り田(古)	山ノ寺	夜臼 I		山ノ寺
	b	曲り田(新)				
II	夜臼式	夜臼式単純	夜臼 II a			
III		夜臼式	夜臼 II b	板付 I	夜 白	板付 I
IV			()	板付 II a		板付 II
V			亀ノ甲式	板付 II b		板付 III
			() ()			
			城ノ越式			

い遺跡は熊本平野にある上南部遺跡に限定されること。

これらを考慮すれば、ⅢC₁からⅢA₁への変化を様式差として認定するよりも、現段階では同じ様式内の古相・新相と位置づけておいたほうがよいと考え、橋口説に準拠するものである。そこでⅠ期をaとbに段階設定する。ⅠaはⅢC₁とⅡ₁が出現する段階で、鉢Ⅷ類(組織痕文土器)が残存している。Ⅰa単純の様相を示すのは上南部遺跡A地点である。ⅠbはⅢA₁が成立する段階である。山ノ寺B地点、曲り田、菜畑9—12層ともⅠaとⅠb双方の時期にわたっている。板付G—7a・b下層は、Ⅰa段階に相当する甕はⅡ₁しかみられない。しかし、Ⅱ類が主体の福岡においては、ⅢC₁がないからといってⅠa段階がないとの証明にはならないので、Ⅰa・Ⅰb双方の時期にわたると考える。したがってⅠ期はⅠaが曲り田(古)に、Ⅰbが曲り田(新)に対応するほか、山ノ寺式〔中島, 1982a〕, 夜臼Ⅰ式〔山崎, 1980〕はⅠ期に対応することになる。

② Ⅱ 期

甕はすべての器種に新しい型式であるⅡ₂・ⅢA₂・ⅢB₂・ⅢC₂・ⅢD₂・ⅣA₂・ⅣB・ⅣCが出現して、大形壺A₂・B₂・C₁, 中・小形壺C₂, 高坏とともに新しい器種構成をとる。甕Ⅱ₂, ⅢC₂・ⅢD₂だけはⅢ期までながく存続する。Ⅱ₂・ⅢA₂・ⅢC₂には突帯を口縁端部に接して貼り付けるバリエーションが多く、またⅢA₂・ⅢB₂・ⅢC₂・ⅢD₂の胴部は屈曲が弱まっている。全体として押し引き刻みが施され、いわゆる押し引き甕の時期である。Ⅱ₂とⅢA₂はⅠ期と同様に地域を異にして分布する。ⅢC類が少なくなるのは、ⅢA類への器種転換をほぼ完了したからであろう。唐津平野ではⅢB類の比率が高まり、ⅢA類よりも多くなる(図25—15・16)。また西北九州にⅢD類が始めて出現する(図26—25)。Ⅱ期は従来の夜臼Ⅱa式〔山崎, 1980〕, 夜臼式単純〔中島, 1982a〕, 夜臼式〔橋口, 1985〕の古い部分に対応する。

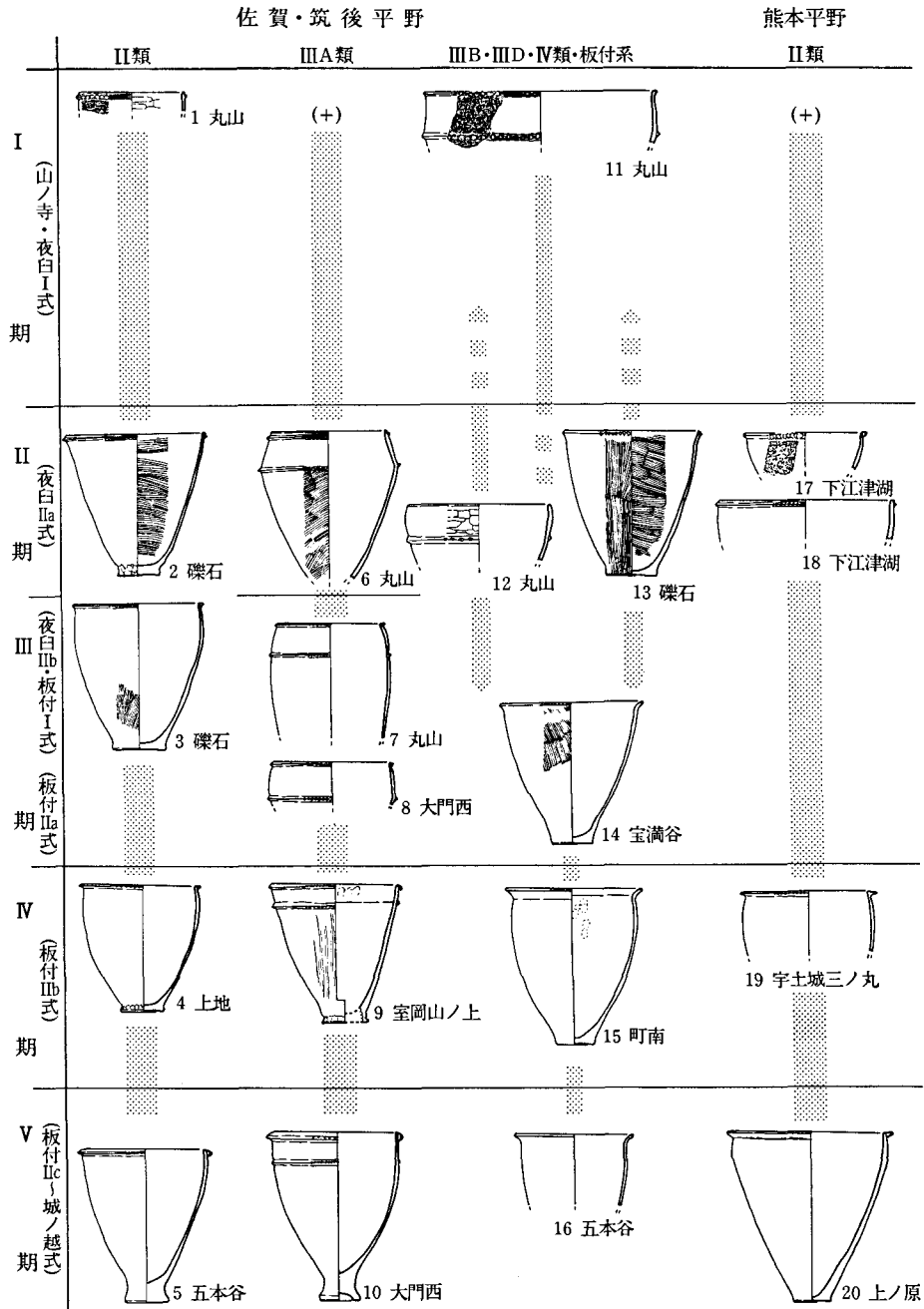
③ III 期

甕はII期から継続するII₂・III C₂・III D₂と新たに出現するIII A₃・III B₃からなる。壺は大形壺A₃・B₃・C₂, 中・小形壺A₂・B₂・C₃・D₁・D₂・E₂が出現する。玄界灘沿岸では甕IV B (図27—63) が変化して板付I式(図27—65)が成立し、弥生時代前期となるが、それ以外の地域は早期段階が継続している。一部の地域ではこの段階になってはじめてIII C類・III D類が出現する。III A₃には弱い刻みのものがあられ、屈曲のない胴部をもち口縁部の突帯を口唇端部に接して貼り付ける甕に統一される。器面調整にも変化がみられる。福岡地域では刷毛目、佐賀平野では板ナデ調整に替わり、早期的は条痕・ケズリ調整はもはや存在しない。唐津平野ではIII B₃(図25—17)が刻目突帯文甕の中心器種で、やはり屈曲のない胴部の甕が主流となっている。III期のIII C・III D類は遺跡からの出方からみるかぎりすでに残存的で、唐津のIII B₃を除けば、西部九州ではIII A₃とII₂に器種統一がすすんだといえよう。

唐津から福岡にかけての玄界灘沿岸では本期の前半いっぱい、刻目突帯文土器(唐津ではIII B₃, 福岡では圧倒的にIII A₃)が存続する。板付I式の成立以降もIII類が量的に存続する理由は、この器種が容器として特別の機能をもっていたためである。しかし本期の後半になるともはや刻目突帯文土器の甕は存在せず、板付系甕単純の甕組成に転換する。前期のいわゆる遠賀川土器様式とは、玄界灘沿岸で成立した板付甕単純の甕組成を特色とする土器様式で、玄界灘沿岸地域で成立・発展した農耕文化が瀬戸内海沿岸地域に伝播していったものを指す。西部九州では、板付I式の成立をもって、刻目突帯文土器の分布域が有明海沿岸地域以南に移り、いわゆる遠賀川様式とは異なる前期土器様式を発展させていく。甕III A₃は板付I式と共伴する夜臼式[森・岡崎, 1961]にもっとも近い内容をもつとともに、夜臼式に後続する有明海沿岸に分布するナデ調整仕上げの甕を含むことから、板付I・II a式に対応する。

④ IV 期

甕はII₃・III A₄からなる。大形壺は田平のV期に相当、中・小形壺A₃・B₃・C₄・D₃, 鉢・高坏の器種構成をとる。III A₄は単純にすばまる器形にやや肥大化した口縁部突帯を有するもので定型化した刻みを施文する。II₃はIII A₄の胴部突帯をのぞいた形態に類似している。II₃は今のところ福岡平野に例がなく、有明海沿岸でもわずかに分布する程度である。一方、III A₄は有明海沿岸に数多く分布するのに対して、福岡平野にはわずかしみられない。このような器種による分布域の違いは、西部九州に前段階からみられるII類とIII類の構成比率の差が継続しているにすぎない。甕の構成比率を異にする地域圏も明確化して、胴部突帯との幅が狭い、いわゆる亀ノ甲式甕



(縮尺 約1/10)

図23 西部九州における刻目突帯文土器編年図(1)

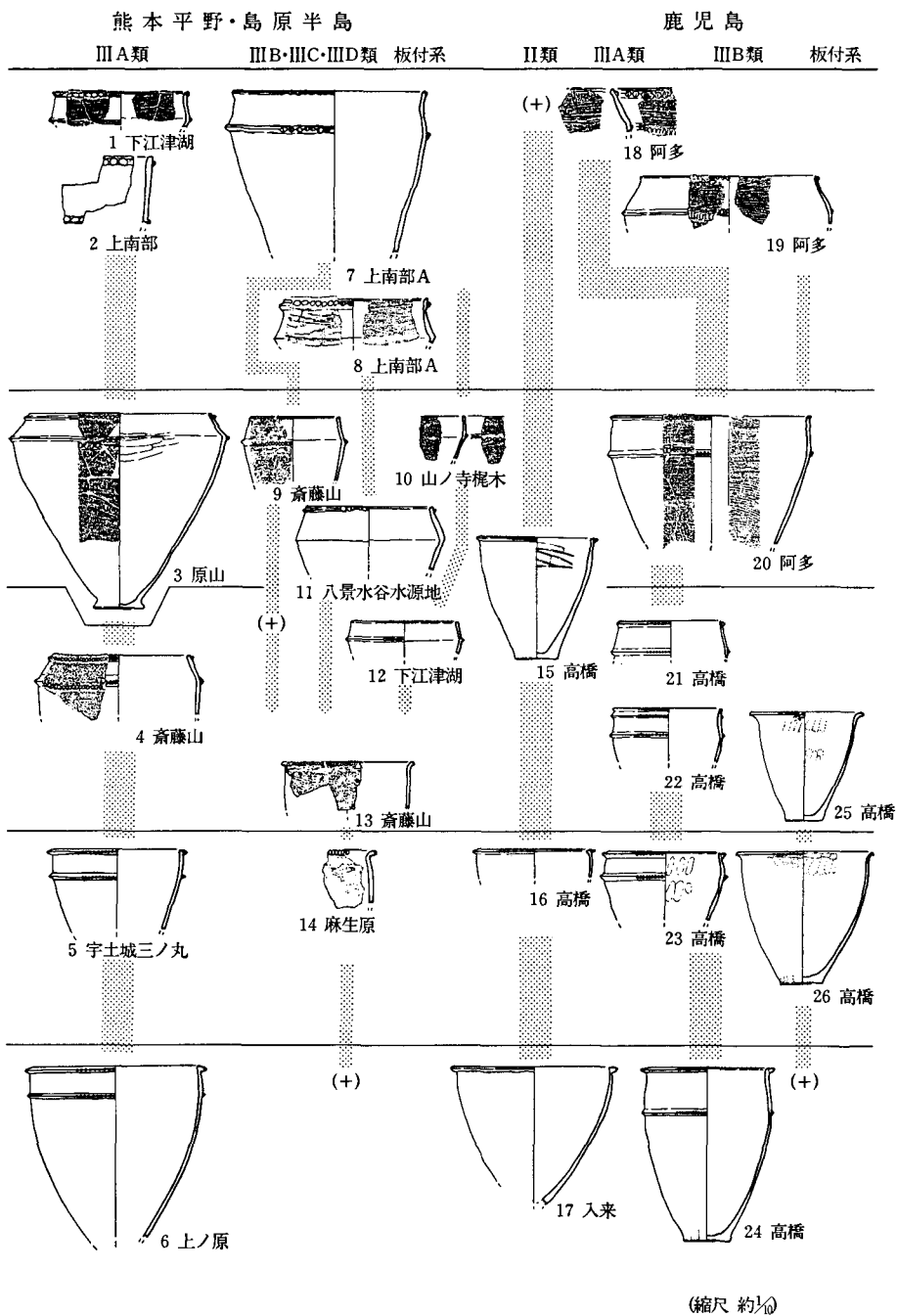


図24 西部九州における刻目突帯文土器編年図(2)

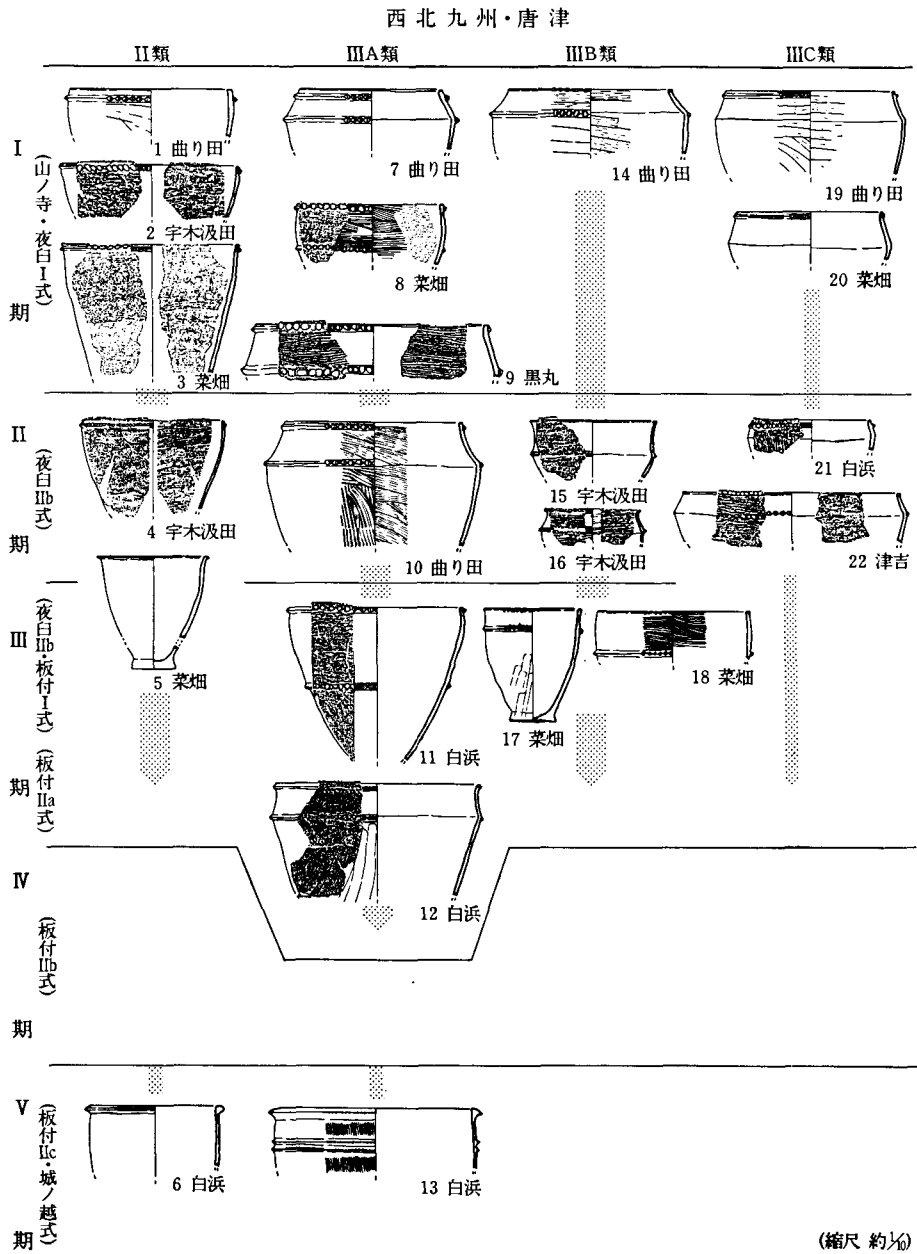
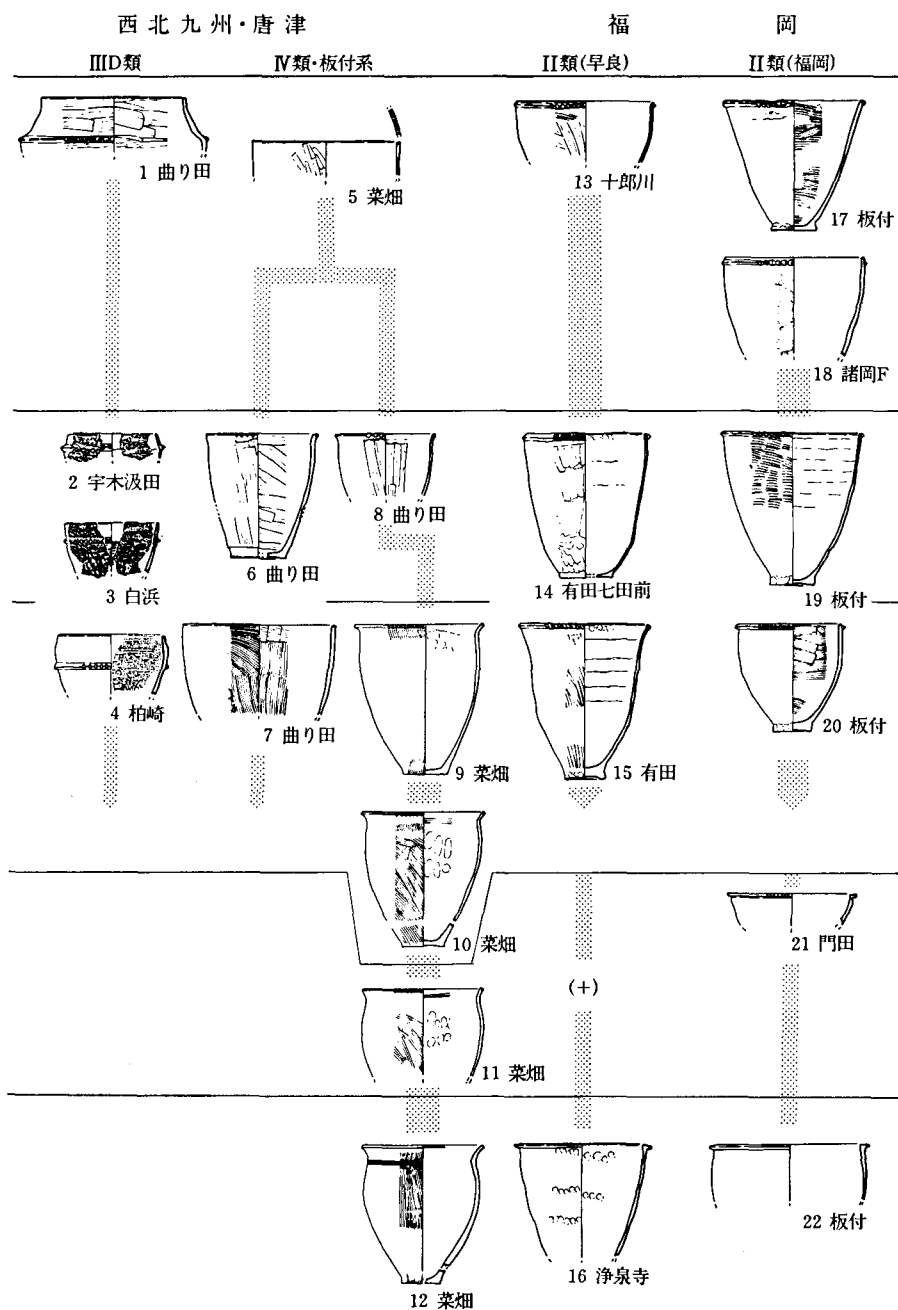


図25 西部九州における刻目突帯文土器編年図(3)



(縮尺 約1/2)

図26 西部九州における刻目突帯文土器編年図(4)

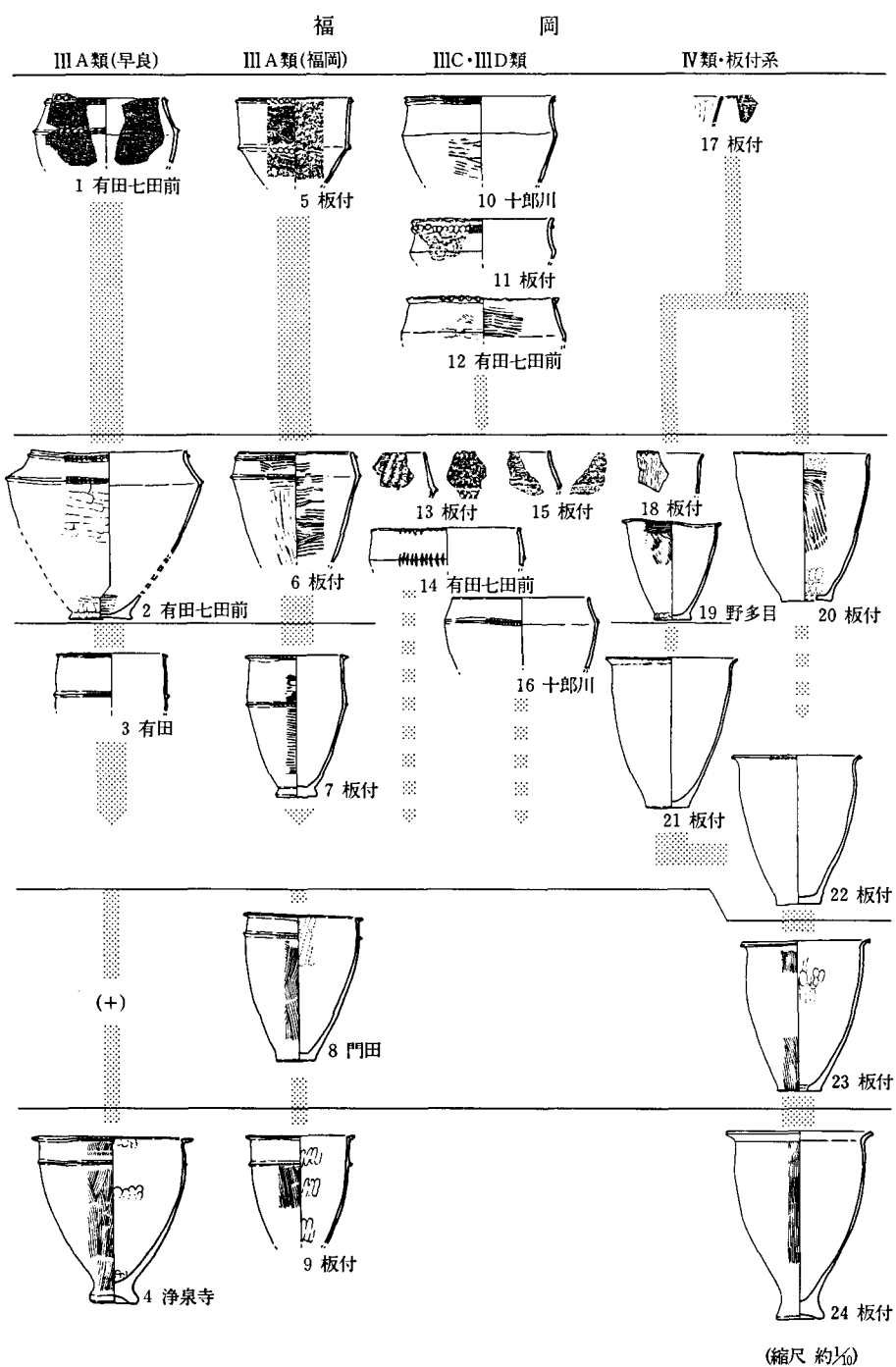


図27 西部九州における刻目突帯文土器編年図(5)

(図23—9) が95%以上の比率をもつ有明海沿岸地域から南の地域と、板付系甕が95%以上を占め亀ノ甲式甕が数%しかない組成を示す福岡地域に大きく分かれる。唐津ではこの時期まだ亀ノ甲式甕は出現しておらず、板付甕単純の組成を示す。福岡では亀ノ甲式甕の伝播にともなう折衷系の甕(折衷系甕B)が成立し、中期甕組成の基本的セットができあがる。IV期は、福岡に亀ノ甲式甕が出現する点をもって板付Ⅱb式に対応する。

⑤ V 期

甕Ⅱ₄・ⅢA₅の時期で、大形壺は田平のⅥ期、中・小形壺A₃・B₃・C₄・D₃、鉢、高坏から構成される。甕Ⅱ類とⅢA類が継続して西部九州に遠賀川以西系の甕組成が完成する[田崎, 1984]。甕の底部は脚台状を呈し、口縁部突帯が肥大化して三角口縁となる(図23—10)。ⅢA類の胴部には刻目突帯、無刻の突帯、ヘラ描き沈線などが施文されるようになり、文様バリエーションが豊富になる。刻目突帯文土器が有明海沿岸を中心に分布する点はIV期とかわりないが、IV期には存在が認められなかった西北九州、唐津平野、遠賀川下流域、大分県宇佐平野、宮崎〔面高, 1983〕などにも分布するようになり、分布域が拡大する。V期は遠賀川以西系の甕組成が成立する点や、金海くずれの甕棺が出現することをもって、前期末～中期初頭に対応する。以上の関係を整理したのが表20である。

4 西部九州における刻目突帯文土器の成立

本地域のもっとも古い刻目突帯文土器は、Ⅱ₁、ⅢC₁、ⅢA₁、ⅢB₁、ⅢD₁である。ⅢA₁、ⅢB₁、ⅢD₁が成立するプロセスについては、二条甕の成立のところで説明したとおりである。ここでは、Ⅱ₁とⅢC₁がどのように成立したか考えてみよう。西部九州における刻目突帯文土器の成立に関する問題である。

家根は刻み目の受容が遅れる西部九州では、瀬戸内・近畿の影響のもとに刻目突帯文土器が成立したとしている。橋口は、家根が重視した刻み目文は、刻目突帯文土器以前の九州の土器様式のなかにもあるという事実をしめすとともに、橋口編年によるところの晩期Ⅵ期に疑似突帯が存在することをあわせて、刻目突帯文土器成立の過程を示唆して九州自生説をとる。しかし瀬戸内・近畿と西部九州との関係については言及していない。

筆者は瀬戸内・近畿と西部九州との併行関係を、二条甕の比較検討から考える。西部九州起源のこの甕は、早期水稻農耕の伝播にともなう東方へ波及したもので[泉, 1986]、持ち込まれたとも言えるようなよく似たものも出土する。岡山市百間川沢田

遺跡では、夜臼Ⅱa式併行の甕Ⅱ類と二条甕が出土しているので、これらの新しい器種が出現する沢田式〔岡田、1985〕と夜臼Ⅱa式は併行すると考えられ、ここに一点をおさえることができよう。壺は完形品がないけれども、口縁部の外反度をみると夜臼式土器Ⅱa式に対応しよう。

沢田式に先行する土器は前池式で、一条甕単純の甕組成を特徴とする。前池式に併行する東部九州の土器が長行式である。長行式は甕Ⅱ₁や二条甕を含むことから、すくなくとも二時期に細分できる。ここで便宜的にⅠ・Ⅱに大別して、長行Ⅰ式を一条甕、長行Ⅱ式を二条甕の段階とする。したがって二条甕がまだ出現していない前池式に対応するのは長行Ⅰ式で、沢田式に対応するのは長行Ⅱ式と考えられる。すると長行Ⅱ式の二条甕は、夜臼Ⅱa式併行なので、必然的に山ノ寺式・夜臼Ⅰ式と長行Ⅰ式、前池式が併行することになり、九州と瀬戸内・近畿とのあいだには刻目突帯文土器出現の時間差は存在せず、西部九州では刻み目の受容が遅れるとの家根の説が成り立たなくなってくる。果してそうであろうか。

菜畑13層の土器組成をみると、粗製鉢のなかに口唇部に直接刻みをもつものがあることから、この段階にまず刻み目文が出現していることがわかる。これらの土器は周防灘、響灘、玄界灘沿岸の諸遺跡に点々と分布している。黒土BⅠ式に刻み目文が多く用いられていることからすれば、九州の北岸や東岸沿いにその影響が及ぶことは十分に考えられる。ただ、つぎの前池式段階になると前池式に一般的な口唇部直接刻みは、響灘沿岸地域を西限として玄界灘沿岸地域にはほとんどみられなくなる。口唇部直接刻みは、ⅢB類やⅣ類といった器種に用いられているにすぎない。少なくとも刻み目に関しては東から西への情報の伝播が考えられる。

一方、突帯については、貼り付け突帯の祖型になりそうな隆起帯をもつ甕が、西部九州や瀬戸内・近畿に刻目突帯文土器出現以前から存在しているので、東から西へといったような情報の伝播はいまのところ考えにくい。したがって、少なくとも九州の北岸地域では、東方から刻み目文の伝播を受ける段階が、刻目突帯文土器出現以前に存在したことは確実である。そこで西部九州における刻目突帯文土器の出現過程は以下のように考えられないだろうか。瀬戸内・近畿地方で一条甕が成立するや、その情報はまたたくまに広がり西部九州でも刻み目突帯の技法を受容する。西部九州では、刻み目文や突帯文を受け入れるにあたって、どの器種にこれらの文様を採用するのか選択する機会が各地域毎に存在した。この時期の場合、施文場所は口唇部と口縁部に限られていた。福岡では甕ⅠA類、唐津と有明海沿岸では甕ⅠB類と屈曲する粗製鉢が選ばれた結果、福岡ではⅡ類刺突甕、唐津と有明海沿岸ではⅢC類刺突甕が成

表21 近畿・瀬戸内と西部九州の併行関係一覧表

本稿		西部九州		東部九州	中部瀬戸内	近 畿
I	a	曲り田(古)	山ノ寺 夜臼 I	長行 I 下黒野	前 池	滋賀里 IV
	b	曲り田(新)				
II	夜臼 II a			長行 II	沢田	口酒井 船 橋
III	板付 I	夜臼 II b				
	板付 II a	亀ノ甲 I	+	I 古		
IV	板付 II b	亀ノ甲 II	下城	(瀬戸内甕) I 中		
V	板付 II c	亀ノ甲 III	下城	(瀬戸内甕) I 新		
	城ノ越			第 II 様式		

いるのはまさにこのような理由からである。それでは刻目突帯を受容するにあたって生じた施文対象となる器種の相違は何を背景としているのであろうか。これは刻み文受容時の煮沸土器の組成を反映したものにはかならない。I A類とI B類の機能差としては、調理内容物の差や、煮沸土器とアク抜き用土器との差なども考えられるが正確なところはわからない。煮沸土器にみられる器形の違いがなんらかの機能差を反映していることは明らかで、今後このような視点でみていく姿勢が必要である。

東部九州では、刻み目がない突帯文土器を媒介にした刻目突帯文土器の成立過程が復原されている。先述したように無刻突帯文土器が単純な出方をする遺跡がほとんどない点を重視して、段階設定は可能としても様式として設定するのは難しいのではないかと考えている。刻み目をもたない突帯文土器が刻目突帯文土器と混在して出土する状況は瀬戸内海沿岸のあり方と完全に一致している。刻み目をもたない突帯文土器は刻目突帯文土器が定型化する過程で、数多く創出されたバリエーションの一つとして位置づけたほうが妥当ではないだろうか。

九州の刻目突帯文土器が少なくとも東方からの刻み目文の伝播をもとに成立したものと考えれば、併行関係は表21のようになる。

I 期は、刻目突帯文土器の成立期にあたり一条甕(III C類)が西日本の各地で成立する。西部九州だけは、II類も成立し、それと時期をおかずして二条甕が成立する。西部九州では、この段階差を考慮してI a・I b段階を設けた。

II 期は、瀬戸内・近畿に二条甕やII類が伝播する時期で、各地に夜臼系壺形土器や石庖丁などの水稻農耕にかかわる要素が現れる。またこの影響をうけて在地の深鉢の底部が平底化し、浅鉢も壺への発展をたどるものもあらわれ、在地の土器自体も変化しはじめる。ただし東部九州や西部瀬戸内にはI 期段階にこれらの要素がすでに伝播している可能性が高い。

立する。また唐津と有明海沿岸では屈曲部に施文する意識が鉢を中心にして盛行していたが、生業基盤の転換を背景にした鉢の相対的減少によって施文対象が甕へと転換したことで、二条甕(III A類刺突甕)が成立する。II類とIII A類の刺突甕が分布を異にして

Ⅲ期になると、前半に玄界灘沿岸で板付Ⅰ式が成立し農耕社会が一定の水準に達したあかしである環濠集落が出現する。その他の地域では、刻目突帯文土器が継続する。Ⅲ期の後半になると、玄界灘沿岸で熟成した弥生文化が西日本各地に出現する。いわゆる遠賀川式土器分布圏の成立である。この分布圏には、伝播する際の人の動きに関係していくつかの様相が認められる。近畿では、突帯文人と遠賀川人の棲み分けが一つの地域のなかでおこなわれていて、長原式が中段階まで存続する。玄界灘沿岸をのぞいた西部九州は刻目突帯文土器が存続する分布圏である。

Ⅳ期も板付・遠賀川式土器の分布圏と刻目突帯文土器の分布圏の平面的な構図に変化はないが、東部九州や瀬戸内に刻目突帯文系の甕が再出現し、新たな局面をむかえる。そしてこの刻目突帯文系甕はその比率をまして地域によっては板付・遠賀川系甕とのあいだで逆転現象をおこす。下城式や逆L字口縁甕（瀬戸内甕）はこの流れのなかで捉えられる。

Ⅴ期には、刻目突帯文系と板付・遠賀川式系のあいだで、交流を重ねた結果成立した折衷系の土器が各地で成立する。西部九州では、器形や文様とも刻目突帯文土器の要素を強くもつ遠賀川以西系の土器様式（城ノ越式）が成立し、瀬戸内や近畿でも、壺の文様や甕の器形と調整に刻目突帯文土器の影響を強くもっている。西日本の中期土器様式は、初期水稻農耕を定着させていくにあたって各地域でおこった渡来人と刻目突帯文人との交流の結果が、土器に反映されたものなのである。ここに日本独自の農耕文化は成立する。

おわりに

最後に本稿で明らかにした内容について、まとめておく。

- 1 西部九州の刻目突帯文土器は、口縁部と胴部の装飾パターンと、器形から6つに器種分類できる。さらに各器種は、Ⅱ類が4、ⅢA類5、ⅢB類3、ⅢC類とⅢD類はそれぞれ2、Ⅳ類が4つのタイプをもつ。各タイプは複数のバリエーションを含み、このバリエーションの構成が各地域で微妙な差をみせる。
- 2 刻目突帯文系の大形壺は、器形を数値化した指数で表現すると、板付系の壺と明確に区別できる。刻目突帯文系の壺は胴部の扁平率が100%以下なのに対し、板付系の壺は110%台を示し、縦長で不安定感がある刻目突帯文系と扁平で安定感がある板付系というカタチを数値化することができた。
- 3 この時期の壺には、大形壺に3、中・小形壺に5の系列がある。中・小形壺の系

列は系統的に、刻目突帯文系・板付系・折衷系に、大形壺は、その出現当初から肩が張るものと、ナデ肩の二つの系列に分化していることがわかった。中・小形壺を系統的に分類する指標として、胴部形態、整形技法をすえ、二つの指標のくみあわせから系統を識別した。その結果、いままで板付Ⅰ式としてきた壺のなかに、胴部形態が刻目突帯文以来の胴部形態をもつものが含まれていることがあきらかとなり、これらを折衷系Bとして設定した。本稿ではきわめて狭義に板付Ⅰ式を認識したことになる。

- 4 刻目突帯文系の大形壺を器形の変化から各系列毎に型式分類した。各系列とも、口頸部を発達させることで、いわゆる長胴壺から広口壺へと変わっていく。その過程で、三つの系列のうち一つはⅢ期で消滅するが、他の二系列は変化をつけ埋葬専用棺としての甕棺に発達していく。同じく板付系の大形壺が成立する過程については完形品が少ないという事情を反映して明らかにしえなかったが、中・小形壺のあり方から推測すると、刻目突帯文系にはなかった新しい胴部形態と整形技法の登場が板付Ⅰ式を成立させる契機になることはまちがいないであろう。板付Ⅱ式以降は刻目突帯文系の大形壺と同様に、口頸部を発達させながら金海式甕棺に発達していく。このように前期末の大形甕棺は、福岡・佐賀の甕棺葬の中心地域ならどこでも成立しうる。福岡地域で成立した甕棺を金海式と呼び、佐賀平野で成立した甕棺を金海くずれと呼ぶのは大きな間違いで、将来的には前期末の大形甕棺の地域型を設定する必要があるだろう。
- 5 刻目突帯文系の中・小形壺も器形の変化から各系列毎に型式分類した。やはり口頸部を発達させることで変化していく。時期と地域によって分布するタイプが異なり、甕と同様に地域性をみせている。Ⅳ期になると、刻目突帯文系と板付系が融合した系統が成立し、板付系と二大系統を構成して中期壺組成の基本的系統ができあがる。したがって、中期の土器様式は、壺も甕もⅣ期段階に刻目突帯文系と板付系のあいだで起きた融合によって成立した土器組成を母体とすることは明らかである。
- 6 以上の結果、西部九州の弥生時代早期から前期末までの期間を甕と壺の型式分類をもとに大きく五つの時期に分けた。
- 7 西部九州の刻目突帯文土器は、東方に系譜をもつ刻目文が突帯文とくみあわさった文様を粗製深鉢が受容することによって成立する。ただし、文様の施文対象となった深鉢の器種が福岡とそれ以外の地域では異なっていたため、のちに甕組成の差として表面化することになる。文様をどの器種に採用するかを選択は各地域にまか

されていたのである。この結果、西部九州で最初の刻目突帯文土器として福岡に分布の中心をもつⅡ₁と唐津・有明海沿岸に中心をもつⅢC₁が成立する。

- 8 二条甕は、粗製鉢の屈曲部に施されていた刻目文を効率的に施文するための解決策として登場した屈曲部の突帯が、ⅢC₁に採用されることによって成立する。その地域は唐津地域である可能性が高いと考えている。西部九州では型式学的特徴からみて一条甕から二条甕への変化を指摘できるが、出土状況から判断すれば時期差とする根拠に弱いので、Ⅰ期内の段階差としてとらえておく。

- 9 山ノ寺式（菜畑9—12層）と夜臼Ⅰ式（板付G—7 a・b下層）の関係については、メインとなる甕の器種を異にする同じ時期の地域様式と考える。すなわち山ノ寺式に多いⅢA類刺突甕と夜臼Ⅰ式に多いⅡ類刺突甕が地域を異にして分布していたにすぎない。

- 10 西部九州と瀬戸内・近畿との併行関係について、浅鉢を指標とせず二条甕とⅡ類の型式学的特徴を根拠にⅡ期と沢田式を併行させ、その結果、Ⅰ期は前池式と併行することになる。しかし、刻目突帯文土器の成立は瀬戸内の方が早いことは言うまでもない。すなわち、瀬戸内・近畿と西部九州における刻目突帯文土器成立の時期は、前者が早いものの、その差は一様式ほどは認められない。地域色が強い深鉢を広域編年の指標とすることについては、瀬戸内や近畿で細かな地域色にまだ不明な部分が多い段階では時期尚早とも言える。しかし、西部九州起源であることが明らかな甕Ⅱ類と二条甕の型式学的特徴を根拠に併行関係を考えることは、方法的に間違っていないと考えている。

本稿は、1983年度に九州大学大学院に提出した修士論文の一部である。在学中にご指導をいただいた岡崎敬、横山浩一、西谷正、西健一郎、木村幾多郎、田崎博之の諸先生方をはじめ、九州大学考古学研究室の諸氏、資料収集に便宜をはかっていただいた方々に感謝の意を表したい。

潮見浩、川越哲志、河瀬正利、中越利夫、浅岡俊夫、泉拓良、南博、家根祥多、間壁忠彦、亀田修一、高田明人、伊藤実、森貞次郎、小田富士雄、橋口達也、武末純一、田中良之、塩屋勝利、山崎純男、柳沢一男、山口譲治、松村道博、杉山富雄、高島忠平、東中川忠美、田平徳栄、藤井伸幸、中島直幸、田島龍太、八尋実、下川達彌、正林護、安楽勉、高橋徹、河口貞徳、松永幸男、中島哲郎、渡辺芳郎、宮井善朗、溝口孝司、春成秀爾。

（1989年10月31日稿了）

註

- (1) 刻目突帯文土器の呼び方には、本稿でも「〇〇」と表現しているように多くの呼び名がある。本稿ではこの土器の最大の特徴が突帯を貼り付けて刻みを施文することにあると考えて刻目突帯文土器と呼ぶ。また、橋口達也の言う刻目紋土器という呼び名については、対象となる甕が北部九州に集中することから呼称として採用しない。もう一つの代表的な呼び名である「突帯紋土器」については、学史的な位置づけを考慮して縄文時代晩期の亀ヶ岡式土器に併行する西日本の土器の総称として把握する。
- (2) 筆者は板付Ⅰ式土器が成立する以前の刻目突帯文土器の時期を弥生時代早期と呼ぶ。時代区分は、複数の指標の出現をもっておこなわれるべきとの立場にたつたうえで、弥生時代の開始を生産経済への移行をとらえ、土器を含めた弥生時代を構成する要素が北部九州ですべて出現する刻目突帯文土器の段階をもって弥生時代とする。詳細は別稿を参照していただきたい〔藤尾, 1988〕。
- (3) 夜臼式単純層の確認は、山ノ寺式と夜臼式を地域差と認定する動きにつながる。学史的には板付Ⅰ式と共伴する刻目突帯文土器が夜臼式で、共伴しないのが山ノ寺式である。したがってもし学史を遵守するのであれば山ノ寺式を玄界灘沿岸地域で発見したとすべきである。しかし、出土した土器が夜臼式に近かったことから夜臼式単純層の検出とされたのである。したがって、板付Ⅰ式と共伴しない夜臼式が存在することは60年代のなかばから認定されていたことになる。
- (4) 弥生時代早期および前期の煮沸用土器の器種名を甕形土器に統一する。前回の分類では、刻目突帯文土器のなかに晩期以来の煮沸用土器である深鉢がふくまれることに留意して、この時期の煮沸用土器を深鉢・甕形土器とした〔横山・藤尾, 1986〕。しかし、早期から水稻耕作の開始とともにコメを調理対象とした煮沸行為が始まることを重視して、前期以降と同じ器種名である甕形土器と呼称する。
- (5) 今回の器種分類は基本的に、以前に示した分類にもとづいている〔横山・藤尾, 1986〕。ただ、前回に比べて対象とする時間幅を弥生時代前期末までとしたので若干の修正を加えている。
- (6) 前期の甕ⅢA類は、早期に比べても法量に変化がなく、積み上げた粘土帯の数も同じである。また早期に胴部が屈曲していた部位は、前期に突帯がつく部位と同じで、それは底部から数えた粘土帯の数が一致することからも確認できる。
- (7) 前期になると、板付Ⅰ式と刻目突帯文土器両方の影響をうけた折衷土器が成立し、前期の甕組成は板付系と刻目突帯文系、折衷系からなる〔藤尾, 1984〕。本稿も前期末までを対象とするので折衷系の分類を示したほうがよいが、刻目突帯文土器の分類をおこなうにあたっては煩雑になることを避けるため、ここで簡単にふれておく。
折衷系甕A 刻目突帯文系が板付系の特徴を受容したもの。屈曲する器形をもつⅢA類が板付系の如意形口縁を採用した土器に代表される。板付Ⅰ式が成立する段階の玄界灘沿岸地域と、板付系が水稻耕作とともに伝播した段階の有明海沿岸地域や鹿児島、周防灘沿岸の豊前地域にみられる。
折衷系甕B 板付系が刻目突帯文系の特徴を受容したもの。板付系甕の胴部に刻目突帯や刻み目文、段を施すものに代表される。このうち刻目突帯をもつ甕は、前期後半（板付Ⅱb式）の福岡平野周辺において、有明海沿岸地域からの刻目突帯文系（亀ノ甲式）の伝播をうけて成立する。段や刻目文をもつ甕は、前期中ごろ（板付Ⅱa式）の福岡平野をかこむようにめぐる縁辺地域（宗像郡津屋崎町、筑紫野市、小郡市）と、同じ時期の瀬戸内・南西四国・近畿地方にみられる。前者は、前期後半になると板付系といれかわるようになり前期甕組成の中心器種となり、中期甕の原型がここに出来上がる。後者は、第Ⅰ様式新段階にへう描き文土器が多条化するまで中段階の中心器種となる。
- (8) 図2をみると、法量から判断すれば大形壺に含まれるのもかわらず、集落から出土した壺の存在に気づく。これらの壺は頻繁に持ち運ぶには重すぎるため、種籾の貯蔵や水甕

としての機能を担っていた可能性を想定している。

- (9) 板付Ⅰ式が成立すると、玄界灘沿岸地域では刻目突帯文系甕と同様に刻目突帯文系壺も衰退し、板付系の壺単純の組成をとることが予想される。逆に、有明海沿岸地域から南の九州では、甕と同様に刻目突帯文系壺が存続し独自の発展を続ける。しかし、刻目突帯文系と板付系との識別はこれまで行われたことはなく、福岡平野に分布しない壺を単純に刻目突帯文系にあてていたにすぎない。
- (10) この場合は、底部の厚さを考慮していない。したがって底部が厚くても球形にちかくなり、指数は100%より高い値に近づくという難点もある。
- (11) 福岡平野に壺棺が出現する確実な時期は、現在までのところ板付Ⅰ式を遡らない。板付G-7 a・b区や十郎川遺跡で早期に属すると考えられる長胴壺の破片が出土してはいるが、法量の復原は難しく完形品はないので、例外的に板付遺跡出土の中形壺を用いている。図4の板付Ⅰ式と№28の夜臼Ⅱb式がそれに相当する。
- (12) 板付Ⅰ式土器の壺の特徴には、口縁部の「幅広く低い肥厚部」と「厚い円盤状の底」といった形態的特徴と、彩文やヘラ描きによる平行線文、複線山形文、有軸羽状文等の文様の特徴である。
- (13) 本稿では、壺の系統分類を胴部形態と整形技法の組合せから試みた。その結果、胴部形態が板付系であっても整形技法が刻目突帯文系であれば折衷系との判断を示した。板付Ⅰ式が備えるもっとも情報度が高い特徴である段や円盤貼り付け状の底部は、周辺地域の諸集団によって受容されるがその受け取りかたはまちまちである。単に外面的な形だけを自分達の技法で模倣する集団もいるだろうし、整形技法まで含めたかたちで完全に受容した集団もあるだろう。このような部分までふみこんで土器を分析し、情報や人の移動を想定していかなければならない。今回は整形技法を重視した結果、従来板付Ⅰ式とされてきた壺も折衷系の範囲に属することとなった。これは一つの解釈であって胴部形態を重視しない立場をとれば、整形技法を根拠に板付Ⅰ式に含めることも可能である。その意味ではきわめて狭義の立場を取るものである。
- (14) 瀬戸内・近畿地方の土器を対象とした器種分類と本稿分類との対応については、分類基準が異なっていることもあって補足を要する。以下、各氏の分類との対応について簡略に述べておく。

〔家根, 1982〕 家根が対象とした長原式の甕は北部九州的な特徴を多くもつので直接対応をみることができる。器形と刻み目の組合せをもとに表のような対応がとれる。ただし、本稿分類のⅠB, ⅢB, ⅢC, ⅢD, Ⅳ類は報告書をみれば長原からは出土していない。壺は北部九州系のA類と在地系のB類があるが、家根分類の基準は系統分類のため本稿の系列分類とは整合性がなく、表中には壺とのみ記した。鉢は器形から二つに分ける。鉢の分類に関しては後述するように網本, 平井, 南, 浅岡は家根の分類に準拠している。家根の浅鉢Aは本稿の鉢Ⅱ類とⅢ類に、浅鉢BはⅣ類とⅦ類を包括している。Ⅰ・Ⅴ・Ⅶ類は存在せず、Ⅶ類はB類に含まれる可能性がある。この対応関係は北部九州と近畿の地域性を考慮していない表面的な対応にすぎない。したがって対応関係が確実な浅鉢（本稿の鉢Ⅱ類）を代表させて、一括して浅鉢と記すことにする。以下、網本, 平井, 南の鉢との対応についても同様の理由から浅鉢とだけ記している。

〔網本, 1985〕 中部瀬戸内の深鉢と浅鉢の器形分類である。深鉢は岡山県舟津原貝塚出土の黒土BⅠ式をAとBに、黒土遺跡出土の黒土BⅡ式をC, 原遺跡出土土器をDに細分している。広江・浜遺跡や二野遺跡の器種構成から判断すると、Aは西部九州になく、Bは刻目突帯文の時期まで存続しないので除けば、CとDとの対応が問題となってくる。Cは屈曲する胴部をもつという点では甕Ⅲ類と共通し、口縁部だけに一条の刻目突帯をもつことからⅢC類との類似性がうかがわれる。頸が長いことや口径が屈曲部径より大きいという相違点はあるが、一応対応するものと考えておく。Dは本稿の甕ⅠA類とⅢA類に相当し区別されていない。浅鉢は器形からA・B・Cに分けている。広江・浜遺跡や寄倉岩陰

遺跡の器種構成から判断すれば刻目突帯文土器段階まで存続しているが、西部九州ではすでにCが消滅している可能性があり本稿分類には該当しない。A・Bは先ほど述べたように表中で浅鉢と記した。

〔南, 1988〕 兵庫県口酒井遺跡出土土器を対象にしている。南は深鉢について、突帯を一条だけもつ甕(Ⅰ類)と二条もつ甕(Ⅱ類)にまず分類する。そして器形に注目し屈曲するもの(a)と屈曲しないもの(b)に分ける。したがって、Ⅰa類は本稿の甕ⅢC、Ⅰb類がⅡⅠa類と、Ⅱb類はⅢAに相当する。壺は大形と小形に一応分けられているが、法量分類にとどまるので壺とのみ記している。

〔浅岡, 1988〕 口酒井遺跡出土土器を対象とした分類である。深鉢はまず、縄文以来の粗製深鉢(Ⅰ類)と刻目突帯文土器(Ⅱ類)を二大別したうえで、細分する。そしてⅠ類は胴部が屈曲するもの(A)と屈曲しないもの(B)に分ける。Ⅱ類は南と同様に一条突帯と二条突帯に分け、さらに胴部形態から二つに細分する。浅鉢に関しては瀬戸内・近畿の編年案の中では特徴をもつ分類がおこなわれている。器形と系列を考慮したこの分類は、本稿と表のような対応関係で捉えることができる。壺は家根と同じく船橋系と夜臼系に大別している。高坏は2片の出土で分類には至っていない。

〔平井, 1989〕 近畿から九州にかけての広い地域を対象に突帯文土器を5期に分ける。深鉢の器形と、文様(口縁部と頸部)の有無との組み合わせから55の文様類型を設定している。瀬戸内の突帯文土器をあつかった編年のなかでは、もっとも網羅的な研究であり、この地域の研究者の考えを代表している編年である。ここでは文様類型の設定の部分を中心に取り上げる。学史のところでも述べたように、瀬戸内・近畿の縄文土器研究の方法をきわめてオーソドックスに継承している。浅鉢をつかって西日本全体を考える研究が多いなかで、深鉢という一つの器種の型式学的特徴によって対応を考えた点は評価されよう。しかし水稻農耕を契機とする土器の変化(器種構成や煮沸土器の器形)に、歴史的な意味を求めることで設定した本稿の分類とは基準が完全にことなるので、対応はむずかしいがほぼ表に示したようになるであろう。

完形品が少なく、頸部文様の細別が十分に行えなかったこともあって、本稿の甕ⅠBとⅢD、ⅢAとⅢC、ⅡとⅢAが区別できない。その結果、平井のⅣ期に属する深鉢Pは、一条甕と二条甕の両方を含んでしまう。さらに泉が指摘した底部の平底化に対する歴史的評価が十分でない。また設定された文様類型の深鉢同士の関係については、系統的な観点が見落しているため、本来同じ型式組列に属するものどうし、例えば、平井の深鉢9と25(本稿のⅠAとⅣ類)の関係が捉えきれていない。文様属性は、文様が器種間にまたがって共通に存在する属性なので、器種どうしの時間関係を検討する場合はきわめて有効である。しかし、縦に並べるのに有効であっても、型式組列という観点から縦にそろえるためには、文様とは異なるレベルの属性をつかって補正する必要がある。また、宮本一夫の指摘にもあるように、中部瀬戸内と西部瀬戸内の地域性も考慮する必要がある。長行は西部瀬戸内に含まれるため問題はないが、野多目や曲り田は西部九州の遺跡なのである。

- (15) 未報告のため詳細は明らかでないが、山ノ寺遺跡B地点の土器を実見した際の観察によればⅡ₁・ⅢA₁・ⅢA₂とⅢC₁・ⅢC₂・ⅢD₁が含まれている。中心となるのは、ⅢA₁とⅢC₁である。さらにこのような傾向は山ノ寺掘木遺跡〔百人委員会, 1973〕でも追認している。なおB地点の資料は乙益重隆先生のご好意により実見させていただいた。
- (16) 組織痕文土器の段階に刻目突帯文土器が成立するというのではなく、刻目突帯文土器成立直後まで組織痕文土器が存続したことを示す事実である。
- (17) 森貞次郎と岡崎敬が設定した夜臼式土器〔森・岡崎, 1961〕が山ノ寺式に後続することはいうまでもない。
- (18) 刺突甕と押し引き甕以外のバリエーションは、器形バリエーションと口縁部突帯の位置と大きさのバリエーションであるが、いずれも数が少ないため二条甕成立時の変異差と考えている。

- (19) 鉢の組成を異にしている点を根拠に山ノ寺式と夜臼Ⅰ式を地域差と認定したが、浅鉢の組成に注目して、やはり山ノ寺式を先行させる見方もあるだろう。そのような立場をとるには以下のことを解決しなければならない。まず、浅鉢と同じ精製土器である壺形土器の型式学的検討。水稻耕作の開始にともなう増加していく壺を指標とせず、衰退・減少していく浅鉢を指標とする型式学上の理論的根拠である。

参考文献

- 浅岡俊夫, 1988: 伊丹市口酒井遺跡の凸帯文土器, 歴史学と考古学, 真陽社, 京都: 123—184.
 網本善光, 1985: 稲作受容期における中部瀬戸内地域の遺跡の動向, 比較考古学 試論, 雄山閣, 東京: 5—47.
 伊崎俊秋, 1981: 弥生時代の遺構と遺物—弥生土器について—, 今川遺跡, 津屋崎町文化財調査報告書4, 福岡: 81—85.
 泉 拓良, 1986: 縄文と弥生の間に稲作の起源と時代の画期—, 歴史手帖, 14(4): 104—137.
 1989: 近畿地方の縄文土器, 第7回近畿地方埋蔵文化財研究会資料, 大阪: 1—18.
 岡田茂弘, 1965: 近畿, 日本の考古学Ⅰ—縄文時代—, 河出書房: 193—210.
 岡田 博, 1985: 高縄手B調査区, 百間川沢田遺跡2・百間川長谷遺跡2, 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅵ, 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告, 59.
 緒方 勉, 1974: 江津湖苗代津遺跡, 熊本県文化財調査報告15.
 1977: 沈目立山遺跡, 熊本県文化財調査報告26.
 緒方 勉・高木正文, 1975: 熊本県上益城郡久保遺跡・観音堂石塔群・櫛島遺跡, 熊本県文化財調査報告18.
 岡崎 敬・森貞次郎・永井昌文・佐原眞, 1982: <座談会>縄文から弥生へ, 歴史公論, 8(1): 10—36.
 小田富士雄, 1958: 下城式土器考, 白潟遺跡, 別府大学上代文化研究報告(1), 大分: 50—71.
 1964: 亀ノ甲遺跡—福岡県八女市室岡の弥生遺跡調査概報—, 八女市教育委員会.
 1972: 入門講座弥生土器—九州—, 考古学ジャーナル, 77: 22—25.
 1982: 宇木汲田遺跡—土器—, 末盧国—佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究—, 六興出版, 東京: 140—149.
 岡本 勇, 1966: 弥生文化の成立, 日本の考古学Ⅲ—弥生時代—, 河出書房, 東京: 424—441.
 乙益重隆, 1957: 熊本県熊本市加瀬川遺跡, 日本考古学年報5—昭和27年度—, 誠文堂新光社, 東京: 73.
 1961: 熊本県斎藤山遺跡, 日本農耕文化の生成, 東京堂, 東京: 250—267.
 1965: 九州西北部, 日本の考古学Ⅰ—縄文時代—, 河出書房新社, 東京: 250—267.
 面高哲郎, 1983: 鑑遺跡・藤掛遺跡, 新富町文化財調査報告書2, 宮崎.
 鏡山 猛, 1952: 柏崎貝塚調査概報, 佐賀県文化財調査報告書1.
 賀川光夫, 1967: 九州, 新版考古学講座3—先史文化—, 雄山閣, 東京: 385—403.
 加藤 進・丹羽裕一, 1972: 湖西線関係遺跡調査報告書, 同遺跡調査団, 京都.
 鎌木義昌・江坂 進, 1958: 岡山縣御津町原遺跡—縄文晩期の土器を中心として—, 瀬戸内考古学2, 岡山: 1—16.
 鎌木義昌・木村幹夫, 1956: 中国, 日本考古学講座3—縄文文化—, 河出書房, 東京: 188—201.
 川上四郎, 1952: 東昌寺遺跡発掘報告, 鹿児島県考古学会紀要, 2: 58—60.
 河口貞徳, 1952: 鹿児島県の弥生式遺跡について, 鹿児島県考古学会紀要, 2: 3—17.
 1963: 鹿児島県高橋貝塚発掘概報, 九州考古学, 18, 福岡: 1—9.
 1964: 南九州地方, 弥生式土器集成本編解説.
 1965: 鹿児島県高橋貝塚, 考古学集刊, 3(2), 東京: 73—109.
 1967: 鹿児島県黒川洞穴, 日本の洞穴遺跡, 平凡社, 東京: 314—328.

- 1972：南九州縄文晩期土器の型式編年，上加世田遺跡発掘調査概報第五次，加世田市教育委員会，鹿児島。
- 1976：入来遺跡，鹿児島考古，11—入来遺跡特集一。
- 河口貞徳・出口 博，1971：南九州弥生式土器の再編年，鹿児島考古，5：39—52。
- 木下之治，1973：大門遺跡—第2次調査一，佐賀市教育委員会。
- 九州大学考古学研究室，1966：北部九州（唐津市）先史集落遺跡の合同調査—昭和40年度日仏合同調査概報一，九州考古学，29・30，福岡：1—16。
- 1967：有田古代遺跡調査概報，福岡市埋蔵文化財調査報告書1。
- 1968：福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告，福岡市埋蔵文化財調査報告書2。
- 隈 昭志，1964：熊本県水の山遺跡における配石墓群の一例，考古学雑誌，50(1)：45—55。
- 1974：熊本県の縄文時代甕棺，考古学論叢，2，別府大学考古学研究会，大分：61—67。
- 栗田茂敏，1989：松山市大湊遺跡の縄文晩期農耕文化，四国における農耕のはじまり，古代学協会四国支部第三回大会資料，松山：1—14。
- 後藤 直，1986：農耕社会の成立，日本考古学6—変化と画期一，岩波書店，東京，119—169。
- 酒井仁夫，1980：今川遺跡，津屋崎町文化財調査報告書4，福岡。
- 定村責二・小田富士雄，1965：福岡県長井遺跡の弥生式土器，九州考古学，25・26，福岡：6—10。
- 佐原 眞，1962：縄文式土器，船橋Ⅰ，平安高校，京都：69—70。
- 1983：弥生土器入門，弥生土器Ⅰ，ニューサイエンス社，東京：1—24。
- 潮見 浩・近藤義郎，1956：岡山縣山陽町南方前池遺跡—縄文式末期の貯蔵庫発見一，私たちの考古学，7，岡山：2—7。
- 清水宗昭，1974：下黒野遺跡—大分郡狭間町大字古野字下黒野所在遺跡の調査一，大分県文化財調査報告書。
- 下條信行，1982：柏崎貝塚，末盧国，六興出版，東京：182—194。
- 杉原莊介，1955：弥生式文化遺跡，日本考古学年報4（昭和26年度），誠文堂新光社，東京：16—17。
- 高橋 徹，1980：大分県考古学の諸問題Ⅰ—刻目突帯文土器の出現とその展開について一，大分県地方史，98，大分：43—52。
- 1982a：下城式土器とその周辺，第33回古文化研究会発表要旨，北九州。
- 1982b：東九州の突帯文土器の展開について，昭和57年度九州史学会研究発表要旨，福岡。
- 1983：東九州における突帯文土器とその周辺，古文化談叢，12，福岡：63—75。
- 1989：弥生文化の成立，大分県史先史篇Ⅱ，大分：19—37。
- 高橋 護，1987：遠賀川式土器，弥生文化の研究4—弥生土器Ⅰ一，雄山閣，東京：7—16。
- 田崎博之，1985：須玖式土器の再検討，史淵，122，九州大学文学部，福岡：167—202。
- 1986：弥生土器の起源，論争・学説日本の考古学4，一弥生時代一，雄山閣，東京：291—350。
- 橋 昌信，1976：ネギノ遺跡，大分県文化財調査報告，35。
- 立石泰文，1980：大門西遺跡，九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1)，佐賀県文化財調査報告書51。
- 田中 茂，1974：宮崎市榎遺跡出土小児棺の新例，考古学雑誌，60(2)，東京：82—86。
- 田中良之，1987：縄文土器と弥生土器—西日本一，弥生文化の研究3—弥生土器Ⅰ一，雄山閣，東京：115—125。
- 田平徳平，1989：礫石遺跡，九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(9)，佐賀県文化財調査報告書91。
- 坪井清足，1956：岡山縣笠岡市高島遺蹟調査報告，同遺跡調査會，岡山。

- 1981：西日本，縄文土器大成4—晩期一，講談社，東京，155—158。
- 1985：弥生土器のはじまり，論集日本原始，吉川弘文館，東京，881—887。
- 戸崎勝洋，1978：阿多貝塚，金峰町埋蔵文化財調査報告書1，鹿児島。
- 富田紘一，1979：上南部遺跡A地点発掘報告，昭和53年度熊本市内埋蔵文化財発掘調査報告書，熊本市教育委員会：1—29。
- 中後迫遺跡調査団，1979：中後迫遺跡調査報告，九州電力㈱熊本支店，熊本。
- 中井一夫，1975：前期弥生文化の伝播について，橿原考古学研究所論集—創立35周年記念一，吉川弘文館，東京：75—98。
- 永倉松男・鏡山 猛，1931：筑前藤崎に於ける弥生式遺跡，考古学，2(1)，東京：35—44。
- 中島哲郎，1980：鳥山調査区—県営畑地総合土地改良事業鳥山1区に伴う埋蔵文化財確認調査報告書一，指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書4，鹿児島。
- 中島直幸，1982a：菜畑遺跡，唐津市文化財調査報告書5，佐賀。
- 1982b：初期稲作期の凸帯文土器—唐津市菜畑遺跡の土器編年を中心に一，森貞次郎博士古稀記念古文化論集，同刊行会，福岡：297—354。
- 1982c：菜畑遺跡，末盧国—佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究一，六興出版，東京：106—131。
- 中間研志，1978：福岡県筑紫野市所在剣塚遺跡群の調査，九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書24下，福岡県教育委員会。
- 西健一郎，1982：斎藤山遺跡出土刻目突帯文土器の再検討，九州文化史研究所紀要，27，福岡：1—51。
- 1983：下江津湖湖底遺跡出土刻目突帯文土器の検討(1)，九州文化史研究所紀要，28，福岡：137—175。
- 1985：下江津湖湖底遺跡出土刻目突帯文土器の検討(2)，九州文化史研究所紀要，30，福岡：205—237。
- 二宮忠司，1989：田村遺跡，福岡市埋蔵文化財調査報告書，200，福岡。
- 日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会，日本農耕文化の起源に関する研究，東京。
- 橋口達也，1979：九州の弥生土器，世界陶磁全集1—日本原始一，小学館，東京：212—238。
- 1985：日本における稲作の開始と発展，石崎曲り田遺跡Ⅲ，今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書11，福岡県教育委員会：5—103。
- 春成秀爾，1969a：中・四国地方縄文時代晩期の歴史的位置，考古学研究，15(3)，岡山：19—34。
- 1969b：中国・四国，新版考古学講座3—先史文化一，雄山閣，東京：367—384。
- 1973：弥生時代はいかにしてはじまったか，考古学研究77，岡山：5—24。
- 百人委員会，1973：山ノ寺梶木遺跡—長崎県南高来郡深江町山ノ寺梶木遺跡の報告一，百人委員会埋蔵文化財報告1，長崎。
- 東中川忠美，1986：支石墓出土の土器編年試案，久保泉丸山遺跡，九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5，佐賀県文化財調査報告書84：409—427。
- 平井 勝，1988：岡山における縄文晩期突帯文土器の様相，古代吉備，10，岡山：9—34。
- 1989：縄文時代晩期における中・四国の地域性，考古学研究，36(2)，岡山：31—43。
- 藤口健二，1986：朝鮮無文土器と弥生土器，弥生文化の研究3—弥生土器Ⅰ—，雄山閣，東京：147—162。
- 藤尾慎一郎，1984a：弥生式土器，諸岡遺跡，福岡市埋蔵文化財調査報告書，108：67—70。
- 1984b：弥生時代前期の刻目突帯文土器—「亀ノ甲タイプ」の再検討，九州考古学59：福岡：35—46。
- 1987a：板付Ⅰ式甕形土器の成立とその背景，史淵，九州大学文学部，福岡：124：1—27。

- 1987b：稲作受容期の甕形土器研究，東アジアの考古と歴史 中，一岡崎敬先生退官記念献呈論文集一，同朋舎出版，京都：294—323。
- 1988：縄文から弥生へー水田耕作の開始か定着かー，日本民族・文化の生成ー永井昌文教授退官記念論文集，六興出版，東京：437—452。
- 1989：九州の甕棺ー弥生時代甕棺墓の分布とその変遷ー，国立歴史民俗博物館研究報告，21，千葉：141—206。
- 間壁忠彦・間壁霞子，1979：広江・浜遺跡，倉敷考古館研究集報，14，岡山：1—203。
- 南 博，1988：伊丹市口酒井遺跡ー第11次発掘調査報告書一，伊丹市教育委員会，（財）古代学協会，京都。
- 宮本一夫，1989：道後平野における弥生時代開始期の動向，鷹子・樽味遺跡の調査，愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ，愛媛大学埋蔵文化財調査室，愛媛：77—93。
- 明治大学文学部考古学研究室，1962：西日本晩期縄文式土器集成図，東京。
- 森 浩一・白石太一郎，1969：南近畿における前・中期弥生式土器の一樣相，考古学ジャーナル，33：13—19。
- 森貞次郎，1955：福岡県粕屋郡夜臼遺跡，日本考古学年報4（昭和26年度），誠文堂新光社，東京，112—113。
- 1957：長崎県南高来郡山ノ寺遺跡，日本考古学年報10—昭和32年度一，誠文堂新光社，東京：91—92。
- 1960：島原半島（原山・山ノ寺・礫石原）及び唐津市（女山）の考古学的調査ーおわりに一，九州考古学，10：6—10。
- 1966：九州，日本の考古学Ⅲー弥生時代一，河出書房，東京，32—80。
- 1968：日本農耕文化の起源に関する研究，日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会。
- 1982：縄文晩期および弥生初期の諸問題，末盧国，六興出版，東京：373—378。
- 1985：縄文農耕，稲と青銅と鉄，日本書籍，東京：27—82。
- 森貞次郎・岡崎 敬，1961：福岡県板付遺跡，日本農耕文化の生成，東京堂，東京，37—77。
- 1965：長崎県南高来郡原山遺跡，日本考古学年報13（昭和35年度），誠文堂新光社，東京：131—133。
- 柳田康雄・小池史哲，1982：三雲遺跡Ⅲー糸島郡前原町大字三雲所在遺跡群の調査一，福岡県文化財調査報告書63。
- 家根祥多，1981：近畿地方の土器，縄文文化の研究4ー縄文土器Ⅱ一，雄山閣，東京：238—248。
- 1982：縄文土器，大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ，大阪市文化財協会，大阪：142—157。
- 1984：縄文土器から弥生土器へ，縄文から弥生へ，帝塚山大学，奈良：49—91。
- 1987：弥生土器の誕生と変貌，季刊考古学，19，雄山閣，東京：13—18。
- 八尋 実，1981：四本黒木遺跡，神埼町文化財調査報告書6，佐賀。
- 山口譲治，1980：板付ー板付会館建設に伴う発掘調査報告書一，福岡市埋蔵文化財調査報告書73。
- 山口信義，1980：縄文時代晩期の土器とその編年の位置，長行遺跡，北九州市埋蔵文化財調査報告書20，福岡：191—194。
- 山崎純男，1980：弥生文化成立期における土器の編年の研究ー板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合ー，鏡山猛先生古稀記念古文化論叢，同論文集刊行会，福岡：117—192。
- 1981：西日本後・晩期の農耕，縄文文化の研究2ー生業一，雄山閣，東京：267—281。
- 1988：福岡市野多目遺跡群ー稲作開始期の水田遺跡の調査一，福岡市埋蔵文化財調

- 査報告書159.
- 山崎純男・澤皇臣, 1979: 板付遺跡調査概報, 板付周辺遺跡調査報告書(5), 福岡市埋蔵文化財調査報告書49.
- 山崎純男・島津義昭, 1981: 九州の土器, 縄文文化の研究4—縄文土器3—, 雄山閣, 東京: 249—261.
- 横山浩一・藤尾慎一郎, 1986: 宇木汲田遺跡1984年度調査出土の土器について, 九州文化史研究所紀要, 31: 59—101.
- 吉岡完祐・前田恵美子, 1980: 瑞穂—福岡市比恵台地遺跡一, 日本住宅公団, 福岡.
(本館 考古研究部)

“Kizamime-Tottaimon Ware” (Wares with Incised Plastic band)

Found in the Western Part of Kyûsyû

FUJIO Shin'ichiro

Included in the earthenwares in the period when the paddy farming was started in Japan is a ware with incised plastic band. The representative pottery of this kind is a jar type pottery (a cooking tool) found mainly in the Western Japan, west of the districts along the Ise Bay. As the distinctive features, it is a deep bowl, and has incised patterns: the plastic bands are adhered at the mouth and the outer surface of its body, and then the plastic bands are incised using a finger or spatula. This is a pot positioned at the transition period from the Jômon period of the culture of gathering and hunting to the Yayoi period of the culture of paddy farming. When dealing with the issues of the transition period, it is quite important where to position this ware. For example, when the division of the times is discussed, such as when the Yayoi period starts, a different conclusion may be drawn depending on the assumption whether this ware is regarded to belong to the Jômon pottery or this ware is regarded to belong to the Yayoi pottery. The western Kyûsyû (Fukuoka Prefecture, Saga Prefecture, Nagasaki Prefecture, Kumamoto Prefecture and Kagoshima Prefecture) is known as the district where the paddy farming had been started in the first place. It is an important fundamental work to put in order the chronological researches on the wares with incised plastic band found in these districts in order to carry on the studies on the start of the Yayoi period.

In this paper, attentions were given to the decorative patterns on the mouth and on the body of the jar and six forms were set up. Then, each form was classified into 5 types based on the six attributes (a method to incise patterns, positions to adhere the pastic band around the mouth, the form of the pots, the sizes or the clay bands at the mouth and on the body, surface adjustment of pots and clay band adjustment). As a result, the beginning and the end of the first half of the Yayoi period (approx. BC400~BC100) can be divided into five stages. Period I: a period the pottery with the incised plastic band was born and spread;

the pottery of this kind appeared in the Western Kyûsyû under the influence of the Setouchi and Kinki districts. On that occasion, Nijô-kame unique to this district was born.

Period II: Nijô-kame born in the Western Kyûsyû appeared also in the Setouchi and Kinki districts. Based on this phenomenon, it can be assumed that the paddy farming had been started even in the Setouchi and Kinki districts.

Period III: Itaduke-Ongagawa wares were born in the coastal districts of the Genkai-nada in the Western Kyûsyû (the district from Karatsu-city, Saga Prefecture to Fukuoka-city, Fukuoka Prefecture) and the distribution was expanded. In some regions of the Western Japan from Kyûsyû to Kinki district, the pottery with the incised plastic band almost disappeared, but continued in other regions. Period IV: In the Setouchi district where the pottery with the incised plastic band had disappeared in the period III, the pottery with the incised plastic band reappeared.

Period V: The style of the pottery of this period onward developed further based on the patterns of potteries born in the various regions, as a result of the interchanges of the pottery with the incised plastic band born in the period I and Itaduke-Ongagawa wares born in the period III.

It is possible to vividly reproduce the circumstances how the Yayoi culture, a period of the agriculture unique to Japan, was born and developed in the dissension of the culture introduced from the Asian Continent and the conventional Jômon culture, if the pottery with the incised plastic band is confrontally positioned with the pottery of Itaduke-Ongagawa wares.